

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (13)

東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

なが よし てん じん だん
永吉天神段遺跡 2
第2地点-1

（曾於郡大崎町）

旧石器時代・縄文時代早期・後期編

2017年3月

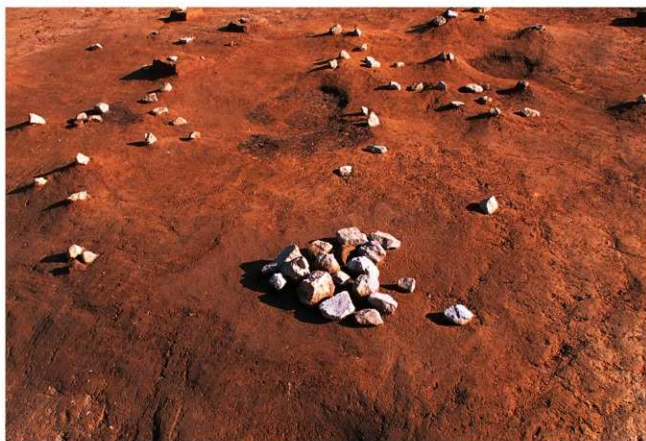
鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



遺跡遠景 第2地点北東部（西側上空から）



第2地点東部中央 縄文時代早期 集石検出状況遠景



縄文時代早期 集石2号と散石



旧石器時代・縄文時代早期の出土遺物

序 文

この報告書は、東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋串良 J C T）の建設に伴って、平成 24～27 年度に実施した曾於郡大崎町に所在する永吉天神段遺跡第 2 地点の発掘調査の記録です。

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターは平成 25 年 4 月に発足しました。当調査センターの役割は、近年増加している国事業に係る発掘調査に円滑に対応するため、従来鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施してきた発掘調査を引き継ぐとともに、新規の国事業に係る発掘調査を実施することにあります。永吉天神段遺跡については、平成 24 年度は、鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行いました。平成 25～27 年度発掘調査と平成 27、28 年度整理作業及び報告書刊行は当調査センターが担当することになりました。なお、発掘調査と整理作業及び報告書作成作業は、株式会社パスコに支援業務を委託し、業務の更なる効率化を図っております。

永吉天神段遺跡第 2 地点では、旧石器時代から近世の遺構・遺物が発見されました。本報告書では、そのうち旧石器時代・縄文時代早期・後期の報告を行っています。

旧石器時代では、ナイフ形石器文化期の石器製作跡や台形石器など、大隅半島の旧石器時代を考える上で、貴重な情報を得ることができました。縄文時代早期では、調理施設と考えられる多数の集石や、食材加工のための石匙・磨石・石皿等が多く発見されています。縄文時代早期の人々の生活の在り方考える上で、有効な情報を得ることができました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

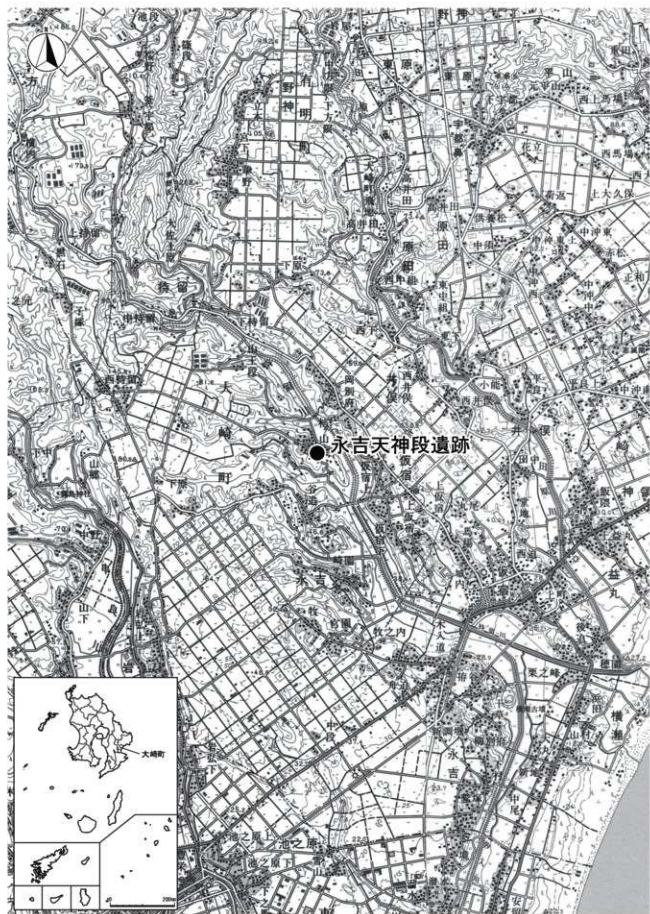
最後に、調査にあたり本県の埋蔵文化財保護のために御指導・御助言いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター、大崎町教育委員会、調査中に御指導・御助言をいただいた先生方、株式会社パスコ、発掘作業員、整理作業員、本遺跡の所在する大崎町永吉の档ヶ山集落の皆様、その他関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 29 年 3 月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長 堂込 秀人

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながよしてんじんだんいせき2 だい2ちてん-1							
書名	永吉天神段遺跡2 第2地点-1 旧石器時代・縄文時代早期・後期編							
副書名	東九州自動車道(志布志IC～鹿屋車良JCT)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	13							
編集者名	伊元俊一・島崎崎辰巳・株式会社バスコ(池田耕一・浦辻崇浩・関口昌和・黒武聖子・関口真由美・飯長武司・松村由記・相川薫)							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL.0995-70-0574 FAX.0995-70-0576							
発行年月日	2017年3月							
ふりがな	コード							
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ながよしてんじんだんいせき 永吉天神段遺跡 だい2ちてん 第2地点	かごしまけん 鹿児島県 そおくん 曾於郡 おおさきちょう 大崎町 ながよし 永吉 あぎてんじん 字 天神	46468	468-104	31° 26' 38"	130° 58' 58"	確認調査 2011.07.01 ～ 2011.09.28 本調査 2012.07.02 ～ 2016.01.27	22,734 m ²	東九州自動車道 (志布志IC～鹿 屋車良JCT)建 設に伴う記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
永吉天神段遺跡 第2地点	散布地	旧石器時代	礫群1基 石器ブロック7箇所		ナイフ形石器, 尖頭器, 角錐状石器, 台形石器, 削器, 搔器, 剥片, 石 核, 蔽石			
	散布地	縄文時代 早期	集石82基 土器埋設遺構1基		前平式土器, 加果山式 土器, 石坂式土器, 下 剥拳式土器, 桑ノ丸式 土器, 押型文土器, 手 向山式土器, 妙見式土 器, 平桁式土器, 壺ノ 神式土器, 釜浜式土器, 条痕文土器, 石鏃, 石 匙, 打製・磨製石斧, 磨石, 石皿, 異形石器			
	散布地	縄文時代 後期			岩崎上層式土器 北久根山式土器 中岳Ⅱ式土器			
要約	<p>本遺跡は持留川とその支流に挟まれた標高約50mのシラス台地縁辺部に位置し、旧石器時代～近世の複合遺跡である。本報告書は、そのうち旧石器時代・縄文時代早期・後期を報告する。</p> <p>主体となる時代は、旧石器時代(ナイフ形石器文化期)と縄文時代早期である。</p> <p>従来、大隅半島の旧石器時代は発掘調査事例が少なく、詳細に調査・研究されてこなかった。本遺跡では、ナイフ形石器文化期の石器製作跡や台形石器など、大隅半島の当該時期を考える上で、貴重な資料となる。</p> <p>縄文時代早期では、調理施設と考えられる多数の集石が検出され、食材加工のための石匙・磨石・石皿等が多く出土した。キャンプサイトのな役割を担っていたものと推測され、周辺遺跡との比較検討することで、縄文時代早期の人々の行動範囲・生活の在り方を考える上で、有効な情報を得ることができた。</p>							



第1圖 遺跡位置図 (1:50,000)

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（志布志 IC～鹿屋串良 JCT）建設に伴う永吉天神段遺跡第2地点旧石器時代・縄文時代早期・後期の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県曾於郡大崎町永吉天神に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局から鹿児島県が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センター及び公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 4 発掘調査は、平成24年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが、平成25～27年度に公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施し、発掘調査（本調査）の全てを終了した。
- 5 整理・報告書作成は、平成27・28年度に公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施し、平成27年度に第1地点を刊行した。
- 6 発掘調査支援業務を株式会社バスコへ委託し、平成24年度は川口雅之、平成25年度は湯場崎辰巳・彌榮久志、平成26年度は湯場崎・彌榮・隈元俊一、平成27年度は隈元・上村俊洋の、指揮・監督のもと調査を行った。また、空中写真撮影は株式会社ふじに再委託した。
- 7 整理作業及び報告書作成支援業務を株式会社バスコへ委託し、平成27年度は湯場崎・隈元、平成28年度は隈元・上村の、指揮・監督のもと業務を実施した。
- 8 遺構図・遺物分布図の作成は、各年度担当職員が、株式会社バスコの協力を得て行った。
- 9 出土遺物の実測・拓本・トレースは、各年度担当者が株式会社バスコの協力を得て行った。なお報告書の作成には adobe 社製「InDesignCC」、「IllustratorCC」、「PhotoshopCC」を使用した。
- 10 出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場にて、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターの隈元・吉岡康弘・辻明啓が行った。
- 11 本報告に係る自然科学分析は、株式会社 パレオ・ラゴ、株式会社 古環境研究所へ委託した。
- 12 執筆担当は以下のとおりである。また本書の編集は隈元が株式会社バスコの協力を得て行った。

第1章 隈元 俊一 湯場崎 辰巳

第2・3章、第4章2・3節、

第5章 第1節、第6章 隈元 俊一

第4章 第1節 関口 昌和

第2節 土器 翁長 武司

浦辻 栄治

石器 関口 昌和

関口 真由美

第5章 第2節 株式会社パレオ・ラゴ

第3節 株式会社古環境研究所

- 13 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。なお、遺物注記等で用いた遺跡記号は「NTJ」である。
- 14 使用した土色は『新版 標準土色帖』（1970、農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
- 15 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 16 本書で使用した方位は、すべて座標北（G. N.）であり、測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
- 17 遺構種別ごとに略記号を付けて調査を行った。以下に遺構の略記号を示す。
RG：磁群 SS：集石 SK：土器埋設遺構
- 18 遺構の縮尺は次のとおりである。
磁群 1/10、土器埋設遺構・土器出土状況 1/20、集石 1/20・1/25・1/30
各図中にスケールは示してある。
- 19 遺物の縮尺は次のとおりである。土器 1/3、小型石器 1/1～1/2、大型石器 1/3～1/4（大型土器・一部大型石器・拓本についてはこの限りでない）。各図中にスケールを示してある。
- 20 掲載遺物番号はすべて通し番号であり、本文、挿図、表及び図版の番号は一致する。
- 21 掲載土器の拓本を表裏とも貼付の場合、表面が左、裏面が右に配置してある。

本文目次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 確認調査	1
第3節 本調査	2
第4節 調査の経過	3
第5節 整理・報告書作成作業	6
第2章 遺跡の位置と環境	8
第1節 地理・地質的環境	8
第2節 歴史的環境	8
第3節 志布志IC～鹿屋申良JCT間の遺跡	14
第3章 調査の方法と層序	20
第1節 調査の方法	20
第2節 層序	24
第4章 調査の成果	31
第1節 旧石器時代の調査	31
第2節 縄文時代早期の調査	53
第3節 縄文時代後期の調査	163
第5章 自然科学分析	166
第1節 自然科学分析の種類と目的	166
第2節 永吉天神段遺跡出土の炭化物分析	166
第3節 永吉天神段遺跡出土の植物珪酸体分析	167
第6章 総括	170
第1節 旧石器時代	170
第2節 縄文時代早期	170

挿図目次

第1図	遺跡位置図	第36図	E-47, F-38, G-23区出土石器	51
第2図	周辺遺跡位置図	第37図	土器埋設遺構及び出土土器	53
第3図	東九州自動車道(志布志IC~鹿屋申良JCT) 建設に伴って調査された遺跡	第38図	縄文時代早期 東部遺構配置図	54
第4図	確認調査トレンチ位置図	第39図	縄文時代早期 中央部遺構配置図	55
第5図	グリッド配置及び調査範囲図	第40図	縄文時代早期 西部遺構配置図	56
第6図	基本土層図	第41図	集石1・2号	57
第7図	土層断面図(1)	第42図	集石3号	58
第8図	土層断面図(2)	第43図	集石4~6号	59
第9図	土層断面図(3)	第44図	集石7・8号	60
第10図	土層断面図(4)	第45図	集石9・10号	61
第11図	土層断面図(5)	第46図	集石11~15号	62
第12図	旧石器時代調査範囲と遺物出土区域	第47図	集石16号	63
第13図	東部調査区出土遺構・遺物分布	第48図	集石17号	64
第14図	第1縄群	第49図	集石18号	65
第15図	ブロック外C-50・51区出土遺物分布	第50図	集石19・20号	66
第16図	第1縄群, 第1・2ブロック及び ブロック外出土遺物分布	第51図	集石21号	67
第17図	第3ブロック及びブロック外出土遺物分布	第52図	集石22号	68
第18図	第1~3縄分布, 第4~7ブロック及び ブロック外出土遺物分布	第53図	集石23・24号	69
第19図	ブロック外F・G-52区出土遺物分布	第54図	集石25・26号	70
第20図	東部調査区出土遺物垂直分布	第55図	集石27号	71
第21図	E-47区出土遺物分布	第56図	集石28~30号	72
第22図	F-38区出土遺物分布	第57図	集石31・32号	73
第23図	G-23区出土遺物分布	第58図	集石33・34号	74
第24図	第2ブロック及びブロック外出土石器	第59図	集石35・36号	75
第25図	ブロック外C-50・51区出土石器	第60図	集石37・38号	76
第26図	第3ブロック及びブロック外出土石器(1)	第61図	集石39・40号	77
第27図	第3ブロック及びブロック外出土石器(2)	第62図	集石41・42号	78
第28図	第3ブロック及びブロック外出土石器(3)	第63図	集石43号	79
第29図	第4ブロック及びブロック外出土石器(1)	第64図	集石44号	80
第30図	第4ブロック及びブロック外出土石器(2)	第65図	集石45号	81
第31図	第5ブロック及びブロック外出土石器	第66図	集石46~48号	82
第32図	第6ブロック出土石器	第67図	集石49号	83
第33図	第7ブロック及びブロック外出土石器	第68図	集石50・51号	84
第34図	ブロック外F-52, G-52・53区出土石器	第69図	集石52号	85
第35図	E-47区出土石器	第70図	集石53~55号	86
		第71図	集石56~58号	87
		第72図	集石59~62号	88
		第73図	集石63・64号	89

第74図	集石65～68号	90
第75図	集石69・70号	91
第76図	集石71・72号	92
第77図	集石73号	93
第78図	集石74～76号	94
第79図	集石77・78号	95
第80図	集石79号	96
第81図	集石80・81号	97
第82図	集石82号	98
第83図	縄文時代早期 集石出土石器	99
第84図	縄文時代早期 東部出土石器(1)	100
第85図	縄文時代早期 東部出土石器分布図	101
第86図	縄文時代早期 東部出土石器(2)	102
第87図	縄文時代早期 東部出土石器(3)	103
第88図	縄文時代早期 東部出土石器(4)	104
第89図	縄文時代早期 東部出土石器(5)	105
第90図	縄文時代早期 東部出土石器(6)	106
第91図	縄文時代早期 東部出土石器(7)	107
第92図	縄文時代早期 東部出土石器及び 出土状況図(8)	108
第93図	縄文時代早期 東部出土石器(9)	108
第94図	縄文時代早期 東部出土石器(10)	109
第95図	縄文時代早期 東部出土石器(11)	110
第96図	縄文時代早期 東部出土石器(12)	111
第97図	縄文時代早期 東部出土石器(13)	112
第98図	縄文時代早期 東部出土石器(14)	113
第99図	縄文時代早期 東部出土石器(15)	114
第100図	縄文時代早期 東部出土石器(16)	115
第101図	縄文時代早期 東部出土石器及び 出土状況図(17)	116
第102図	縄文時代早期 中央部出土石器分布図	117
第103図	縄文時代早期 中央部出土石器(1)	118
第104図	縄文時代早期 中央部出土石器(2)	119
第105図	縄文時代早期 西部出土石器分布図	120
第106図	縄文時代早期 西部出土石器(1)	121
第107図	縄文時代早期 西部出土石器(2)	122
第108図	縄文時代早期 西部出土石器(3)	123
第109図	縄文時代早期 東部出土石器分布図	131
第110図	縄文時代早期 東部出土石器(1)	134
第111図	縄文時代早期 東部出土石器(2)	135
第112図	縄文時代早期 東部出土石器(3)	136
第113図	縄文時代早期 東部出土石器(4)	137
第114図	縄文時代早期 東部出土石器(5)	138
第115図	縄文時代早期 東部出土石器(6)	139
第116図	縄文時代早期 東部出土石器(7)	140
第117図	縄文時代早期 東部出土石器(8)	141
第118図	縄文時代早期 東部出土石器(9)	142
第119図	縄文時代早期 東部出土石器(10)	143
第120図	縄文時代早期 東部出土石器(11)	144
第121図	縄文時代早期 東部出土石器(12)	145
第122図	縄文時代早期 東部出土石器(13)	146
第123図	縄文時代早期 東部出土石器(14)	147
第124図	縄文時代早期 東部出土石器(15)	148
第125図	縄文時代早期 東部出土石器(16)	149
第126図	縄文時代早期 東部出土石器(17)	150
第127図	縄文時代早期 中央部出土石器分布図	152
第128図	縄文時代早期 中央部出土石器(1)	153
第129図	縄文時代早期 中央部出土石器(2)	154
第130図	縄文時代早期 中央部出土石器(3)	155
第131図	縄文時代早期 中央部出土石器(4)	156
第132図	縄文時代早期 西部出土石器分布図	157
第133図	縄文時代早期 西部出土石器(1)	158
第134図	縄文時代早期 西部出土石器(2)	159
第135図	縄文時代後期 出土石器分布図	163
第136図	縄文時代後期 出土石器	164
第137図	暦年校正結果	167
第138図	永吉天神段遺跡の植物珪酸体	169
第139図	永吉天神段遺跡における 植物珪酸体分析結果(2)	169
第140図	県内の埋設土器検出遺跡位置図	170
第141図	札ノ元Ⅶ類土器出土遺跡地図	173
第142図	各遺跡出土の札ノ元Ⅶ類土器	174

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表・・・・・・・・・・	12・13	第10表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	167
第2表	志布志IC～鹿屋申良JCT間の遺跡・・	14～18	第11表	永志天峯遺跡における植物珪酸体分析結果(1)	169
第3表	旧石器時代出土石器観察表・・・・・・・・	52	第12表	県内の石器埋設遺構一覧表・・・・・・・・	170
第4表	縄文時代早期埋設石器観察表・・・・・・・・	99	第13表	各層・形態別集石遺構分類・・・・・・・・	171
第5表	縄文時代早期集石出土石器観察表・・・・・・・・	99	第14表	札ノ元VII類石器出土遺跡一覧表・・・・・・・・	173
第6表	縄文時代早期出土石器観察表・・	124～129	第15表	縄文時代早期石器の器種別数と割合・・	174
第7表	縄文時代早期出土石器観察表・・	160～162	第16表	黒曜石製石器別の産地割合・・・・・・・・	174
第8表	縄文時代後期出土石器観察表・・・・・・・・	165			
第9表	測定試料および処理・・・・・・・・・・	167			

図版目次

巻頭図版1	遺跡遠景	図版24	縄文時代早期出土石器(3)	
巻頭図版2	縄文時代早期の調査状況	図版25	縄文時代早期出土石器(4)	
巻頭図版3	旧石器時代・縄文時代早期の出土遺物	図版26	縄文時代早期出土石器(5)	
本文中写真1	第2地点の土層・・・・・・・・・・	25	図版27	縄文時代早期出土石器(6)
本文中写真2	D-22区土層断面・・・・・・・・・・	25	図版28	縄文時代早期出土石器(7)
図版1	旧石器時代の調査	図版29	縄文時代早期出土石器(8)	
図版2	旧石器時代の調査	図版30	縄文時代早期出土石器(9)	
図版3	旧石器時代の調査	図版31	縄文時代早期出土石器(10)	
図版4	縄文時代早期の調査	図版32	縄文時代早期出土石器(11)	
図版5	縄文時代早期の調査	図版33	縄文時代早期出土石器(12)	
図版6	縄文時代早期の調査	図版34	縄文時代早期出土石器(13)	
図版7	縄文時代早期の調査	図版35	縄文時代早期出土石器(14)	
図版8	縄文時代早期の調査	図版36	縄文時代早期出土石器(15)	
図版9	縄文時代早期の調査	図版37	縄文時代早期出土石器(16)	
図版10	縄文時代早期の調査	図版38	縄文時代早期出土石器(17)	
図版11	縄文時代早期の調査	図版39	縄文時代早期出土石器(18)	
図版12	縄文時代早期の調査	図版40	縄文時代早期出土石器・集石出土石器(19)	
図版13	縄文時代早期の調査	図版41	縄文時代早期出土石器(1)	
図版14	縄文時代早期の調査	図版42	縄文時代早期出土石器(2)	
図版15	縄文時代早期の調査	図版43	縄文時代早期出土石器(3)	
図版16	縄文時代早期の調査	図版44	縄文時代早期出土石器(4)	
図版17	縄文時代早期の調査	図版45	縄文時代早期出土石器(5)	
図版18	縄文時代早期の調査	図版46	縄文時代早期出土石器(6)	
図版19	縄文時代早期の調査	図版47	縄文時代早期出土石器(7)	
図版20	旧石器時代出土石器(1)	図版48	縄文時代後期出土石器	
図版21	旧石器時代出土石器(2)			
図版22	縄文時代早期出土石器(1)			
図版23	縄文時代早期出土石器(2)			

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志1C～末吉財部1C区間の事業に先立って、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会に照会した。

この計画に伴い鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）は、平成11年1月に鹿屋串良JCT～末吉財部1C間を、平成12年2月には志布志1C～鹿屋串良JCT間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50か所の遺跡（調査対象面積854,100㎡）が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、県文化財課、県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の4者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の厳密な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査や確認調査が実施されることとなった。

そこで、県文化財課は、まず、平成13年1月29日から2月6日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡、加治木堀遺跡、石輪遺跡、十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに、平成13年7月10日から7月26日に鹿屋串良JCT～末吉財部1C間の工事計画図をもとに33か所の遺跡について詳細分布調査を実施し、同年9月17日～10月26日及び12月3日～12月25日の2期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて、既に合意されていた本線工用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり、関山西遺跡、関山遺跡、狩俣遺跡の3遺跡を対象に平成13年10月1日から平成14年3月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年4月には、志布志1C～鹿屋串良JCT間の遺跡について再度分布調査を実施した結果、遺跡の調査対象範囲が678,700㎡となった。

その後、日本道路公団民営化の協議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月に大隅1C（平成21年4月28日、「曾於弥五郎1C」へ名称変更）か

ら末吉財部1C間の発掘調査協定書締結、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書が締結され、工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま継続されることとなった。

また、日本道路公団からの委託業務は曾於弥五郎1Cまでで終了し、曾於弥五郎1Cからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

第2節 確認調査

永吉天神段遺跡の確認調査は、県内遺跡事前調査事業で平成23年7月1日から同年9月28日に実施した。

1 調査体制

事業主体	鹿児島県教育委員会
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	県立埋蔵文化財センター
	所長 寺田 仁志
調査企画	次長兼総務課長 田中 明成
	次長兼南の縄文の森調査室長 井ノ上秀文
	調査第一課長 堂込 秀人
	調査第一課第二調査係長 大久保浩二
調査担当	文化財主事 馬籠 亮道

2 調査の経過

調査の経過は、日誌抄を月ごとに集約して記載した。写真撮影は適宜行っているので記述を省略した。

7月

調査開始。調査施設設営及び環境整備。1～31トレンチ（以下、T）を設定・掘削。

8月

トレンチ調査。遺物取上げ。1T：旧石器時代剥片・縄文時代早期被熱破砕礫出土。2T：方形竪穴住居跡検出。弥生土器・石剣出土。4T：柱穴検出。下葺式土器・被熱破砕礫出土。8T：柱穴検出。磨製石鏃出土。15T：縄文時代早期土器片出土。16T：Ⅱ層遺物集中部下部硬化面検出。23T：Ⅱ層土器片及び柱穴検出。V層被熱破砕礫出土。24T：柱穴検出。隣接地の民家敷地から古銭を多量に採取。27T：Ⅱ・Ⅲ層土器片が密集して出土。Ⅶ層（サツマ層上面）柱穴検出。30T：Ⅱ層土器片出土。Ⅲ層縄文時代後期土器片出土。9月

29・30・31トレンチ調査。遺物取上げ。埋め戻し。16T：硬化面を竪穴住居跡と判断。6・15・18T：縄文時代早期土器片（石坂式土器）出土。12・13・16・21・27T：弥生・古墳時代土器片（山ノ口式土器・東原へ堂原式

土器)出土。30・31 T:縄文時代晩期土器片(組織痕土器)出土。文化庁林調査官来跡(14日)。

第3節 本調査

確認調査の結果、遺物の集中は調査対象地の広い範囲で確認され、主に中世～古代、古墳・弥生時代、縄文時代晩期・早期、旧石器時代の包含層が確認された。調査対象範囲が広大であり、各地点で存在する包含層の時期や内容には差があるが、調査対象面積37,100㎡、調査対象延面積87,588㎡と確認した。

確認調査の結果を踏まえ、改めて遺跡の取り扱いについて県文化財課、国土交通省、埋文センターの3者で協議し、遺跡の現地保存は困難であることから、埋文センターが本調査を実施することとなった。平成24年度は埋文センターが本調査を実施し、発掘調査は、「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査(民間委託)実施要綱」に基づき、株式会社バスコへ発掘調査業務の委託を行い実施した。

平成25年度からは、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を含めた国事業関係を円滑に進めるために発足した公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(以下、埋文調査センターという)が、県から受託して発掘調査を進めることになった。

平成27・28年度の整理作業・報告書作成業務は、「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要綱」に基づき、株式会社バスコへ整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行い実施した。

本調査は、平成24年7月2日から平成25年1月28日(第1地点含む)、平成25年6月13日から平成26年1月28日、平成26年5月12日から平成27年1月28日、平成27年5月11日から平成28年1月27日(第3地点含む)までの期間実施した。調査体制は、以下のとおりである。

1 調査体制

1) 平成24年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	県立埋蔵文化財センター 所長 寺田 仁志 次長兼総務課長 新小田 穰 次長兼南の縄文調査室長 井ノ上秀文 調査第二課長 富田 逸郎 調査第二課第一調査係長 八木澤一郎 文化財主事 川口 雅之
調査担当	文化財主事 大園 祥子
調査事務	主幹兼総務係長 岡村 信吾 主査

現地指導	鹿児島大学大学院理工学研究科 准教授 井村 隆介 福岡大学人文学部教授 武末 純一
------	---

2) 平成25年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課 (公財)鹿児島県文化振興財団
調査統括	埋蔵文化財調査センター長 富田 逸郎 総務課長兼総務係長 山方 直幸 調査課長 鶴田 静彦 調査第一係長 八木澤一郎 文化財専門員 湯崎崎辰巳 文化財専門員 彌榮 久志
事務担当	主 査 岡村 信吾
現地指導	福岡大学人文学部教授 武末 純一

3) 平成26年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課 (公財)鹿児島県文化振興財団
調査統括	埋蔵文化財調査センター長 堂込 秀人 総務課長兼総務係長 山方 直幸 調査課長 八木澤一郎 調査第一係長 中村 和美 文化財専門員 湯崎崎辰巳 文化財専門員 彌榮 久志 文化財専門員 隈元 俊一
事務担当	主 査 岡村 信吾
現地指導	福岡大学人文学部教授 武末 純一 福岡大学人文学部教授 桃崎 祐輔 鹿児島大学法文学部教授 本田 道輝 鹿児島大学教育学部教授 日隈 正守

4) 平成27年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課 (公財)鹿児島県文化振興財団
調査統括	埋蔵文化財調査センター長 堂込 秀人 総務課長兼総務係長 有村 貢
調査企画	鹿児島国際大学 国際文化学部教授 中園 聡 鹿児島県立短期大学 生活科学科教授 揚村 園 鹿児島女子短期大学助手 下野真理子

	調査課長	八木澤一郎
	調査第一係長	中村 和美
調査担当	文化財専門員	隈元 俊一
	文化財専門員	上村 俊洋
事務担当	主 査	荒瀬 勝己
現地指導	鹿児島大学大学院	
	理工学研究科准教授	井村 隆介
	大分県立歴史博物館	
	企画普及課長	原田 昭一

2 発掘調査の民間委託

発掘調査の実施にあたり、埋文センター及び埋文調査センターは「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき、株式会社バスコへ発掘調査の委託を行った。

なお、埋文センター及び埋文調査センターの各年度調査担当職員が常駐監視して、統括、指揮及び運営を行った。委託内容等は以下のとおりである。

1) 平成24年度

委託先	株式会社バスコ
契約期間	平成24年6月8日～平成25年2月22日
委託内容	発掘調査業務 1式
	測量業務 1式
	土工業務 1式
担当者	主任技術者 新川 浩
	主任調査員 池畑 耕一
	調査員 西田 茂 丸山 清志
	黒沢 聖子
	測量技士 小林 進哉
検 査	中間検査 平成24年10月18日
	完成検査 平成25年2月13日（実地検査）
	平成25年2月15日（成果物検査）

2) 平成25年度

委託先	株式会社バスコ
委託期間	平成25年6月3日～平成26年3月14日
委託内容	発掘調査業務 1式
	測量業務 1式
	土工業務 1式
担当者	主任技術者 川野 勝弘
	主任調査支援員 池畑 耕一
	調査支援員 西田 茂 秀嶋 龍男
	黒沢 聖子 翁長 武司
	宮本 栄二
	測量技士 小林 進哉
検 査	中間検査 平成25年10月10日
	完成検査 平成26年2月19日（実地検査）
	平成26年3月4日（成果物検査）

3) 平成26年度

委託先	株式会社バスコ
委託期間	平成26年4月11日～平成27年3月12日
委託内容	発掘調査業務 1式
	測量業務 1式
	土工業務 1式
担当者	主任技術者 川野 勝弘
	主任調査支援員 西田 茂
	調査支援員 池畑 耕一 上屋 眞一
	秀嶋 龍男 小柳 太一
	関口 昌和 関口 真由美
	黒沢 聖子 翁長 武司
	玉城 乾一朗 宮本 栄二
	測量主任技士 中野 広行
	測量技士 河野 正博
検 査	中間検査 平成26年10月16日
	一部完成検査 平成26年12月19日
	（工事着手に伴う一部引き渡しのため）
	完成検査 平成27年3月3日（実地検査）
	平成27年3月5日（成果物検査）

4) 平成27年度

委託先	株式会社バスコ
委託期間	平成27年4月13日～平成28年3月11日
委託内容	発掘調査業務 1式
	測量業務 1式
	土工業務 1式
担当者	主任技術者 川野 勝弘
	主任調査支援員 西田 茂
	調査支援員 上屋 眞一 浦辻 栄治
	関口 昌和 翁長 武司
	宮本 栄二 島田 由利佳
	測量主任技士 中野 広行
検 査	一部完成検査 平成27年8月10日
	（工事着手に伴う一部引き渡しのため）
	中間検査 平成27年10月21日
	完成検査 平成28年2月23日（実地検査）
	平成28年3月1日（成果物検査）

第4節 調査の経過

第2地点の調査は、平成24年度から27年度まで実施したが、平成24年度および27年度は、第2地点に関わる部分のみを記載している。なお、各年度とも表土から旧石器時代の全調査経過を記載している。

1) 平成24年度

第1地点と、第2地点の48区以東を調査対象とした。第1地点の調査経過については、「埋蔵文化財調査センター報告書（8）」に記載してある。

7月

調査開始（2日）。新規入場者教育。環境整備。表土

剥ぎ。II層調査。

8月

H～K-52～55区II層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。全景写真撮影。

おおさきっこ歴史探検隊発掘体験（3日）。

9月

B～I-49～53区、F～I-57～61区表土剥ぎ。B～D-49～53区、F～I-50～53区、K・L-51～53区II・III層調査。竪穴住居跡多数検出。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

10月

C～F-49～53区、D～H-47～49区、I-48・49区表土剥ぎ。D～K-48～54区II層調査。遺構調査。地形測量。竪穴住居跡21軒・円形溝1基検出。

南日本新聞社取材（24日）。

11月

E～H-47・48区表土剥ぎ。C～E-47～50区、F～H-47～49区II層調査。遺構調査。地形測量。中世の竪穴建物・土坑検出。

12月

D-48区II層調査。D-48・49区で土坑2基検出。遺構調査。下層確認調査（5×5mのトレンチ8本設定）。空撮（4日）。

南日本新聞社取材（5・8日）。福岡大学武末純一教授現地指導（6・7日）。現地説明会（8日：見学者：270名）

1月

弥生時代中期の遺構調査。S I 23は次年度調査へ。下層確認調査で縄文時代早期の包含層が全面にあることを確認。旧石器時代包含層をC～G-50～53区約1,400㎡で確認。遺物水洗い。遺構埋土フローテーション。調査終了。

2）平成25年度

平成24年度調査継続区C～L-48～55区（縄文時代早期・旧石器時代調査）をA地点、C～J-26～47区（縄文時代早期～近世調査）をB地点として調査を行った。調査経過は、各地点ごとに記載する。本年度から、民間委託支援業務として、基礎整理作業（水洗い・注記・接合）も併行して行う。

〔発掘調査〕

6月

調査開始（10日）。新規入場者教育。環境整備。

A地点（旧石器時代・縄文時代早期調査）

D～K-48～55区IV層重機掘削。D～I-48～51区V層調査。F・G-49・50区III層での掘立柱建物跡調査（調査番号S B 8・9）。

B地点（縄文時代早期～中世調査）

G～I-38～43区表土剥ぎ。II層調査。土坑墓（SK 30）・溝状遺構の検出・調査。遺物取り上げ。

県文化財課中村和美文化財主事監理業務（11日）。

7月

A地点（旧石器時代・縄文時代早期調査）

E～L-48～53区IV層重機掘削。D～I-48～51区V層調査。遺物出土・取り上げ。E・F-52・53区、G・H-53・54区遺構の広がりを調査のため、表土剥ぎ、II層調査。

B地点（縄文時代早期～中世調査）

F・G-49・50区III層掘立柱建物跡調査終了。D～F-32～35区、40～45区表土剥ぎ。D～F-32～35区・40～45区・G～I-38～43区II層の遺構調査。II層から縄文時代晩期～中世の遺物が多数出土。

中村和美文化財主事監理業務（3日）。鳥取県埋蔵文化財センター長他2名現地視察（19日）。給良市チャレンジ！遺跡発掘体験&キャンプ泊（23日：38名）

8月

A地点（旧石器時代・縄文時代早期調査）

C～E-47～53区表土剥ぎ。C～L-49～55区V層調査。集石45基検出・調査。遺物取り上げ。地形測量。

B地点（縄文時代早期～中世調査）

E～J-37～43区表土剥ぎ・II層調査。土坑墓より白磁・湖州六花鏡（SK 30）、土師皿3点（SK 32）出土。弥生時代中期竪穴住居跡多数検出・調査。

霧島市キッズ発掘体験（6日：18名）、埋文センター堂込秀人調査課長監理業務（7日）。熊本大学社会教育主事講習（8日：15名）。喜界町教育委員会現地視察（9日：7名）。

9月

A地点（旧石器時代・縄文時代早期調査）

C～F-48～53区、G～I-52～54区V層調査。集石13基検出・調査。遺物取り上げ。地形測量。

B地点（縄文時代早期～中世調査）

D～F-30・31区・37～39区・44・45区表土剥ぎ。D～J-37～45区II層調査。遺構調査。遺物取り上げ。古環境研究所（19日：植物珪酸体分析現地採取）。京都府立大学生見学（24日：6名）

10月

A地点（旧石器時代・縄文時代早期調査）

C～G-50～53区VI～IX層重機掘削。X層調査。礫群・石器製作跡調査。ナイフ形石器等出土・取り上げ。地形測量。C～L-48～55区調査終了。

B地点（縄文時代早期～中世調査）

D・E-29・30区表土剥ぎ。D～F-37～39区IV層重機掘削。E-45・46区、G-36・37・43・44区、J-40～43区II層調査。竪穴住居跡・掘立柱建物跡等遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

福岡大学武末純一教授現地指導（1・2日）。湧水町田尾遺跡作業員一行見学（1日：24名）。志布志市有明地区高齢者学級見学（4日：24名）。中間検査（10日）。空撮（16日）。埋蔵文化財発掘調査現地研修会（29日：15名）

11月

B地点（縄文時代早期～中世調査）

D・E-37～47区、F-1-36～39区IV層及びF-38区VII～IX層重機掘削。D～F-30～35区II・III層調査。土坑墓1基等検出。堅穴住居跡・掘立柱建物跡等遺構調査。D・E-37～47区、F-1-36～39区V層調査。

S123～41調査終了。F-38区X層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

現地説明会（9日：見学者310名）。鹿児島県大隅地域振興局局長・建設部長見学（12日）。バリノ・サーヴェイ（15日：テフラ現地採取）。埋文センター堂込秀人調査課長監理業務（22日）。埋文センター井ノ上秀文所長監理業務（25日）。曾於地区文化協会見学（27日：13名）12月

B地点（縄文時代早期～中世調査）

C-27・28区、D-28・29区、G・H-44～46区、I-44区表土剥ぎ。D～H-30～44区IV層の重機掘削。D～F-30～34区VI～IX層の重機掘削。C・D-27～29区II・III層、D～F-30～34区・G～J-40～43区V層、D～F-30～34区・D～G-36～47区X層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

1月

B地点（縄文時代早期～中世調査）

E・F-36区表土剥ぎ。E～G-33～36区・E～I-40～47区IV層、H・I-40・41区VII～IX層重機掘削。E～G-33～36区、H・I-43～45区II・III層、E～G-33～36区、F-40～47区、G～I-43・44区、G-45～47区V層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

埋蔵文化財専門職員養成講座（17日）

〔整理作業〕

24年度出土遺物について、水洗い・注記等が未済のものがあったため、6月からこの作業を優先とした。6・7月に水洗い・注記。7～9月に分類・接合。25年度出土遺物については7月から水洗い・注記を始め、その後、分類・接合・台帳作成を行った。2月5日に埋蔵文化財センターに収納。

3) 平成26年度

26年度は、C～L-18～41区を中心に、縄文時代早期から中世の調査を行った。また、地形観察用の土層ベルト沿いに2m幅のトレンチを設定して、VII層（サツ

マ火山灰層）上面にて縄文時代早期の遺構確認を行い、さらに旧石器時代の下層確認調査を行った。遺物の出土が見られた箇所については一部拡張し、遺物の広がりがないかを確認した。なお、D～J-24～28区は弥生時代から中世に造られた墳丘等が予想されたため、表土から人力による掘削を行った。

〔発掘調査〕

5月

調査開始（7日）。C～K-18～22区表土剥ぎ、II層調査。D～J-24～28区人力掘削による調査。県文化財課黒川忠広文化財主事監理業務（20日）。

6月

C～K-18～23区II層調査。D～J-24～28区II層調査。

弥生時代中期の土坑墓等多数検出。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

7月

C～K-18～23区III層・V層調査。D～J-24～28区II～III層調査。遺構調査。遺物取り上げ。

文化庁高橋宏治記念物課長現地視察（1日）。

8月

I・J-36～38区表土剥ぎ、及びII・III層調査。K・L-38～40区、C～E・H・I-20～22区V層調査。J-19～22区VII層重機掘削、及びVII～X層調査。D～J-24～28区II・III層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

空撮（12日）。鹿児島大学本田道輝教授、鹿児島国際大学中園聡教授、鹿児島県立短期大学揚村園教授現地指導（19日）。福岡大学武末純一教授現地指導（20・21日）。大崎町おおさきっこ歴史探検隊発掘体験（20日：15名）。志布志市立宇都中学校職員研修（20日：2名）。

9月

F～H-21・22区、I～L-36～38区IV層重機掘削、及びV層調査。D-20～22区、K・L-39区VII層重機掘削、及びVII～X層調査。E～K-27～30区表土剥ぎ、及びII・III層調査。D～J-24～28区II・III層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

大崎町ひまわり女性講座見学（4日：28名）。弥生時代中期墓域についての現地報道発表（10日）。鹿児島女子短期大学下野真理子助手現地指導（10日）。現地公開（13日：370名）。

10月

E～K-27～32区、I～L-36～38区表土剥ぎ、II・III層調査。D・E-23～26区、I～K-23～26区V層調査。D～I-23区、G-22区VII層重機掘削、及びVII～X層調査。D～J-24～28区II・III層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

全理協の四国・中国・九州ブロック会議見学（3日）

22名)。福岡大学桃崎祐輔教授現地指導(7日)。中間検査(16日)。大崎町立菱田小学校見学(23日:17名)。

11月

J・K-33・35区, H~L-36~38区Ⅱ・Ⅲ層調査。D~K-23~30区Ⅳ層重機掘削, 及びV層調査。D~F-27区, G-23~26区, J-25・26区, J・K-27区Ⅶ層重機掘削, 及びⅧ~X層調査。

鹿児島大学日隈正守教授現地指導(6日)。現地公開(8日:210名)。大隅教育事務所埋蔵文化財現地研修会(11日:10名)。大崎町立中沖小学校見学・地層学習(13日:19名)。

12月

K-24~26区, K・L-33~35区Ⅲ層調査。E・F-28・29区, G-27・28区, H~K-27区, H~L-36~38区V層調査。G~I-23・24区, G-27区Ⅶ層重機掘削, 及びⅧ~X層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

黒川忠広文化財主事(12・22日)・埋文センター前迫亮一調査課長(19日)監理業務。一部完成検査(19日)。

1月

K・L-27~31区Ⅲ層・V層調査。F~L-28~32区V層調査。G-29・30区, G~I-27・31区, J・K-23・24区, K-31区, H~K-36区, J-36~38区Ⅷ層~X層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。調査終了。

〔整理作業〕

未済であった25年度出土遺物について, 6月に水洗い・注記を行った。26年度分については7月から水洗い・注記を始め, 9月~1月は併行して分類・接合を行い, 2月4日に埋蔵文化財調査センターに収納した。

4) 平成27年度

平成27年度は, 第2地点と谷を挟んだ遺跡西側にある第3地点と併せて, 第2地点の町道部分の調査(8月から)を行った。地層観察用の土層ベルト沿いに4m幅のトレンチを設定して, Ⅷ層(サツマ火灰層)上面にて縄文時代早期の遺構確認調査と旧石器時代の下層確認調査を行った。遺物の出土が見られた箇所については, 一部拡張を行い遺物の広がりがないかを確認した。なお, 第3地点については今後報告書刊行を予定しているため, 調査経過については除外した。5~7月は第3地点のみ調査を行い, 8月以降に第2地点を含めて調査を行った。

5月~7月

調査開始(5月11日)。7月までは第3地点のみ調査を行った。

埋文センター福山徳治所長監理業務(5月14日)。大崎町高齢者講座遺跡見学(6月11日:13名)。黒川忠

広文化財主事監理業務(7月16日)。

8月

K・L-32, I・J-34・35区表土剥ぎ。K・L-32区Ⅱ・Ⅲ層調査。K・L-32区V層調査。

空撮(5日)。一部完成検査(10日)。

9月

L-31区表土剥ぎ, Ⅱ・Ⅲ・V層調査。

大崎町モニターツアー鹿児島大学学生(18日:8名)

10月

G~J-33・34区, G・H-35・36区, G~I-37区, I・J-38・39区表土剥ぎ。G~J-33・34区, G・H-35区, G-36区Ⅱ・Ⅲ層調査。

中間検査(21日)。

11月

D・E-28区, D~F-29区, E~G-30・31区, F・G-32区, I・J-32区, F~J-33区, G~J-34・35区, G~I-36区Ⅱ・Ⅲ層調査。

鹿児島大学大学院井村隆介准教授現地指導(2日)。電柱撤去作業終了(24日)。

12月

E~G-30・31区, F・G-32区, I・J-32区, F~J-33区, G~J-34・35区, G~I-36区Ⅱ・Ⅲ層調査。J-33区, G・H-34区V層調査。J-33区Ⅷ~X層調査。

大崎町教育委員会来訪(2日:2名)。空撮(4日)。大分県立歴史博物館原田昭一企画普及課長現地指導(9~10日)

1月

E~G-31・32区, I・J-32区, H-36区Ⅱ・Ⅲ・V層調査。J-34・35区, G・H-34区, E~G-31区旧石器調査。

地下式坑報道発表(18日)。報道機関現地公開(21日)。
〔整理作業〕

未済であった26年度出土遺物について, 5・6月に水洗い・注記を行った。27年度出土遺物については6月から水洗い・注記を始め, 併行して10~1月に分類を行い, 1月は接合を行った。2月4日に埋蔵文化財センターに遺物を収納した。

第5節 整理・報告書作成作業

本報告書に伴う整理・報告書作成作業は, 県から受託を受けた埋文調査センターが平成27・28年度に実施した。平成27年4月~平成28年3月(作業期間5月~2月)は, 永吉天神段遺跡整理作業場を中心に行った。平成28年4月~平成29年3月(作業期間5月~2月)は, 上野原縄文の森の第2整理作業所で行った。なお, 平成25~27年度は, 発掘調査の一部作業として基礎的整理作業(水洗い・注記中心)を行った。

作業内容は、以下のとおりである。

1 整理作業

1) 遺構

実測図と図面台帳との照合、遺構別・時代別に実測図の仕分け等

2) 遺物

ア 土器・石器共通

水洗い、遺構内出土遺物と包含層出土遺物との仕分け、遺物と遺物台帳や遺構実測図との照合

イ 土器の注記、分類、実測する土器の選別

ウ 石器と一般礫の仕分け、分類、実測する石器の選別

2 報告書作成作業

1) 遺構図のデジタルトレース、遺構配置図の作成、

報告書掲載用写真選別

2) 土器の実測、拓本、トレース、レイアウト、観察表作成、原稿執筆、報告書掲載用写真撮影

3) 石器の実測及び実測委託、トレース、レイアウト、観察表作成、原稿執筆、報告書掲載用写真撮影

4) 土器・石器以外の遺物の実測、トレース、観察表作成、原稿執筆、報告書掲載用写真撮影

また、南九州縄文研究会代表の新東晃一先生に縄文時代早期の土器に関する指導をいただいた。

3 作成体制

1) 平成27年度(平成27年4月～平成28年3月)

事業主体 国土交通省九州地方整備局

大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会

作成統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団

埋蔵文化財調査センター長 堂込 秀人

作成企画 総務課長兼総務係長

有村 貢

調査課長 八木澤一郎

調査第一係長 中村 和美

作成担当 文化財専門員

湯場崎辰巳

文化財専門員 隈元 俊一

事務担当 主査

荒瀬 勝己

報告書作成指導委員会

6月8日、8月18日、11月9日、11月26日

調査課長ほか 5名

報告書作成検討委員会

6月8日、8月18日、10月14日、11月9日、

11月30日 センター長ほか 5名

2) 平成28年度(平成28年4月～平成29年3月)

事業主体 国土交通省九州地方整備局

大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会

作成統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団

埋蔵文化財調査センター長 堂込 秀人

作成企画 総務課長兼総務係長 有村 貢

調査課長 八木澤一郎

調査第一係長 中村 和美

作成担当 文化財専門員 隈元 俊一

文化財専門員 上村 俊洋

事務担当 主査 荒瀬 勝己

報告書作成指導委員会

6月1日、8月23日、10月6日、11月4日

調査課長ほか 6名

報告書作成検討委員会

6月6日、8月26日、10月11日、11月8日、

11月28日 センター長ほか 5名

2 整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託

整理作業・報告書作成作業の実施にあたり、埋文調査センターは「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要綱」に基づき、株式会社バスコへ整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行った。委託内容は以下のとおりである。

1) 平成27年度

委託先 株式会社バスコ

契約期間 平成27年4月13日～平成28年3月11日

作業期間 平成27年5月11日～平成28年1月28日

委託内容 報告書作成作業支援業務 1式

整理作業支援業務 1式

印刷製本業務 1式

担当者 主任調査支援員 池畑 耕一

調査支援員 黒沢 聖子 関口真由美

松本 拓

検査 中間検査 平成27年10月21日

完成検査 平成28年3月1日

2) 平成28年度

委託先 株式会社バスコ

契約期間 平成28年4月11日～平成29年3月10日

作業期間 平成28年5月9日～平成29年2月17日

委託内容 報告書作成作業支援業務 1式

整理作業支援業務 1式

自然科学分析業務 1式

印刷製本業務 1式

担当者 主任調査支援員 池畑 耕一

調査支援員 浦辻 栄治 関口 昌和

関口真由美 翁長 武司

松村 由記 相川 薫

検査 中間検査 平成28年10月25日

完成検査 平成29年3月

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理・地質的環境

曾於郡大崎町は、鹿児島県の東南部、大隅半島の東部に位置する。東は志布志市、南は肝属郡東串良町、西は鹿屋市、北は曾於市と接し、南東は志布志湾に面している。

大隅半島は、南北方向に走る山地、その間の丘陵、台地及び低地などの低地帯から構成され、地質は大部分がシラス、ボラなどの火山灰土壌となっている。

東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に張り出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山(1,119 m)である。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された給良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600 m級の山々と、南部の大笠権岳(1,236.8 m)を主峰に横岳・御岳など1,000 m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は、ともに九州山地の延長上にあり、それらの間は丘陵や台地及び低地帯となっている。これらの山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は、南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や、湾奥に形成された給良カルデラの入戸火砕流で、これらの火砕流をはじめとする噴出物の堆積がベースとなっている。噴出物は、堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開削されるが、丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず、広大な台地となっている。

一方低地は、高隈山地や鰐塚山地などを水源とする大小の河川が走り、志布志湾、鹿児島湾などに注いでいる。この河川は上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また、幾段かの河岸段丘も認められる。海岸線には砂丘の形成される所もあり、特に東側の志布志湾岸では幅広い。

大崎町の地形は、北部に菱田川とその上流にあたる大島川、東部を田原川、中央部を持留川が南流し、志布志湾に注いでいる。大崎町の地勢は概ね2つに分けられ、北端部は大島川を中心として河川が溶結凝灰岩を切り開き、起伏の激しい渓谷を構成している。中部から南部地帯は北西から東南の海岸線に向かって、緩やかに傾斜している起伏の少ない平坦な地形であり、場所によっては志布志湾まで見通せる。これらの河川によって台地は区切られ、西部から永吉台地、仮宿台地、飯隈(中沖)台地に分けられる。永吉台地の西側を串良川、永吉台地と仮宿台地の間を持留川、飯隈台地の東側を菱田川が流れている。

台地の大部分は、約29,000年前の給良カルデラ起源

のシラス土壌の上に形成された「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌が広がっている。

大崎町は、志布志町から東串良町まで約16 kmにわたって続く幅1～1.5 kmの砂丘海岸のほぼ中央部にあたる。菱田川河口から南西に弧状を描いて、東串良町に至るまで約7 kmの海岸線があり、弥生時代などの遺跡は数mにわたって砂に厚く覆われている。

永吉天神段遺跡は、永吉台地の東側縁部に位置し、志布志湾から直線距離で約6 kmある。持留川とその支流に、東側と南西側を挟まれた標高約35 mの河岸段丘及び標高約50 mの舌状台地に立地する。調査前は宅地あるいは畑地であった。持留川の流域沿いには、下廻遺跡や荒園遺跡・麦田下遺跡・高久田A遺跡などがあり、本遺跡同様、旧石器時代～中世の遺構・遺物が確認されている。また、台地の麓には産三所大権現や朽々山古石塔群が所在し、付近の民家では多量の古銭が採取されていることから、中・近世においても歴史的に重要な地域であったことがうかがえる。

第2節 歴史的環境

大崎町では、主に田原川、持留川、菱田川、大島川を臨む台地の縁部に沿って遺跡の分布がみられる。本遺跡の周辺は、これまで本格的な発掘調査がなされていなかったため詳細は不明であったが、近年大隅グリーンロードや東九州自動車道建設などに伴う発掘調査によって、次第に歴史的様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

現在のところ、大崎町内における既知の旧石器時代の遺跡は少ない。野方の天神段遺跡でナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡及び石器類が、持留の二子塚A遺跡で黒曜石・チャート製の剥片が発見されている。永吉天神段遺跡とは持留川を挟んだ対岸にある、仮宿の荒園遺跡では、細石刃文化期の石器類が発見されている。永吉台地の東端に位置する宮脇遺跡では、石器製作過程の所産と思われる石核、フレーク、チップ等が出土している。永吉天神段遺跡では、ナイフ形石器文化期と思われる台形石器や角錐状石器が出土している。

周辺の市に目を向けると、大崎町の東側に隣接する志布志市では、志布志町安楽の輪崎追跡跡から縄群1基と細石刃・細石刃核・剥片尖頭器が出土している。また同町内の倉の八郎ヶ野遺跡から頁岩・黒曜石の破片が、倉園B遺跡、道重遺跡から細石刃・細石刃核、井出平遺跡から細石刃核・黒曜石片が出土している。同市松山町新橋の牧ノ原B遺跡からナイフ形石器、蔵野B遺跡から縄群5基、ブロック15基とともに、ナイフ形石器・三稜

尖頭器・台形石器・剥片等が出土している。

大崎町の西側に隣接する鹿屋市では、白水町の西丸尾遺跡から、礫群5基、ブロック7基とともに、ナイフ形石器・剥片尖頭器・台形石器・スクレイパー等が、隣接する西丸尾B遺跡から土坑1基が検出され、剥片が出土している。同市郷の原町榎崎の榎崎A・B遺跡から礫群10基・ビット21基とともに、細石刃・水晶製細石刀核・削器・掘器・局部磨製石斧等が出土している。

縄文時代

本遺跡周辺では縄文時代の発掘調査が増えつつある。

早期では野方の天神段遺跡で、竪穴式住居跡・多数の集石・連穴土坑・落とし穴状遺構等と、前平式・桑ノ丸式・石坂式・塞ノ神式・苔浜式土器、石鏝・打製石斧が、二子塚遺跡で集石と、吉田式・石坂式・塞ノ神式土器、石鏝・石匙などが出土している。井俣では金丸城跡で石坂式土器・石鏝・凹石などが、岡別府の下堀遺跡では集石13基や土坑と、前平式・石坂式・桑ノ丸式・平袴式・塞ノ神式土器、石鏝・石錐等が発見されている。平良上C遺跡では、竪穴住居跡・集石・連穴土坑と、石坂式・下刺釜式土器が、仮宿の荒園遺跡では、集石や土坑と、前平式・石坂式・桑ノ丸式・平袴式・塞ノ神式土器、石鏝・石匙、耳栓などが出土している。串良川の東側、永吉台地の西端にある串良町細山田の益畑遺跡では、前平式土器の時期の竪穴住居跡2軒、連穴土坑16基、集石85基、土坑160基などが検出された。他に前平式・吉田式・石坂式・下刺釜式・辻タイプ・桑ノ丸式・塞ノ神式土器などをはじめ、石鏝・石皿・磨石・敲石・石斧・ハンマーなどの石器や、黒曜石・チャート・蛋白石などの石材も出土した。

前期では、天神段遺跡で燧燧式土器に伴い西日本最古となるその時期の石剣や、石鏝・石皿・磨石等の多数の遺物が出土している。野方の立山B遺跡で、燧燧式土器が出土している。

中期では、立山B遺跡で阿高式土器が出土している。持留の京の塚遺跡では前期末から中期前半の土坑が150基以上検出され、その性格などが注目されている。また、在地の深浦式土器とともに東海系土器、近畿地方の大歳山式土器、瀬戸内～北部九州系の鷹島式・船元式土器が出土していることから広域な交流を示している。石鏝・石匙など石器が非常に多く出土している。

後期では、京の塚遺跡で丸尾式・辛川式・西平式・中岳Ⅱ式土器、磨石・石皿などが出土している。下堀遺跡では、指宿式・擬似磨消縄文系土器が、細山田遺跡では、土坑や丸尾式・北久根山式・西平式・御領式土器が確認されている。

晩期では、天神段遺跡で、竪穴住居跡・土坑群とともに、入佐式・黒川式土器、石鏝・打製石斧・磨製石斧・砥石が出土している。立山B遺跡と細山田遺跡で、黒川式

土器が出土している。京の塚遺跡では入佐式・黒川式土器が出土している。永吉天神段遺跡第1地点では突帯文土器の伴う竪穴住居跡や鉢・壺、打製石斧・石鏝・石匙・石皿などが発見されている。第2地点でも同時期の土器などが出土している。

弥生時代

砂丘後背地に立地する益丸の沢目遺跡は、砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成11年に行われた発掘調査で、竪穴住居跡53軒・土坑約20基・柱穴約180基が発見され、入来Ⅰ式・入来Ⅱ式・山ノロⅠ式・山ノロⅡ式・須玖式土器、鉄製品・軽石製加工品が出土している。近くの砂丘では戦前に人骨が発見されており、河口付近の横瀬では甕棺破片も採集されているので、埋葬遺構の可能性もある。岡別府の下堀遺跡では、山ノロ式土器や須玖式土器を伴った直径8mの円形大型住居跡2軒・掘立柱建物跡5棟などが検出されている。下堀遺跡と同じ台地にある仮宿の荒園遺跡でもギヶ崎式・山ノロ式土器を伴う竪穴住居跡が検出されている。下堀遺跡より一段下がった麦田下遺跡では、高付式土器、西南四国系土器、瀬戸内系土器など後期の土器溜まりが検出されている。

古墳時代

志布志湾岸沿いは、前方後円墳をはじめとする古墳群があり、畿内との関連をうかがわせる地域とされている。横瀬古墳は古墳時代中期（5世紀前半頃）の大型前方後円墳で、隣接する東串良町唐仁大塚古墳に次いで県内第2の規模を誇る。墳丘からは円筒埴輪片、形象埴輪片が採集されている。

神領古墳群は、前方後円墳4基、円墳9基で構成されている。10号墳は墳長54mの前方後円墳である。主体部は6か所の縄掛突起のある割柱式舟形石棺を軽石で覆った礎檣で、周辺から菅玉・勾玉、鉄剣、短甲の一部、鉄鍔などが出土している。6号墳（天子ヶ丘古墳）は墳長43m、後円部の径19m、高さ3m、前方部の幅16m、高さ2mの前方後円墳で、後円部に花崗岩質板石を使用した組合せ箱形石棺があった。日光鏡・仿製帯鏡各1面が採集され、石棺内から、鉄剣・鉄刀・鏡等の副葬品が出土した。

町内では他に、飯隈台地に飯隈古墳群・仮宿台地に田中古墳群・後追古墳群・鷲塚地下式横穴墓群・下堀遺跡が知られている。

古代

古代の大崎は日向国諸県郡に属し、その南端にあっただと思われるが郡境は定かではなく、西隅・南隅とも不明である。この周辺の古代の考古学的様相も今のところ出土例が少なく定かでない。

古代の遺跡としては、天神段遺跡で掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑・炉跡・土師器・墨書土器・刻書土器・

鍛造剥片が確認されている。

永吉天神段遺跡の第1地点では7棟の掘立柱建物跡や黒書土器・刻書土器・須恵器・埴土器・鉄製刀子・砥石などが発見されている。

中世

中世には各地で山城が造られ、大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野卸城跡・竜相城跡・金丸城跡・栢谷城跡・遠見ヶ丘などがある。金丸城跡では、溝状遺構・土坑が検出され、青磁・白磁・青花・東播系こね鉢・瓦質土器・備前焼鉢・天目碗など14世紀半ばから15世紀の遺物が出土している。また、近年の発掘調査では村落跡も各地で確認されている。天神段遺跡では、多くの掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓が検出され、中でも土坑墓1号からは、同安楽系青磁6点・青磁1点・青白磁1点・銅鏡1点・滑石製石鏡2点・鉄製品・木製品・土師器などの豊富な副葬品が出土している。下堀遺跡では、溝状遺構・畝跡とともに、青磁・青花・中国陶器などが発見されている。永吉天神段遺跡でも、湖州六花鏡・白磁碗・羽釜のミニチュア土器や土師器皿・坏の副葬された土坑墓等が検出され、青磁・白磁・陶器類などの輸入陶磁器や、東播系須恵器・常滑焼・備前焼などの国内産陶器、桶葉型瓦器境、滑石製石鏡、茶臼など多くの遺物が出土している。

近世

井俣の金丸城跡は中世から近世にかけての遺跡だが、17世紀前半を主体とする陶磁器が多く出土している。多くの柱穴とともに、掘立柱建物跡7棟や水溜土坑（大型6基・小型2基）、炉跡16基、溝状遺構、墓などが検出されている。炉跡はいずれも意図的に壊され、炉周辺に炉壁を構成していたと思われる軽石や熱変粘土片が集中している場所も確認された。周辺で椀形鉄滓が出土していることから、この炉については鉄生産に関連する可能性も考えられる。肥前染付・瓦器・中国製陶磁器・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓など多くの遺物も出土している。野方の天神段遺跡では、安永ボラ（1779年）を埋土とする畝状遺構や薩摩焼などが発見されている。持留の京の塚遺跡では近代まで続く溝状遺構や古道が検出されている。永吉天神段遺跡でも薩摩焼や肥前系染付などが出土し、道跡や寛永通宝を副葬した墓坑5基が検出されている。

（参考・引用文献）

- 大崎町教育委員会 2001「立山B遺跡」
大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 大崎町教育委員会 2005「金丸城跡」
大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 大崎町教育委員会 2005「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」
大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
- 大崎町教育委員会 2006「美堂A遺跡」
大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）

- 大崎町教育委員会 2014「麦田下遺跡」
大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
- 志布志町教育委員会 1984「倉園B遺跡」
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
- 志布志町教育委員会 1990「道重遺跡」
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（17）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「二子塚A遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（84）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012「稲荷迫遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008「西原遺跡・牧ノ原B遺跡・原村I遺跡・原村II遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（124）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「山ノ田遺跡B地点・蔵野B遺跡・松ヶ尾遺跡・谷ヶ迫遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（109）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1992「西丸尾遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（64）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1994「西丸尾B遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（9）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1992「榎崎A遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（63）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993「榎崎B遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（4）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010「加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・栢山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡A地点」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（154）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012「宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡2」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（173）
- 鹿児島県教育委員会 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2015「天神段遺跡1」
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（3）
- 鹿児島県教育委員会 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2016「天神段遺跡2」
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（6）
- 橋本達也 2010「古墳築造南限域の前方後円墳—鹿児島県神領10号墳の発掘調査とその意義」『考古学雑誌』第94巻第3号



第2图 周边道跡位置图 (1:25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	地形	種類	時代	遺物等	備考
1	468 116	佐土原	曾於郡大崎町野方 佐土原	台地	散布地	縄文、古墳	土器	平成12年：農政分布調査
2	468 115	大久保B	曾於郡大崎町持留 大久保	台地	散布地	縄文	土器	平成12年：農政分布調査
3	468 3	大久保A	曾於郡大崎町持留 大久保	台地	散布地	縄文(後)	指宿式・市来式土器、打製石斧	
4	468 99	赤野原	曾於郡大崎町持留 赤野原	台地	散布地	弥生、古墳	土器	平成11年：農政分布調査
5	468 2	川上神社	曾於郡大崎町持留 中持留	扇状地	散布地	縄文(後)	指宿式・市来式土器	
6	468 67	持留牧	曾於郡大崎町持留 牧、東尾ノ花	台地	散布地	縄文、古墳	磨製石斧片、成川式土器	平成9年：農政分布調査
7	468 135	西ノ上	曾於郡大崎町永吉 西ノ上	台地	散布地	弥生		平成18年7月：NTTドコモ九州の電話基地局建設に伴う分布調査
8	468 100	杉木段	曾於郡大崎町永吉 杉木段	台地	散布地	弥生、古墳	土器	平成11年：農政分布調査
9	468 101	永道	曾於郡大崎町永吉 永道	台地	散布地	縄文、 弥生、古墳	土器	平成11年：農政分布調査
10	468 127	高久田B	曾於郡大崎町永吉 高久田	沖積地	散布地	弥生(前・末)、 古墳	弥生終末～古墳住居跡	平成18年：農政分布調査 平成21年：県営農地事業に伴い、発掘調査
11	468 97	坂本原	曾於郡大崎町岡別 坂本原	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
12	468 96	五嶋	曾於郡大崎町岡別 府五嶋	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
13	468 98	早馬	曾於郡大崎町岡別 府早馬	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
14	468 128	小柳	曾於郡大崎町岡別 府小柳	沖積地	散布地	弥生、古墳		平成18年：農政分布調査
15	468 137	麦田下	曾於郡大崎町岡別 府麦田下	台地	散布地	弥生(後)、古 墳、古代	土器類、高付式・西南四国系・瀬戸内系土器、勾玉、砥石、成川式土器、磨製土器	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
16	468 129	宮田	曾於郡大崎町岡別 府宮田	沖積地	散布地	弥生、古墳	弥生土器	平成18年：確認調査
17	468 130	高久田A	曾於郡大崎町高久 田・尾ノ道	台地	集落	縄文(晩)、弥 生(前～終末)、 古墳、古代 ～近代	掘穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構、入佐式・黒川式・割目帯帯文・山ノ口式・中津野式・東原式土器、磨製石磯・石鎌・ガラス玉・青磁・古銭	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
18	468 102	船迫	曾於郡大崎町永吉 船迫	台地	散布地	縄文、弥生、 古墳		平成11年：農政分布調査
19	468 103	下原	曾於郡大崎町持留 下原	台地	散布地	縄文(後)、弥 生、古墳	指宿式土器・市来式土器・弥生土器・土師器、磨製石斧	平成11年：農政分布調査
20	468 134	榎木段	曾於郡大崎町永吉 榎木段	台地	散布地	縄文、古墳、 中世	成川式土器・磨製石斧	平成18年：分布調査
21	468 104	永吉天神段 (本報告書)	曾於郡大崎町永吉 天神	河岸 段丘、 台地	集落 区域	旧石器、縄文、 弥生、古墳、 古代、中世、 近世	掘穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・墓石、石ノ形石器・尖頭器、縄文土器・弥生土器・成川式土器・土師器・銅鏡・古銭	平成24～27年度 発掘調査 平成27年度 第1地点埋蔵文化財センター報告書(8)
22	468 53	下堰	曾於郡大崎町岡別 府下堰	台地	集落 地下式 横穴墓	縄文(早・後)、 弥生(中)、 古墳、古代、 中世	集石遺構、大型住居跡、土坑を伴う掘立柱建物跡、地下式横穴墓等、縄文土器・山ノ口式土器・成川式土器	平成13～15年 大隅グリーンロード建設に伴う発掘調査 平成17年度 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
23	468 90	干浅	曾於郡大崎町井 俣干浅	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年度：農政分布調査
24	468 30	金丸城跡	曾於郡大崎町井 俣小牧・金丸	台地・ 沖積地	城館跡	縄文(早)、 古墳、古代、 中世、近世	掘立柱建物跡・土坑・溝、石版式土器・石磯・固石・土師器・須恵器・青磁・白磁・青花・備前焼・砥石・硯・鉄製品等	坂仁部氏集城と言われているが、調査でも不明 平成11・12年 大隅グリーンロード建設に伴う発掘調査 平成17年度 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
25	468 86	井俣牧	曾於郡大崎町井 俣井俣牧	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査

番号	調査年度	遺跡名	所在地	地形	種類	時代	遺物等	備考
26	468-122	井俣和田	大崎町井俣和田	沖積地	散布地	古墳	成川式土器	平成18年：確認調査
27	468-88	宮脇	大崎町井俣宮脇	台地	散布地	旧石器時代、 縄文時代早期	集石・加栗山式・下割釜式・委ノ丸式・押型瓦・平埴式・塞ノ神式土器、石楯・石楯・磨石	平成27・28年：発掘調査
28	468-89	堂園塚	大崎町井俣堂園塚	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査 平成23年：確認調査
29	468-87	坂上	大崎町井俣坂上	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
30	468-95	荒園	大崎町仮宿荒園	台地	散布地	旧石器、縄文(早)、弥生(中)、古墳、中世、近世	竪穴住居跡・溝状遺構、細石刀楯・細石刀・集石・前平式・平埴式・塞ノ神式土器・山ノ口式土器・成川式土器・東瀬系須恵器・備前焼	平成24～26年 東九州自動車道建設に伴う発掘調査
31	468-49	美堂A	曾於郡大崎町仮宿美堂	台地	散布地	古墳、中世、近世	古道具・土坑、成川式土器・土師器・青白磁、備前焼、常滑焼	平成14年 県営農産物整備事業に伴う発掘調査 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
32	468-50	美堂B	曾於郡大崎町仮宿胡摩	台地	散布地	古墳		平成7年：農政分布調査
33	468-34	大崎城跡	曾於郡大崎町仮宿城内ほか	台地	城跡跡	中世(室町)、近世		
34	468-33	胡摩→崎城跡	曾於郡大崎町仮宿古城	台地	城跡跡	中世(室町)		榎井氏の城
35	468-51	小園	曾於郡大崎町仮宿小園	沖積地	散布地	古墳		平成14年：確認調査
36	468-29	野卸城跡	曾於郡大崎町永吉野卸岡・深坂	台地	城跡跡	古代、中世		平安時代末築城(1190年)シラス採取で半壊
37	468-106	外園	曾於郡大崎町永吉外園	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
38	468-126	牧谷・白山	曾於郡大崎町永吉牧谷・白山	沖積地	散布地	中世	野卸城の堀の可能性有り	平成17年：農政分布調査
39	468-105	大道	曾於郡大崎町永吉大道	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
40	468-17	高井田	曾於郡大崎町井俣高井田(幾地)	台地	散布地	弥生(中)	土器	平成17年：農政分布調査
41	221-449	五色	志布志市有明町野神宇五色、風穴	台地	散布地	古墳		平成10年度：農政分布調査
42	221-450	西ノ塚	志布志市有明町原田宇西ノ塚、下五敷	台地	散布地	古墳		平成10年度：農政分布調査
43	221-407	坂ノ上	志布志市有明町原田宇坂ノ上、前田、西原	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年度：農政分布調査 旧遺跡名：坂ノ下
44	221-352	清水	志布志市有明町原田宇清水	台地	散布地	弥生(中)	磨製石斧・打製石斧	昭和58年度：大隅地区埋蔵文化財分布調査 旧遺跡名：平田、原田、元宮の下、永田
45	221-439	東中原	志布志市有明町原田宇東中原、大塚、摩原、中領	台地	散布地	古墳		平成10年度 農政分布調査 旧遺跡名：中領
46	221-504	大塚	志布志市有明町原田宇大塚、出口、有本、竹塚	台地	散布地	縄文、古墳		平成8・10年度：農政分布調査
47	221-386	原田古墳群	志布志市有明町原田宇大塚、竹塚	台地	円墳・地下式横穴墓	古墳	原田古墳(円墳直径40m高さ5.6m石南露出) 大塚A古墳(円墳直径20m高さ4.5m石南露出長さ1.3m) 大塚B古墳(円墳直径10m高さ1.3m) 坂ノ上1・2号古墳(小円墳)・地下式横穴墓(妻入型・磨石石箱・甌・成人女性骨、刀子)	昭和58年度 大隅地区埋蔵文化財分布調査 旧遺跡名：大塚院、大塚古墳群、大塚B古墳、坂ノ上1号古墳、坂ノ上2号古墳・大塚(小円墳) 平成26年 鹿児島国際大学 発掘調査
48	221-366	長田	志布志市有明町原田長田、牧、春日免	台地	散布地	縄文、弥生(中)、古墳、中世	竪穴住居跡(弥生4・古墳3)・土坑墓(中世)、竪立住居跡(弥生3・古墳4)・中世4)、山ノ口式土器、成川式土器、白磁、竪穴住居跡(弥生・古墳)	平成11年度 発掘調査 平成15年 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
49	482-9	上市ノ原古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	古墳	古墳群1～5号	

第3節 志布志IC～鹿屋申良JCT間の遺跡

東九州自動車道の志布志IC～鹿屋申良JCT間には、第2表に示すとおり23の遺跡が存在する。ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。詳細については各報告書を参照していただきたい。

第2表 志布志IC～鹿屋申良JCT間の遺跡

遺跡番号	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
				時代	主な遺構	主な遺物
1 見福	志布志市志布志町志布志 台地上 標高約70m	H25年度～調査中	作業中	旧石器	—	ハンマーストーン、剥片、打面調整剥片
				縄文早期	土坑	石板式・下剥峯式土器、石鏃、磨石、石皿
				縄文中中期	落とし穴、土坑	—
				縄文後晩期	溝状遺構	磨消縄文・丸尾式・西平式・中岳Ⅱ式土器、磨石、燧石
縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代は細石刃文化期に比定される。縄文時代早期の出土遺物は、土器の出土に比べ石器の出土が非常に少ない。前期の落とし穴は2基で、それらの底部には杭跡と考えられる小ピットが7～8つ確認されている（平成25年度は、県立埋せが隣接地の発掘調査を実施している）。						
2	志布志市志布志町安楽 台地上 標高約45m	—	—	県文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物が無いことが確認されたため、本調査を実施せず。		
3	志布志市志布志町安楽 台地上 標高約30m	—	—	H28年度以降調査予定		
4 小牧古墳群	志布志市志布志町安楽 台地上 標高約50m	H27年度～調査中	作業中	旧石器	—	細石刃核、細石刃、チップ
				縄文草創期	集石	黒曜石剥片、土器
				縄文早期	集石	前平式・石板式・下剥峯式・押型文・平橋式・塞ノ神式土器、耳栓、石鏃、磨石、異形石器
				弥生	—	弥生土器、石包丁
尾根と谷による起伏のある地形に立地し、縄文時代早期を中心とした遺跡である。縄文早期の集石は検出層によって構成の大きさに差が見られ、時期差によるものか今後の調査が注目される。また、塞ノ神式土器の壺形土器や、耳栓、異形石器、円盤状石器が出土し、遺跡の性格を知る上でも重要である。古墳群として遺跡登録をされているが、これまでの調査では古墳が存在していた痕跡等は確認されていない。						
5 次五	志布志市有明町野井倉 台地縁辺部 標高約50m	終了	作業中	旧石器	—	甕原型細石刃核、細石刃、剥片
				縄文早期	落とし穴、連穴土坑、土坑、集石、磨石集積遺構	前平式・加葉山式・吉田式・札ノ元Ⅶ類、石板式・中原Ⅴ式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神Ⅱ式土器、打製・磨製石鏃、石錐、局部磨製石斧、磨
旧石器時代から縄文時代早期が中心となる遺跡である。旧石器時代は、細石刃文化期に比定される遺物が出土している。縄文時代早期は、早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認され、特に注目されるのは被破砕燧石が多量に出土した点である。						
6 大代	志布志市有明町野井倉 台地縁辺部 標高約40m	—	—	県文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物が無いことが確認されたため、本調査を実施せず。		
7 木森	志布志市有明町野井倉 河岸段丘 標高約30m	H26年度～調査中	—	縄文早期	集石	前平式・加葉山式・吉田式・下剥峯式・押型文土器、石鏃、石匙、磨石・燧石
				中世	掘立柱建物跡	須恵器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋片、鉄製品、鉄滓
縄文時代早期と中世を中心とする複合遺跡である。縄文時代早期の集石、中世の掘立柱建物跡等が検出され、縄文時代早期の土器、石器、石匙、磨石・燧石、須恵器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋片、鉄製品等が出土している。						

遺跡番号	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
				時代	主な遺構	主な遺物
8	志布志市有明町蓬原 河岸段丘 標高約 30 m	H 2 6 年度～調査中	作業中	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石、土坑、土器集中、炭化物集中、落とし穴	前平式・加栗山式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神式土器、打製石鏃、打製・環状石斧、トロトロ石器、磨石、台石、石皿、砥石、穿孔円礫
				弥生	竪穴住居跡	山ノロ式土器
				古墳	溝状遺構、竪穴住居跡、土坑、棒状礫積遺構	甕（椀貫式、東原式）、壺、埴、高坏、須集器高坏、棒状礫、磨製石鏃片
				古代～中世	焼土跡、竪穴建物跡、土坑墓、掘立柱建物跡、櫛列	土師器（坏、甕、椀）
				近世	古道、溝状遺構、土坑、遺物集中	土陶器、磁器
縄文早期から中世を中心とする複合遺跡である。遺構は、縄文時代早期の竪穴住居跡、連穴土坑、集石（100基以上）、落とし穴、弥生時代の竪穴住居跡、古代～中世の掘立柱建物跡が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、打製石鏃、打製石斧、環状石斧、トロトロ石器、磨石等、縄文時代後期・弥生時代・古墳時代の土器、土師器、陶器、磁器等が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。						
9	曾於郡大崎町菱田 台地上 標高約 50m	—	—	縄文時代早期の竪穴住居跡、連穴土坑、集石、土坑が検出されている。遺物は、縄文時代早期の土器、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。	—	
10	曾於郡大崎町井俣 台地上 標高約 40 m	終了	作業中	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石、埋設土器、チップ集中	吉田式・石坂式・下剥峯式・押型文・平栴式土器、石鏃、石匙、打製・磨製石斧、扁平打製石斧、磨石、石皿、礫石器、石核、フレーク、チップ
				縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴住居跡、連穴土坑、集石、土坑が検出されている。遺物は、縄文時代早期の土器、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。		
11	曾於郡大崎町井俣 台地上 標高約 40 m	H 2 7 年度～調査中	—	旧石器	—	石核、円礫、フレーク、チップ
				縄文早期	集石、土坑、土器集中	加栗山式・小牧 3 A・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・平栴式・塞ノ神式土器、打製石鏃、磨石、チップ
				近世	—	土瓶（薩摩焼）、寛永通宝
旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代の遺構は検出されていないが、石器製作過程の所産と思われる石核、フレーク、チップ等が出土している。縄文時代早期の遺構は、集石、土坑、土器集中、ビットが検出されている。遺物は土器、石器等約 10,000 点が出土している。近世の寛永通宝、近世以降の土瓶（薩摩焼）が出土している。鬼界カルデラ噴火時に 2 度の大地震により発生した液状化現象を示す噴砂層が見られる。						
12	曾於郡大崎町井俣 台地上 標高約 45 m	—	—	縄文時代早期の竪穴住居跡、連穴土坑、集石、土坑が検出されている。遺物は、縄文時代早期の土器、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。	—	

遺跡番号	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要			
				時代	主な遺構	主な遺物	
13	富於郡大崎町 仮宿 台地縁辺部標 高約 50 m	H 2 4 年度 ～調査中	作業中	旧石器	—	甕原型細石核・細石刃・水晶剥片	
				縄文早期	素材剥片(頁岩) 集石、チップ、剥片集 中区、土坑	前平式・吉田式・加栗山式・下刺筆式・押 型文・手向山式・平袴式・塞ノ神式・苦浜 式・条痕文土器、壺形土器、石鏝、スクレ イパー、石匙、耳柱、打製・磨製石斧、磨 石、石皿、フレーク、チップ	
				弥生中期	竪穴住居跡、土坑	吉ヶ崎式・山ノ口式土器、磨製石鏝未製 品、砥石	
				古墳	竪穴住居跡	東原式・倭貫式土器、須恵器、砥石	
				古代以前	片葉研堀	—	
				中世	掘立柱建物跡、土坑、 溝状遺構、帯状硬化面	土師器、東播系須恵器、陶器、青磁、華南 三彩	
				近世以降	帯状硬化面	薩摩焼	
縄文時代早期から古墳時代を中心とする複合遺跡である。遺構は、縄文時代早期の集石、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡、古代以前の片葉研堀、中世の掘立柱建物跡等が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、石器、弥生時代・古墳時代の土器、土師器、陶器、磁器等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象(噴砂跡)も確認されている。							
14	富於郡大崎町 永吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高 約 30 ～ 50 m	終了	埋文調 査セ 第 1 地点 (8)	旧石器	ブロック、礫群	尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、剥片	
				縄文早期	集石、土器埋設遺構	前平式・吉田式・加栗山式・手向山式・下 刺筆式・押型文・平袴式・塞ノ神式・苦浜 式・条痕文土器、石鏝、石匙、石斧、磨石、 礫石、石皿、フレーク、チップ	
				2016.3 刊行	縄文前期	—	管型土器
				作業中	縄文後期	—	岩崎上層式・北久根山式、中居Ⅱ式土器
					縄文晩期	竪穴住居跡、落とし 穴、土坑	入佐式・黒川式、刻目突帯文土器、管玉、 打製石斧、磨石、石皿
				本報 告書	弥生	竪穴住居跡、円形周溝 墓、土坑墓群、掘立柱 建物跡、土坑	入来式・山ノ口式・黒髪式土器、鉄鏝、磨 製石鏝、管玉
					古墳	竪穴住居跡、土坑	成川式土器、須恵器
					古代	掘立柱建物跡、土坑	須恵器、土師器
					中世	竪穴建物跡、掘立柱建 物跡、土坑墓、地下式 坑、火葬土坑、土坑	白磁、青磁、土師器、瓦質土器、東播系須 恵器、備前焼、常滑焼、湖州六花鏡、砥石、 石塔、古銭、茶臼、石鍋
				近世	近世墓	薩摩焼、染付、寛永通宝	
旧石器時代から近世までの複合遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群が検出された。土坑墓からは国内最古級に位置付けられる鉄鏝が出土した。中世においては白磁、青磁、瓦質土器、東播系須恵器等が多量に出土し、当時流通の拠点であったことをうかがいすることができる。							
15	富於郡大崎町 西持留 台地上 標高約 95 m	終了	作業中	縄文早期	集石遺構	石坂式・下刺筆式・中原式・押型文・塞ノ 神式土器、打製石鏝、石核	
				縄文前期 ～ 中期初頭	土坑、土器集中	管型式・深溝式・大歳山式・鷹島式・船元 式土器、打製石鏝、石匙、石鏝、スクレ イパー、二次加工剥片、磨石、礫石、石皿、 石核、フレーク	
				近世以降	溝状遺構・古道	—	
				縄文時代早期から中期初頭、近世以降の複合施設で、縄文時代前期から中期初頭が中心となる遺跡である。200 基を超える縄文時代中期の土坑が検出されている。また、在地系土器の深溝式土器、近畿地方の大歳山式土器 や鷹島式土器、瀬戸内地方の船元式土器などが出土しており、他地域との交流をうかがいすることができる。			

遺跡番号	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
				時代	主な遺構	主な遺物
16	鹿屋市串良町 細山田 台地上 標高約60m	H27年度 ～調査中	作業中	旧石器	—	細石刀, フレーク, チップ
				縄文早期	竪穴住居跡, 連穴土坑, 土坑, 集石	前平式・吉田式・下剥峯式・桑ノ丸式・平祐式・条痕文系土器, 石匙, 磨石, 石皿
				縄文前期	—	管畑式土器, 深浦式土器, 磨石
				縄文後期	竪穴住居跡, 伏甕, 石斧集積遺構, 集石, 土坑, 土器集中	指宿式・市末式・回線文系土器, 石織, 横刃型石器, 打製石斧, 磨石, 石皿
				縄文晩期	—	入佐式・黒川式・刻目突帯文土器
				弥生中期	—	入来式, 山ノロ式, 砥石
				古墳	竪穴住居跡, 縄集積, 土器溜, 土坑	東原式・辻堂原式・布留系土器, 須恵器, 鉄鍬, 鉄製品, 敲石, 勾玉, 軽石加工品
				古代	土坑	土師器(甕・坏), 須恵器短頸壺
				中世以降	竪穴建物跡, 掘立柱建物跡, 溝状遺構, 土坑, 焼土域	土師器(坏), 白磁, 青磁, 石織, 輪の羽口
旧石器時代から中世までの複合遺跡である。縄文時代早期や後期の良好な竪穴住居跡やそれに伴う土器が出土している。また、古墳時代の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡が検出されている。本遺跡は、各時期における集落跡と考えられ、周辺の遺跡を含めて串良川沿岸での人間活動の変遷を継続的に追うことができる遺跡である。						
17	鹿屋市串良町 細山田 河岸段丘 標高約30～50m	H26年度 ～調査中	作業中	旧石器～	ブロック, 礫群	
				縄文草創期	—	
				縄文早期	集石, 連穴土坑, 土坑	前平式・加栗山式・吉田式・倉園B式・石板式・下剥峯式・押型文・塞ノ神式土器, 石織, 打製石斧, 石皿
				縄文前期	集石	轟式・管畑式土器, 磨製石斧
				縄文晩期	集石	黒川式・刻目突帯文土器
				弥生中期	竪穴住居跡	高橋式・下城式・山ノロ式土器
				古墳	竪穴住居跡, 鍛冶関連建物跡, 竪穴状遺構, 古道跡	笹貫式, 輪羽口, 高坏脚転用輪羽口, 鉄鍬, 鉄洋, 勾玉, 管玉
				古代	掘立柱建物跡	須恵器, 土師器
中世	掘立柱建物跡, 古道跡, 溝状遺構	青磁, 白磁, 瓦器碗				
旧石器時代から中世までの複合遺跡である。特に古墳時代では、集落を構成する多数の竪穴建物跡が検出されている。これらの遺構の中には、鍛冶関連遺構を伴うものや専用の輪の羽口が出土している。古墳時代の鉄製品等の生産過程を明らかにする良好な資料である。						
18	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 ～調査中	理文調査セ(7)2016.3刊行 作業中	縄文早期	集石	下剥峯式・平祐式土器
				縄文後期	竪穴住居跡, 埋設土器, 落とし穴, 土坑, 石斧集積遺構	中岳Ⅱ式土器, 石刀, 打製・磨製石斧, 石織, ヒスイ製垂飾, 小玉, 勾玉, 管玉
				縄文晩期	—	刻目突帯文土器
				弥生中期	竪穴住居跡	山ノロ式土器
				古墳	竪穴建物跡, 地下式横穴墓, 円形周溝墓, 溝状遺構	成川式土器(壺・高坏・埜), 人骨, 鉄剣, 鉄鍬, 刀子, ヤリ鉋, 異形石器
				古代	焼土跡, 古道	土師器, 須恵器
縄文時代早期から古代までの複合遺跡である。縄文時代後期では、竪穴住居跡から樫原文を施す完全な石刀が出土している。また、古墳時代では88基の地下式横穴墓が報告されている。地下式横穴墓では初めて円形周溝を伴う例が確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性を持ち、志布志湾沿岸部の高塚と共存する地域の地下式横穴墓との比較をする事により、この地域の古墳時代の在り方を考える上で貴重な資料である。						

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
19	鹿屋市串良町細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 ～調査中	作業中		旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、土坑、集石、石器製作跡	吉田式・石板式・下刺筆式・辻タイプ・桑ノ丸式・押型土器、石織、石匙、スクレイパー、磨石、剥片、チップ
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟式・条痕土器
					縄文後期	土坑、落とし穴状遺構、埋設土器、石器集中部、掘立柱建物跡	市来式・西平式・丸尾式・太郎迫式・三万田式・中岳II式土器、打製・磨製石斧、磨石、剥片、石核、台石、石冠
					縄文晩期	土坑	入佐式・突帯土器
					弥生中期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式土器、打製・磨製石斧、磨製・打製石織、磨石、蔽石、石皿、青銅鑿
					中・近世	古道跡	青磁、白磁、薩摩焼
旧石器時代～中世にかけての複合遺跡である。中でも縄文時代後期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴群（300～400個）が環状で確認されており注目される。また、埋設土器や祭祀用とみられる石冠も出土している。							
20	鹿屋市串良町細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 ～調査中	縄文前期以降編埋文調査七（5） 2016.3 刊行	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石、落とし穴、土坑、石器製作跡	前平式・吉田式・會園B式・石板式・下刺筆式・辻タイプ・桑ノ丸式・中原式・押型文・手向山式・平柄式・塞ノ神式土器、石櫛、石織、石匙、磨石、蔽石、石皿、打製石斧	
				縄文後期	落とし穴、礫集石	指宿式・市来式土器、石織、磨石	
				縄文晩期	—	黒川式土器	
				弥生中期	竪穴住居跡、大型建物跡、掘立柱建物跡、円形・方形周溝、土坑	山ノ口式・中溝式土器、擬凹線文系蓋、土製勾玉、鉄器、磨製石織、石匙、砥石、蔽石、台石	
				古墳時代以降	降伏遺構、畝状遺構	土師器櫛、薩摩焼	
縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした複合遺跡である。弥生時代中期では、ベッド状遺構に伴う方形や大型の円形の竪穴住居跡、棟持柱をもつ2棟を含む掘立柱建物跡、柱列や円形・方形の周溝など、大隅半島中央部での当時の集落のあり方を知る上で貴重な資料である。また、大型建物跡の可能性が高いとして、一部が現地に保存されている。縄文時代早期についても竪穴住居跡20軒、連穴土坑40基など注目される遺構が多く検出されている。							
21	鹿屋市串良町細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 ～調査中	作業中	縄文前・中期	—	深浦式土器	
				縄文後期	—	指宿式・西平式・市来式土器	
				弥生中期	—	山ノ口式土器	
				古墳	地下式横穴墓、土坑墓、溝状遺構	成川式土器、須恵器、鉄器（刀・剣・槍・鏃・刀子・鏃等）、青銅鈴、人骨	
				時期不詳	溝状遺構	—	
縄文時代前期から古墳時代までの複合遺跡である。特筆すべきは、古墳時代の地下式横穴墓が多量の土器、須恵器、鉄織や鉄剣等の鉄器、青銅製鈴、人骨等を伴い190基発見されたことである。これだけで多くの副葬品を伴った地下式横穴墓の発見は、地下式横穴墓の研究だけでなく南九州の古墳時代の様相を解明していく上で貴重な資料である。							
22	鹿屋市串良町細山田 台地上 標高約140m	終了	埋せ報告書 (164) 2011.3 刊行	縄文早期	—	石板式土器	
				縄文後期	—	凹線文・市来式・三万田式土器	
				縄文晩期	—	黒川式土器	
				弥生中期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式土器、土製勾玉、打製・磨製石織、棒状蔽具、鉄織	
				古墳時代	—	成川式土器	
中世～近世	道路状遺構	加治木銭					
弥生時代中期が中心となる遺跡である。竪穴住居跡は、花卉形・方形・円形に分類されている。出土遺物等から、王子遺跡（鹿屋市王子町）や前畑遺跡（鹿屋市郡之原町）等と同時期の集落跡と考えられている。また、集石遺構が竪穴住居跡内から検出されている。7号住居跡の埋土内から、松木産遺跡（南さつま市金峰町）や水吉天神段遺跡（曾於郡大崎町）で出土した鉄織同様、無茎の鉄織が出土した。							
23	鹿屋市串良町細山田 台地上 標高約140m	終了	埋せ報告書 (164) 2011.3 刊行	縄文早期	集石、土坑	岩本式・前平式・志風頭式・石板式・平柄式・貝殻条痕文・鎌石櫛・轟A式土器、打製石織、磨石、蔽石	
				弥生中期	—	山ノ口式、須玖式土器	
縄文時代早期前半から早期末が中心となる遺跡である。鎌石櫛式土器が1個体と轟A式が2個体出土し、同時期に存在した可能性も考えられる。							



第3図 東九州自動車道（志布志IC～鹿屋車良JCT）建設に伴って調査された遺跡（1：80,000）

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理作業・報告書作成作業の方法について記す。

1 発掘調査の方法

永吉天神段遺跡の発掘調査は、平成23年度に確認調査、平成24～27年度に本調査を実施した。調査対象表面積は37,100㎡、調査対象延面積は87,500㎡である。

本遺跡の調査区割り(グリッド)は、平成23年度の確認調査時において工事用基準杭「STA113」と「STA105」の延長線を中心に、10m間隔で西から東に向かって1・2・3…、北から南に向かってA・B・C…と設定した。

このグリッドを基にして、M-1区の左下を原点(0,0)、縦軸をX、横軸をYとし、遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また、トータルステーションで測量作業を行う場合、公共座標に基づき基準点を設定した。

発掘調査は、基本的に重機で表土を除去した後、確認調査の結果に基づき、遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層、火山灰の一次堆積層は、一部重機を用いて慎重に掘り下げた。遺構は、移植ごて等の遺構掘削に適した道具を用いて慎重に調査し、実測、写真撮影等を行い、遺物は、トータルステーションを使用して取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法及び概要(詳細は第1章に掲載)は、以下のとおりである。

平成23年度

確認調査は荒園遺跡と同時に実施し、その結果、永吉天神段遺跡の調査延面積は87,588㎡となった。

平成23年7月1日から9月28日までの約3か月間、調査対象地域にグリッドに沿ってトレンチを31箇所設定し、調査区全体の包含層の有無について調査した。トレンチの形状は1×8mの長方形を基本とし、必要に応じて拡張した。表面を覆う雑草の除去・雑木の伐採を人力で行った後、重機及び人力により徐々に包含層を掘り下げた。遺物・遺構を発見した場合には、重機による掘り下げを即時中止し、山鉾・鋤簾等による人力掘削で遺構・遺物の検出を行った。検出した遺構については、写真撮影、実測を行った。出土遺物はトータルステーションで取り上げた後、掘り下げを続けた。いくつかのトレンチでは、遺構に影響のない部分について、安全対策をしながら下層確認トレンチを設定し、XI層(シラス)上面まで調査を実施した。しかしながらVII層(薩摩火山灰)より下位の旧石器時代相当層については、上層の包含層が厚く、十分な調査面積を確保することができなかったため、本調査にて範囲を確定させることとなった。

平成24年度

隣接する第1地点と並行して調査を実施した。調査期間は平成24年7月2日～平成25年1月28日、調査延面積は第1地点が2,262㎡・第2地点が4,449㎡であった。第1地点の調査区は本遺跡の東側に位置しており、標高約35mに位置するE-1-57～62区の河岸段丘の平坦面であった。II a～V a層上面まで調査を実施した。F～H-57～59区にトレンチを6本設定し、約40㎡で縄文時代早期の下層確認調査を行い、調査終了後、埋め戻しを行った。

調査は重機で表土を除去した後、基本的には山鉾・鋤簾等による人力で掘り下げを行った。縄文時代早期が主体になることから、当初IV層上面の地形測量を行う予定であったが、古代の遺構・遺物が全面に確認されたため、まず、III層上面での地形測量を行った。また、鬼界カルデラに伴う液状化現象(噴砂)の見られたトレンチでは、土層断面の記録保存調査を行った。

遺物包含層が残存している場合は、小破片はグリッドごと一括して取り上げ、それ以外の遺物は、必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。また遺物及び遺構に関わりのある遺物については、縮尺1/5～1/10の実測を行った。

なお、遺構実測や遺物取り上げは、調査担当者の指揮・監督の下、発掘調査支援業務委託業者(株)パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

平成25年度

調査期間は平成25年6月13日～平成26年1月28日、調査延面積は約26,291㎡であった。第2地点の調査区は、本遺跡の中心であるシラス台地の縁辺部から中央部に位置しており、標高は約50mである。調査は用地境界などでは安全上の措置として約1.0～3.0m程度内側に控えて調査範囲を設定し、重機により表土を剥いだあと、人力による掘り下げ作業を実施した。

C～L-48～59区は平成24年度調査の続きで、縄文時代早期のV層調査とC～F-50～53区約1,400㎡の旧石器時代調査を行った。また、C～J-27～47区はII～V層(中世～縄文時代早期)の調査を行い、地形観測用の土層ベルト沿いに、VII層上面(サツマ火山灰)とVIII～X層の旧石器時代の下層確認を行った。調査終了後、埋め戻しを行った。

調査は重機で表土を除去した後、基本的には山鉾・鋤簾等による人力で掘り下げを行った。弥生時代中期と縄文時代早期が主体になることから、III b層上面とVI層上面にて、地形測量を行った。

遺物包含層が残存している場合は、小破片はグリッド



第4図 確認調査トレンチ位置図

ごと一括して取り上げ、それ以外の遺物は必要に応じて写真撮影を実施した後に、トータルステーションを用いて取り上げを行った。まとまった遺物及び遺構に関わりのある遺物については、縮尺1/5～1/10の実測を行った。

なお、遺構実測や遺物取り上げは、調査担当者の指揮・監督の下、発掘調査支援業務委託業者（株）パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

平成26年度

調査期間は平成26年5月12日～平成27年1月28日で、調査延面積31,500㎡であった。調査は用地境界などでは安全上の措置として約1.0～3.0m程度内側に控えて調査範囲を設定し、重機により表土を剥いだあと、人力による掘り下げ作業を実施した。平成26年度調査区は、シラス台地の中央部に位置しており、標高は約50mである。

C～L-18～41区を中心に、中世から縄文時代早期のⅡ～Ⅴ層の調査と地形観察用の土層ベルト沿いに2m幅のトレンチを設定して、Ⅶ層（サツマ火山灰層）上面にて縄文時代早期の遺構確認調査とⅧ～Ⅹ層の旧石器時代の下層確認調査を行った。なお、旧石器時代の遺物の出土が見られた箇所については、一部拡張を行い遺物の広がりがないかを確認している。また、D～J-24～28区は弥生時代から中世の墳丘等も予想されたため、表土から人力による掘削を行っている。調査終了後、埋め戻しを行った。

調査は重機で表土を除去した後、基本的には山鉾・鋤簾等による人力にて掘り下げを行った。弥生時代中期と縄文時代早期が主体になることから、Ⅲb層上面とⅥ層上面にて地形測量を行った。なお、Ⅱ層調査中に中世の遺構・遺物が多数発見されたため、Ⅲa層上面でも地形測量を行っている。

遺物包含層が残存している場合は、小破片はグリッドごと一括して取り上げ、それ以外の遺物は必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。まとまった遺物及び遺構に関わりのある遺物については、縮尺1/10の実測を行った。

なお、遺構実測や遺物取り上げは、調査担当者の指揮・監督の下、発掘調査支援業務委託業者（株）パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

平成27年度

平成27年5月11日～平成27年1月28日の期間に、第2地点より谷を挟んだ遺跡西端の第3地点と併せて第2地点の町道部分の調査（8月より）を行った。調査延面積第2地点約4,650㎡・第3地点約7,724㎡であった。調査は用地境界などでは安全上の措置として約1.0～3.0m程度内側に控えて調査範囲を設定し、重機により表土を剥いだあと人力による掘り下げ作業を実施した。

第3地点は中世から縄文時代早期のⅡ～Ⅵ層の調査、第2地点は町道の付け替え工事と並行して、中世から縄文時代早期のⅡ～Ⅴ層の調査を行った。地形観察用の土層ベルト沿いに4m幅のトレンチを設定して、Ⅶ層（サツマ火山灰層）上面にて縄文時代早期の遺構確認調査とⅧ～Ⅹ層の旧石器時代の下層確認を行った。遺構・遺物が検出された箇所については一部拡張を行い、遺構・遺物の広がりがないかを確認している。調査終了後、埋め戻しを行った。

調査は重機で表土を除去した後、基本的には山鉾・鋤簾等による人力にて掘り下げを行った。中世・弥生時代中期と縄文時代早期が主体になることから、Ⅲb層上面とⅥ層上面にて地形測量を行った。

遺物包含層が残存している場合は、小破片はグリッドごと一括して取り上げ、それ以外の遺物は、必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。まとまった遺物及び遺構に関わりのある遺物については、縮尺1/5～1/10の実測を行った。

なお、遺構実測や遺物取り上げは調査担当者の指揮・監督の下、発掘調査支援業務委託業者（株）パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

2 遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については、以下のとおりである。

(1) 遺構の認定

検出面、埋土層、規模等を総合的に判断し、調査担当者で検討したうえで遺構の認定を行った。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

土坑及びピットについては、埋土や形状、床面の有無、遺物の出土など総合的に判断し、検出した順に土坑はSK、ピットはPの略記号を用いた。検出面や埋土の状況で大まかな時期の判断はできたが、埋土の色調の違いや時期の違う遺物が混在するものについては、詳細な時期判定ができなかった。集石は礫の集中を確認したところで慎重に周辺を精査し、検出した順にSSの略記号を用いた。なお、遺構は検出の写真撮影後掘り下げ実測を行った。遺構に応じて縮尺1/10と、1/20の実測を行った。

(2) 遺構の検出方法

遺構の検出及び調査方法として、当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが、判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。特に、黒色土に掘り込まれた遺構埋土が黒色系になることが多い中世～弥生時代の遺構については、掘り過ぎたものもあり「検出面からの深さ」にばらつきがあったので、調査のあり方を再検討し、今後の調査に生かしたい。



第5図 グリッド配置及び調査範囲図

また、住宅や耕作地、雑木林があった箇所では、攪乱を受けている箇所があり、遺構の検出をはじめ調査が難しかった。この場合はミニトレンチを設定し、攪乱部分の埋土除去等最善の調査方法を調査担当で検討し、遺構の推定ラインも含め残存部の記録保存に努めた。

3 整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

平成25～27年度の発掘調査支援業務において、発掘調査と並行して、遺物の水洗い・注記を行った。

水洗作業の方法は、土器や石器の一部に関してはブラシを用いたが、黒曜石や剥片石器は超音波洗浄機を用いて進めた。

注記は、水洗い終了後、順次行った。注記を行う際、薬品を使用するため、換気や注意しながら手作業で進めた。これまでに刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり、遺跡名を表す記号を「NTJ」とした。その後に出土区、層、取り上げ番号等が記してある。

平成27・28年度の整理作業及び報告書作成作業支援業務で分類・接合から作業を行った。遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、包含層出土土器については、土器の胎土や文様等で時期ごとに分別し、接合する方法をとった。石器については、剥片石器と礫石器に分けた後、器種及び石材別に分類した。作業の効率化を図るため、整理作業及び報告書作成作業支援業務委託先である(株)バスコで出土土器・石器の実測を行った。

遺物出土分布図は、トータルステーションで取り上げたデータを統合し、図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は、実測図や写真等を用いて、発掘調査担当者と連携を取りながら再検討し確定した。

土層断面や遺構の原因データの点検・修正後、デジタルトレースを行った。

原稿を執筆し、本報告書作成作業・印刷・製本を行った。

第2節 層序

永吉天神段遺跡は住宅地であったことや、長年の耕作の影響で一部に削平・盛土・攪乱等の影響がみられたが、表土が厚くII層以下の残存状況は比較的良好であった。

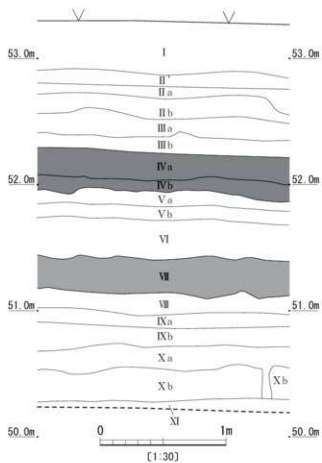
II層は基本II a層とII b層に分層したが、D～K-27～31区では、I層(表土)とII層の間に、II層より明るく、褐色が強い暗褐色土が見られた。基本層位には記載しなかったが、II'層と位置づけている。また、IX c層・X a層・X c層については残存している部分が少ない。なお、包含層や遺構・遺物の年代を把握する手掛かりの1つとなる火山灰等の詳細については、以下のとおりである。

- I層: 表土(造成土及び耕作土)である。3～5mm程度の白色軽石を多く含み、しまりが有り固い層と白色の軽石粒を含み、軟質である層の2つに分かれる箇所もある。
- II a層: 黒色腐植土層で、下層に比べてわずかに暗い。中世の包含層である。
- II b層: 黒褐色砂質土で0.5mm程度の褐色粒子を多く含む。上層に比べてわずかに明るい。古墳時代・弥生時代の包含層である。
- III a層: 黒色腐植土層で若干光沢があり、保温性に富み、わずかに粘りがある。縄文時代前期～晩期の包含層である。
- III b層: 褐色土で1～2cm程度の黄色軽石粒(池田火山灰; 約6,300年前の池田カルデラ起源の噴出物)を含む。粘りはないが、硬い粒子を多く含み、しまりがある。
- IV a層: 黄褐色土で、アカホヤ火山灰(約7,300年前の鬼界カルデラ起源の噴出物)の堆積層。
- IV b層: 黄色バミス(3～5mm); 幸屋降下軽石(アカホヤ火山灰一次降下軽石)である。
- V a層: にぶい黄褐色土で軟質な土である。縄文時代早期の包含層である。
- V b層: 褐色土で、粘りがありV a層に比べて硬い。にぶい黄褐色土の2～3cmのブロックを含む。縄文時代早期の包含層である。
- VI層: 黒褐色砂質土で、しまりがあり硬い。上層は縄文時代早期の包含層である。
- VII層: 灰黄褐色土; 薩摩火山灰(約12,800年前の桜島起源の噴出物)
- VIII層: 暗褐色粘質土。
- IX a層: VIII層に比べてやや明るく、粘性が弱い。
- IX b層: 灰黄褐色粘質土。
- IX c層: 褐色粘質土。
- X a層: にぶい黄褐色粘質土。
- X b層: 灰黄色粘質土で、やや暗い暗褐色の硬質土がブロック状に含まれる。粘性は弱い。旧石器時代の包含層である。
- X c層: 暗灰黄色ロームで、粘性は弱い。
- XI層: 二次シラス(約28,000年前の始良カルデラ起源の噴出物・A T)。

※ 火山灰の年代については、町田洋 新井房夫著東京大学出版会 2003『新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺-』(p.108～110)から引用した。なお、年代は放射性炭素年代測定法で算出され、暦年較正した年代である。



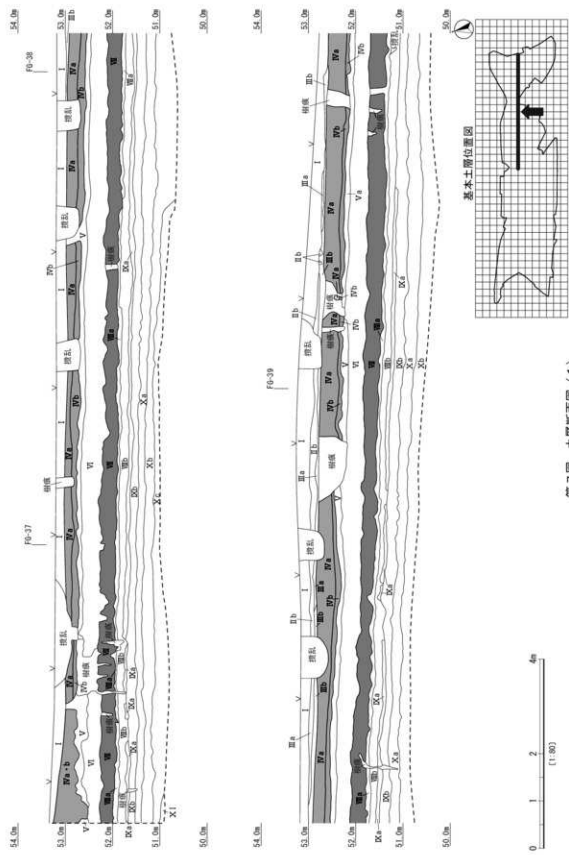
写真1 第2地点の土層



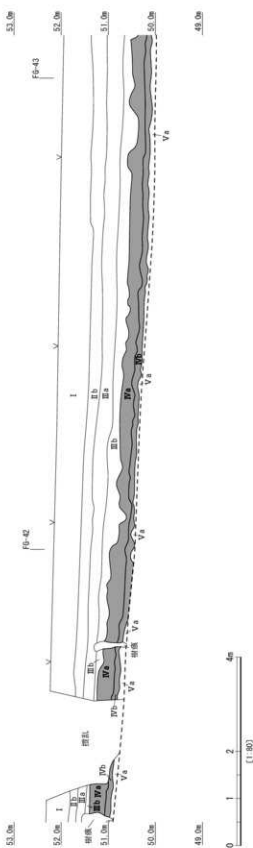
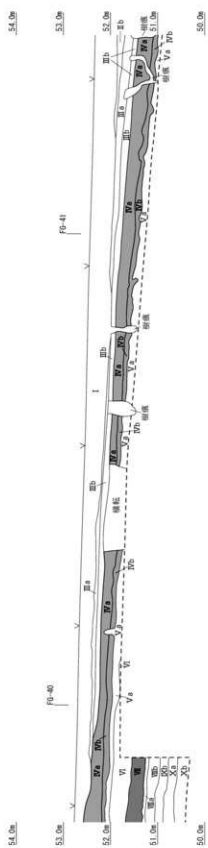
第6図 基本土層図



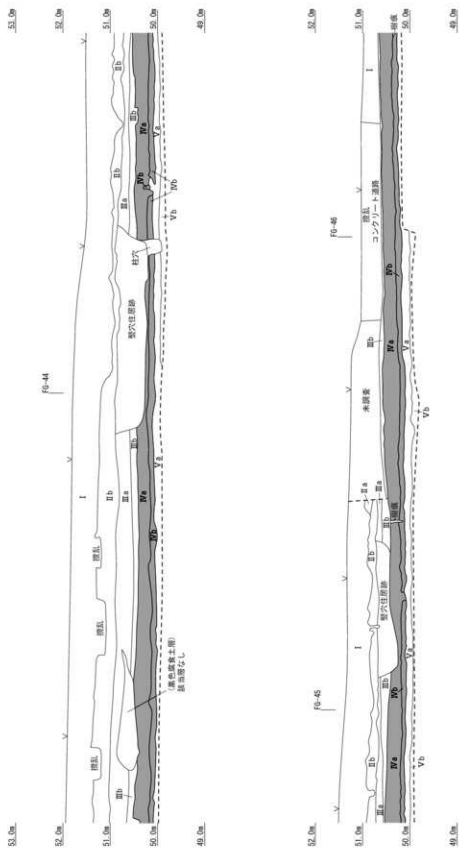
写真2 D-22区土層断面



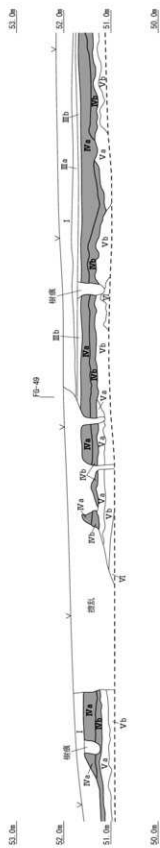
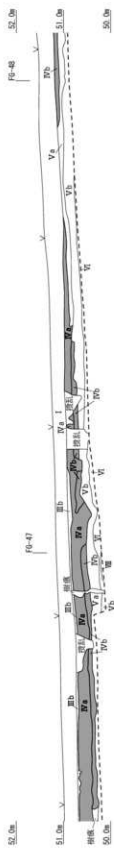
第 7 図 土層断面図 (1)



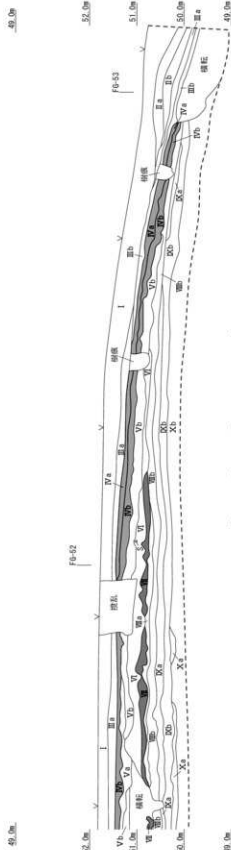
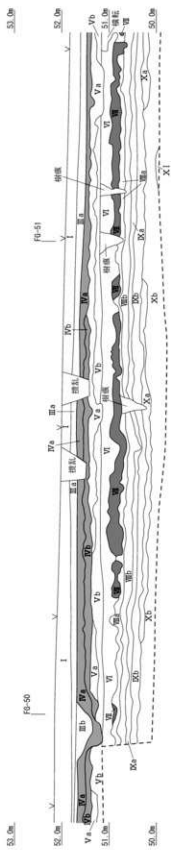
第8圖 土層断面圖 (2)



第9図 土層断面図(3)



第10図 土層断面図(4)



F0ライン基本土層図



第11図 土層断面図(5)

第4章 調査の成果

第1節 旧石器時代の調査

1 調査の概要

旧石器時代の調査は、その遺物包含層としてⅧ～Ⅹ層が対象となった。まず、薩摩火山灰層であるⅧ層を重機掘削により除去した後、順次、鋤鎌等を用いた人力掘削によって下層からの遺構遺物の検出に努めた。また、先行した旧石器トレンチ調査の結果に基づき調査範囲の拡張を行った。Ⅹ層にまで及んだ全調査面積は4,617㎡に達し、第2地点全体の調査対象面積23,346㎡の約20%に至った。本調査では、標準テプラA T層より上部のⅩ層を文化層として、ナイフ形石器や角錐状石器等の保有を特徴とした石器群が発見された。一方、Ⅷ～Ⅹ層中の出土遺物については皆無であった。

主体は、調査区東部C～G-50～53区の舌状に張り出した縁辺部の微高地において散漫な遺物分布が認められ、都合、石器ブロック7箇所とブロック外分布、礫群1基と礫分布域等が識別された(第12・13図)。垂直分布では、礫群と石器類が安定しているⅩ層中部が生活面であると考えられるが、遺物の自然営力による上下移動を考慮して、ここではⅩ層全体を一括して捉えている。これらの出土石器類は合計166点であり、その内訳は、ナイフ形石器3点、角錐状石器6点、槍先形尖頭器1点、台形石器2点、削器・掻器類4点(接合実質3点)、二次加工剥片5点(接合実質4点)、微小剥離痕剥片9点、剥片及び砕片128点、石核5点、礫器1点、礫石2点(接合実質1点)となっている。また、礫は礫群以外のものを含めて合計38個が出土している。

他方、台地東西の局所で旧石器トレンチ調査にかかり、E-47、F-38、G-23区それぞれのⅩ層中より石器類4点の散発的な出土が認められている(第12図)。その内訳は順に、微小剥離痕剥片2点、礫石1点、削器・掻器類1点である。

次に、石器石材については、黒曜石をはじめ多様性がみられている。調査区東部では、礫石を除いて、黒曜石(113点69%)、頁岩(29点18%)、ホルンフェルス(13点8%)、砂岩(5点3%)、水晶(2点1%)、流紋岩(2点1%)が用いられている。このうち黒曜石は肉眼観察により、多くの斑晶を含む日東系と三船系のものが主体をなしており、ホルンフェルスは粒子や風化度が異なる数種類、頁岩はいわゆる珪質頁岩までの数種類が細分できる。砂岩は粒状による3種類である。なお、母岩別個体数の厳密な分類は割愛した。また、接合については、小砕片以外の全点で試み、4例の接合資料がある。

以下、礫群、石器ブロックと出土石器の説明を述べる。主要な石器類45点を図示した。

2 遺構

(1) 第1礫群(第13・14・20図)

礫群としては1基のみが認められている。崖線沿いのC・D-53区境に位置する礫群で、西側約1mの近辺に重複せずに第2ブロックが位置している。確認面はⅩ層中部である。規模は径0.6m程の範囲に礫9個が疎らに分布しており、垂直分布は第2ブロック東側の分布幅と大差なく、やや低く下がるもの特に掘り込みなどは認められていない。また、中央部下面に被熱によるとみられる暗赤褐色の変質土が若干うかがわれたが、炭化物粒子の目立った混在は検出されなかった。構成礫の大きさは最大が径8cmで210gであり、華大以下の破砕礫を主体として、総重量は865gとなる。これらは全て焼け礫であるが、石材によって赤化の度合いに差異があり、全体に著しく被熱した状態ではなかった。更に、ス・ス・タール等の付着物については認められていない。石材では大きく安山岩と砂岩の亜角礫がみられ、おそらくは、それぞれに同一個体のものである可能性が高い。

(2) 第1～3礫分布(第13・18・20図)

礫群の他、調査区の広範囲に散在した少量の焼け礫の分布がみられており、29個を数える。特に南西側の石器分布域においてある程度の纏まりをみせ、礫群の拡散あるいは廃棄といった可能性からみて、一部を礫分布域として取り扱う。各分布域間での接合関係はみられていない。これらの総重量は3,670gとなる。

第1礫分布

F-50・51区境に位置し、第4ブロックと重複するように、径約3mの範囲に礫9個が疎らながら纏まってみられる。垂直分布は大半が10cm以内の高低差にあり、かかるブロック中の石器類と大差ない比高にある。構成礫は被熱赤化した径5cm前後の破砕礫からなり、接合関係はない。石材は砂岩と頁岩の亜円礫である。

第2礫分布

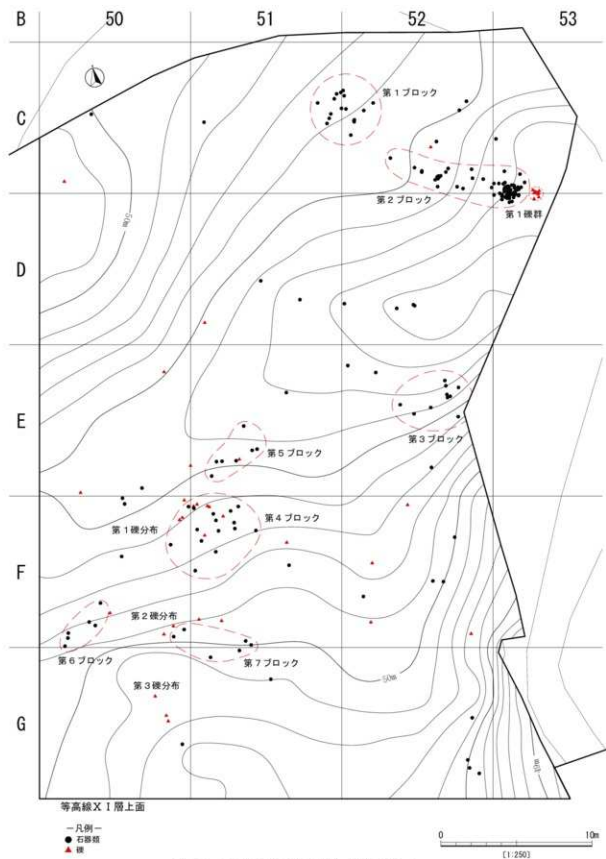
F-50・51区境に位置し、第7ブロックの外側約4m間に礫4個が近接してみられる。垂直分布は6cm以内の高低差にある。構成礫は被熱赤化した径5～10cm前後の破砕礫であり、接合関係はない。石材は砂岩の亜円礫である。

第3礫分布

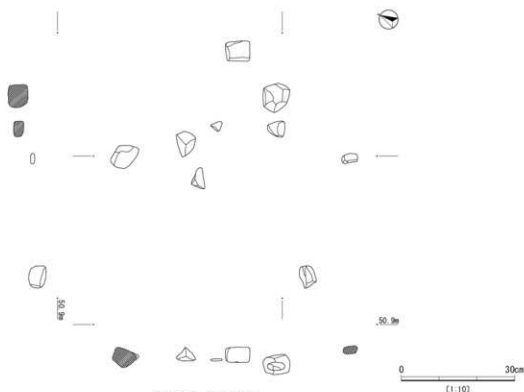
G-50区に位置し、比較的近接して礫3個がみられている。垂直分布は4cm以内の高低差にある。北側の1個は著しく被熱赤化して半割れた径10cmの扁平礫であり、他の礫には唯一ス・スの付着がみられている。接合関係はない。石材は砂岩である。



第12図 旧石器時代調査範囲と遺物出土区域図



第13図 東部調査区出土遺構・遺物分布図



第14図 第1群

3 石器分布

(1) 第1ブロック (第16・20図)

北側崖線寄りのC-51・52区に位置し、南東側に約3m離れて第2ブロックが位置する。分布は径約4mの範囲にやや纏まった広がりを持ち、垂直分布では最大幅13cm、大半が5cm以内の高低差にある。出土石器類は合計17点である。組成は日東系・三船系黒曜石とみられる剥片12点、碎片5点からなり、石器製作に関わる可能性が高い。特に抽出はしなかったが、剥片では3cm大のものを含んでいる。

(2) 第2ブロック及びブロック外 (第16・20図)

第1ブロックに近くC-52・53、D-53区に位置し、東側に隣接して第1群が存在する。分布は径約9mの範囲に纏まった広がりを持ち、その東側に径約1.5mの密な集中部が形成されている。垂直分布では地形に沿って最大幅40cm、東西で大半が10cm以内の高低差にある。出土石器類は合計73点であり、そのうち東側集中で60点程を占める。組成は珪質頁岩製のナイフ形石器1点(1)、水晶製の小碎片1点の他、主体は日東系・三船系黒曜石による剥片21点(2~4・他)、碎片50点であり、東側集中に1cm以下の剥片・碎片が数多くみられる。第1ブロックと同様に石器製作に関わる可能性が大きい。

次いでブロック外として、第2ブロックの北側に離れ、

頁岩製剥片3点(5・6・他)、碎片1点の遍在がある。垂直分布は35cm間の高低差にあり、地形に沿って第2ブロックの平均値より下位にある。これらの石材はそれぞれに母岩が異なるものである。

(3) ブロック外C-50・51区 (第15・20図)

第1ブロックから西側に離れ、頁岩製台形石器1点(7)と砂岩製剥片1点(8)の点がある。垂直分布は第1ブロックの平均値にほぼ等しい。

(4) 第3ブロック及びブロック外 (第17・20図)

東側崖線寄りのE-52区に位置し、北側に約12m離れて第2ブロック、西側に約10m離れて第5ブロックが位置する。分布は径約5mの範囲に散漫な広がりを持ち、垂直分布は地形に沿って最大幅48cm、殆どが20cm以内の高低差にある。出土石器類は合計10点(接合実質8点)である。組成はホルンフェルス製の削器・搔器類が実質1点(9a+b)、剥片1点(10)、碎片1点、頁岩と黒曜石製の剥片2点(11・12)、頁岩製の二次加工剥片が実質1点(13a+b)、石核1点(14)、蔽石1点(15a)であり、調整剥片や碎片類を欠き、石材ではそれぞれ単独で存在する。また、削器・搔器類(9)と二次加工剥片(13)のそれぞれに接合関係がみられている。更に、東部一帯において1点出土した蔽石(15a)は、

第5ブロック中に分布する破片(15b)と、約12m間の接合関係にある。

次いでブロック外として、第3ブロックの周囲及び北西側空間、D-51・52、E-51・52区に点在する石器類を一括する。垂直分布は地形に沿って75m間の高低差にあるが、多くは第3ブロックの分布幅とほぼ等しい。出土石器類は合計10点を数える。器種別では、頁岩製台形石器1点(16)、砂岩・黒曜石・水晶製の角錐状石器3点(17～19)、ホルンフェルス製のナイフ形石器1点(20)、黒曜石製剥片2点、頁岩製剥片3点がみられている。石材では黒曜石を除いて、それぞれ単独で存在するが、頁岩製剥片は珪質のものが比較的至近に分布し、うち2点は同一母岩のものとみられる。

(5) 第4ブロック及びブロック外(第18・20図)

崖線より内側に入りF-50・51区境に位置し、北側1mの至近に第5ブロック、南西側にやや離れて第6・7ブロックがユニットを形成するように位置する。分布は径約6mの範囲に散漫な広がりを持ち、垂直分布では最大幅15cm、大半が10cm以内の高低差にある。出土石器類は合計15点である。組成は砂岩製礫器1点(21)、頁岩製二次加工剥片1点(22)、頁岩製剥片2点(23・他)、ホルンフェルス製剥片4点(24・他)と砕片1点、日東系・三船系黒曜石とみられる剥片2点、砕片4点からなる。石材では黒曜石を除いて、それぞれ単独で存在するが、風化著しいホルンフェルスの剥片3点が中央付近にみられ、同一個体の調整剥片である可能性が高い。

次いでブロック外として、第4ブロックから離れて、西側にホルンフェルス製の槍先形尖頭器1点(25)と剥片2点、東側に頁岩製剥片1点が点在する。垂直分布は第4ブロックの分布幅とほぼ等しい。なお、ホルンフェルス製の剥片については、槍先形尖頭器の調整剥片である可能性がある。

(6) 第5ブロック及びブロック外(第18・20図)

第4ブロックに接近してE-51区に位置し、東側に約10m離れて第3ブロックが位置する。分布は径約4mの範囲に散漫な広がりを持ち、垂直分布では最大幅27cm、殆どが15cm以内の高低差にある。出土石器類は合計7点である。組成は黒曜石製の二次加工剥片1点(26)、石核1点(28)、剥片2点、砕片1点、頁岩製剥片1点(27)、敲石破片1点(15b)である。石材では黒曜石製、二次加工剥片(26)の1点は漆黒の色調を特徴として、上牛鼻系の可能性がある。

次いでブロック外として、第5ブロックから西側に離れ、黒曜石製石核1点(29)の点在がある。垂直分布は第5ブロックの平均値とほぼ等しい。

(7) 第6ブロック(第18・20図)

第4ブロックから南西側に約6m離れてF-50区に位置する。分布は径約4mの範囲に散漫な広がりを持ち、垂直分布は全てが5cm以内の高低差にある。出土石器類は僅かに合計6点である。組成は頁岩製ナイフ形石器1点(30)、頁岩製剥片3点(31・32・他)、黒曜石製剥片1点、砕片1点である。石材はそれぞれ単独で存在する。

(8) 第7ブロック及びブロック外(第18・20図)

第4ブロックの南側に約4m離れてF-50・51区に位置し、西側に位置する第6ブロックと約5mの距離を置く。分布は径約5mの範囲に散漫な広がりを持ち、垂直分布は最大幅23cm、殆どが10cm以内の高低差にある。出土石器類は僅かに合計6点(接合実質5点)である。組成は黒曜石製の角錐状石器1点(33)、砂岩製の削器・搔器類1点(36)、頁岩製剥片が実質3点(34・35a+b・他)である。石材ではそれぞれ単独で存在し、ブロック内として剥片1点(35)に接合関係がみられている。

次いでブロック外として、第7ブロックから南側に離れ、頁岩製の削器・搔器類1点(37)、黒曜石製剥片1点の点在がある。垂直分布は地形に沿って低く位置する。

(9) ブロック外F・G-52区(第19・20図)

ブロック外として、第4・7ブロックより東側崖線寄りの空間、F・G-52区で南北に分かれて点在する石器類を一括する。垂直分布は地形に沿って双方とも、殆どが10cm以内の高低差にある。出土石器類は合計8点を数えるが、その他にG-53区のX層中より位置不明の1点がみられている。器種別では、F-52区に黒曜石製の角錐状石器1点(38)と二次加工剥片1点、3cm大の流紋岩製剥片2点が分布し、G-52区では黒曜石製の角錐状石器1点(39)、石核1点(40)、剥片1点、頁岩製剥片1点からなる纏まりがみられる。また、G-53区内の1点は砂岩製の石核(41)である。石材では日東系・三船系黒曜石の他、それぞれ単独で存在する。

(10) E-47、F-38、G-23区(第21～23図)

調査区東部以外のX層単独出土石器について述べる。

E-47区

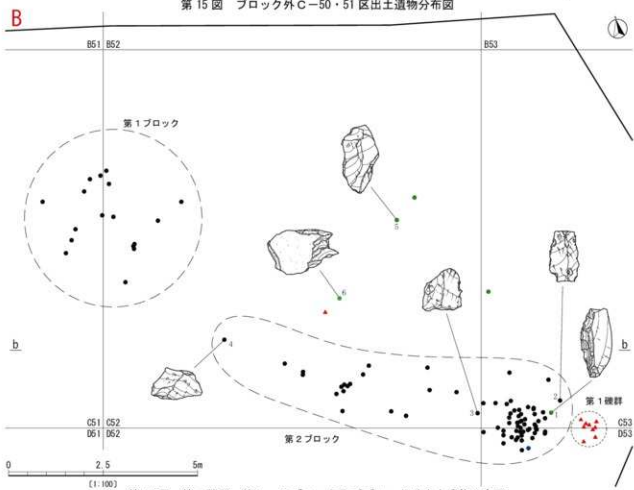
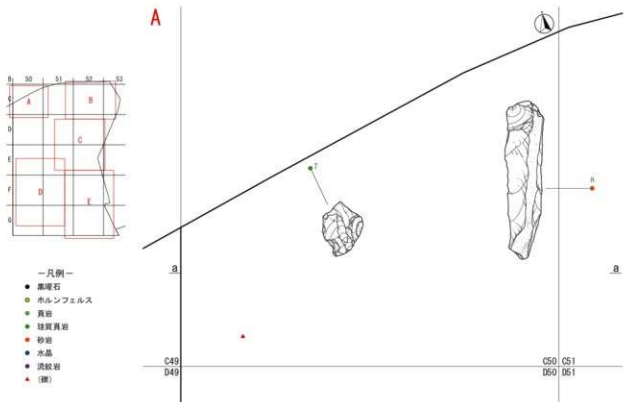
台地東側張出部の付根で北側崖線に面して、剥片2点(42・43)が接近してみられている。垂直分布では25cmの高低差がある。

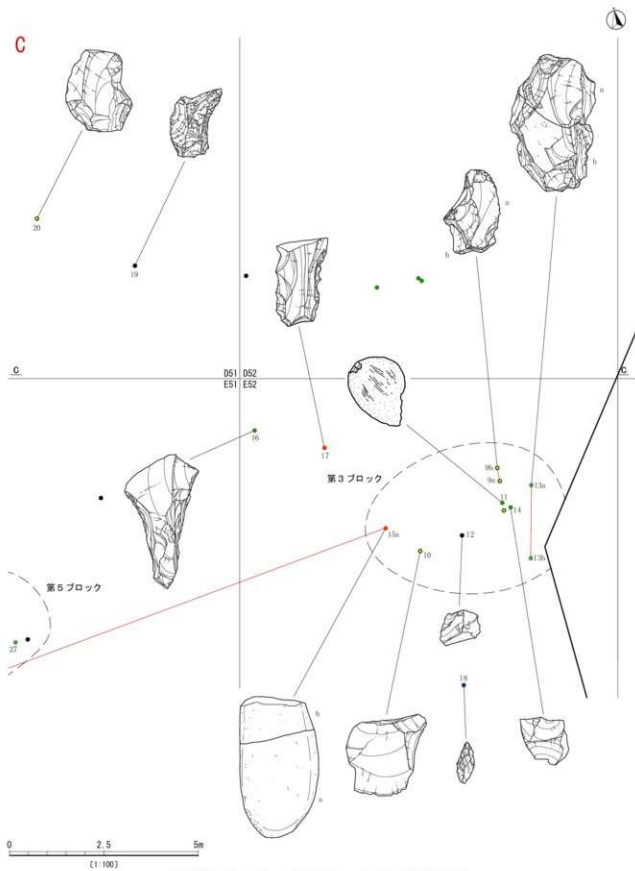
F-38区

台地中央部から北側崖線にかけての緩斜面において、敲石1点(44)がみられている。

G-23区

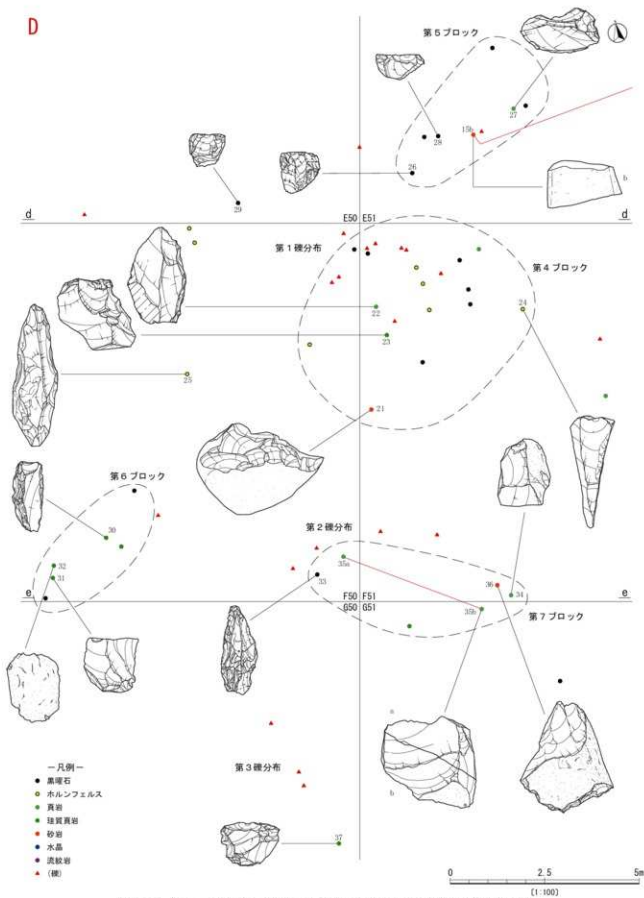
台地西側崖線より内側に入った緩斜面において、削器・搔器類1点(45)がみられている。



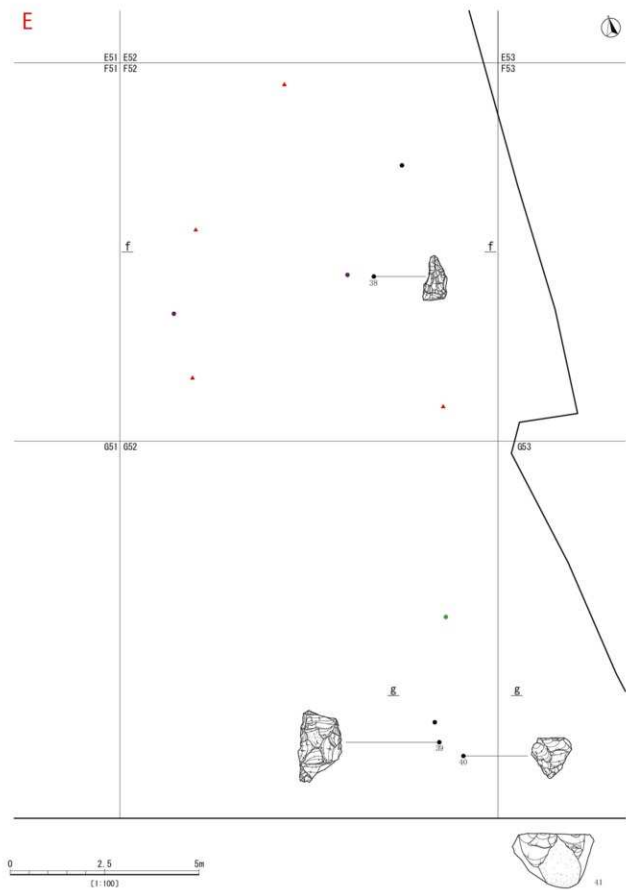


第17図 第3ブロック及びブロック外出土遺物分布図

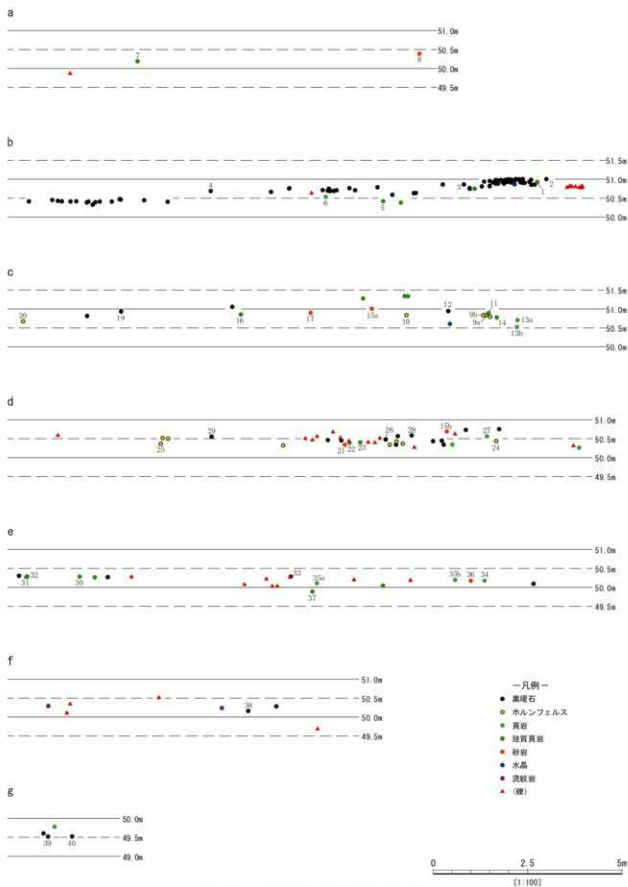
D



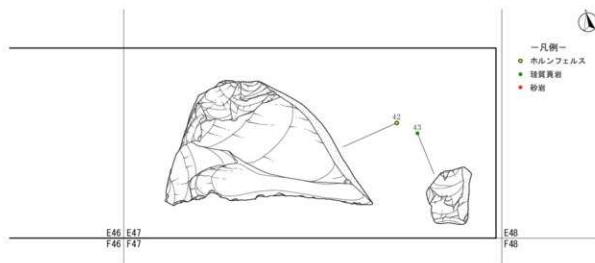
第18図 第1～3線分布、第4～7ブロック及びブロック外出土遺物分布図



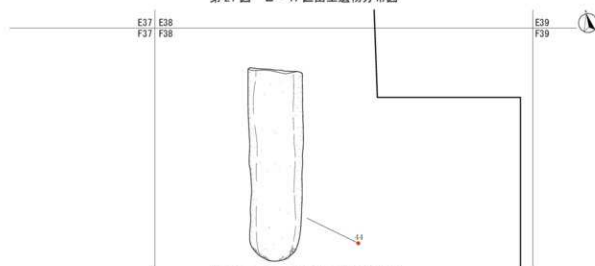
第 19 図 ブロック外 F・G-52 区出土遺物分布図



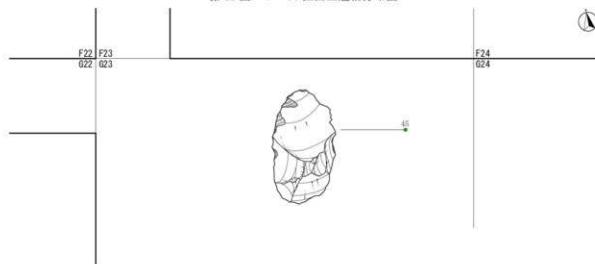
第 20 図 東部調査区出土遺物垂直分布図



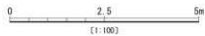
第 21 図 E-47 区出土遺物分布図



第 22 図 F-38 区出土遺物分布図



第 23 図 G-23 区出土遺物分布図



4 出土石器

(1) 第2ブロック及びブロック外(第24図1~6)

1は一側縁加工のナイフ形石器とし、角錐状石器と似通った形態を呈する。素材は寸詰まりの横長剥片とみられ、二次加工はその打面側に腹面から分厚くブランディングを施している。先端側は欠損する。石材は黒褐色の珪質頁岩であり、第6ブロック出土のナイフ形石器(30)と類似し、同一母岩である可能性がある。

2~4は日東系黒曜石製の剥片断片である。2・3は中軸に稜線をもつ比較的整ったもので、2の両側縁には微小剥離痕が顕著である。

5・6はどちらも珪質頁岩製の剥片であり、5は薄手の縦長剥片として両側縁に微小剥離痕が顕著である。

(2) ブロック外C-50・51区(第25図7・8)

7は小型の台形石器である。素材は剥片剥離時の分離破片とみられ、基部の片側に素材面を残し、側縁に部分的な二次加工を施す。石材は単独の珪質頁岩である。

8は整った背面構成をもつ石刃状の縦長剥片であり、両側縁に微小剥離痕を留める。石材は砂岩である。

(3) 第3ブロック及びブロック外(第26~28図9~20)

9は削器・搔器類である。ホルンフェルス製の縦長剥片を素材として、その末端側に搔器刃部にみられる急斜な二次加工を加えている。また、鋭い右側縁に生じた微小剥離痕がみられる。器体の末端側刃部は破損しており、接合破片(9b)の他、左側縁にかけて損なわれている。他に同一個体とみられる砕片1点がブロック内にある。

10~12は剥片である。10は浅黄色のホルンフェルス製で、直線状の下縁に微小剥離痕が生じている。11は珪質頁岩製で、表皮全体が磨れており、縦線状の著しい擦痕を有する。縁辺の所々に微小剥離痕が生じている。12は黒曜石製で、下端隅に微小剥離痕が生じている。

13は二次加工剥片とした。やや珪質に欠ける頁岩製の分厚い剥片を素材として、その打面側と末端側から粗い剥離を行っており、横長ないし不定形剥片による階段状剥離痕を留める。器体は一端を欠くうえに中央から折損し、角錐状石器の未製品か、あるいは単に石核といった可能性も残る。なお、折れの方は腹面側からである。

14は珪質頁岩製の石核であり、小剥片を得た多面体を呈する残核である。部分的に著しく風化している。

15は砂岩製の長楕円礫を用いた蔽石であり、末端側作業面の小口左右に顕著な敲打痕が生じている。中間部の破片(15b)がみられ、更に上部を欠損する。

16は珪質頁岩製の台形石器であり、基部が尖る長身の撥状を呈する。二次加工は幅広の素材剥片を横位に用い、両側縁を大きく剥離して粗いブランディングを施しており、腹面側にも浅く平坦な調整剥離を加えている。

刃縁には微小剥離痕が生じている。

17~19は角錐状石器である。17は砂岩製で、甲高の後縁をもつ縦長剥片を素材に、鋸歯縁の二次加工を両側縁に行っている。おそらくは先端側の上半部を欠損する。18は水晶製の小型の角錐状石器とみられる先端側の破片である。調整剥離が両面に及び先鋭に形作られている。19は日東系の黒曜石製であり、粗い二次加工を両側縁に施して湾曲した不整形を留める。基部は素材剥片の打面を残置して腹面の打磨を除去しており、斜行した上面については偶発剥離の可能性を残す。

20はホルンフェルス製のナイフ形石器であり、縦長剥片の打面を残置した基部の両側縁に二次加工を施している。上部先端側の欠損に伴い、折れ面から腹面右側縁に生じた特徴的な衝撃剥離痕が認められる。

(4) 第4ブロック及びブロック外(第29・30図21~25)

21は重量感のある拳大の片刃礫器である。粗く剥離した厚みのある亜角礫に鋸歯状の刃縁が形作られている。石材は粗粒砂岩であり、石核とは判断しなかった。

22は片方の側縁を整えた二次加工剥片である。背面右側縁の剥離はステップした素材面とみられ、腹面側の下半に調整剥離を加えている。石材は珪質に欠ける頁岩である。ナイフ形石器である可能性が残る。

23は珪質頁岩製の不定形剥片である。階段状剥離の背面構成をもつ一方、鋭い左側縁全縁に使用痕とみられる微小剥離痕が生じている。

24はホルンフェルス製の縦長剥片であり、先細りの石刃状を呈して整った背面構成にある。縁辺の微小剥離痕は風化によって不明瞭であるが、特にダメージはない。

25は浅黄色に風化したホルンフェルス製の槍先形尖頭器である。粗い剥離の両面加工によって形作られ、基部に屈曲をもつ長幅比3:1の左右非対称形を呈する。調整剥離はブランディング状に急斜度へ施され、先端は鈍く、ゴロっとして、分厚く不整形断面形を留める。

(5) 第5ブロック及びブロック外(第31図26~29)

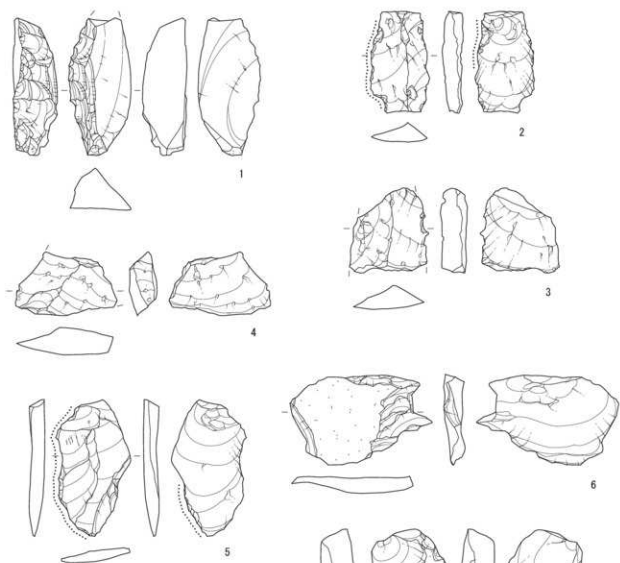
26は上半部を欠損した二次加工剥片であり、ナイフ形石器である可能性をもつ。左側縁側が素材剥片の打面方向となり、腹面の打磨を除去した後、背面側の両側縁に部分的な調整剥離を行っている。

27は頁岩製の剥片であり、剥離時の分離破片とみられる。鋭い縁辺の所々に微小剥離痕が生じている。

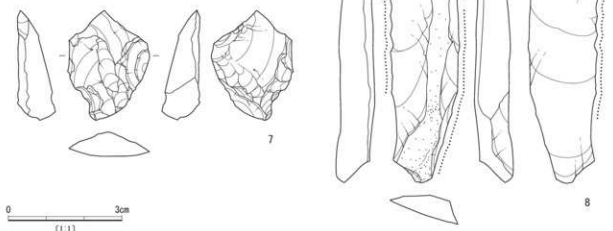
28は三船系黒曜石製の石核であり、やや厚みのある不定形剥片から小片を剥離した残核である。

15b(第27図)は上下に折れた蔽石の中間部であって、使用による敲打痕を全くもたない破片である。

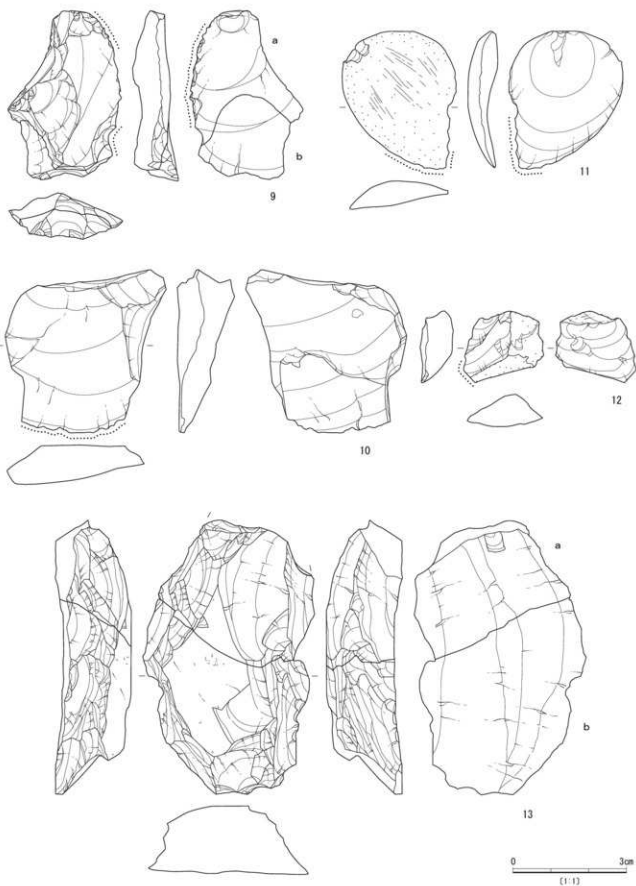
29は日東系黒曜石製の石核であり、極限まで小片を剥離した角柱状の残核である。



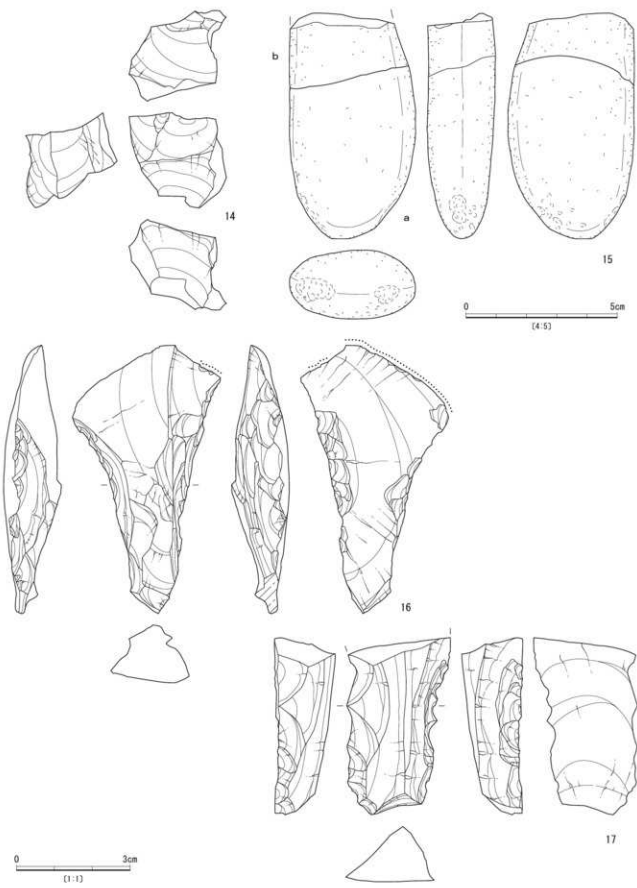
第24図 第2ブロック及びブロック外出土石器



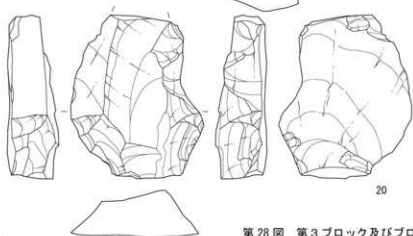
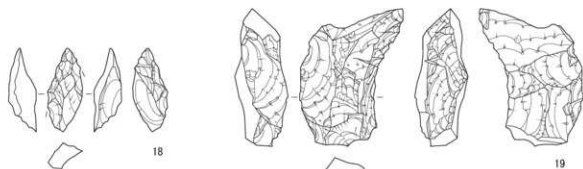
第25図 ブロック外C-50・51区出土石器



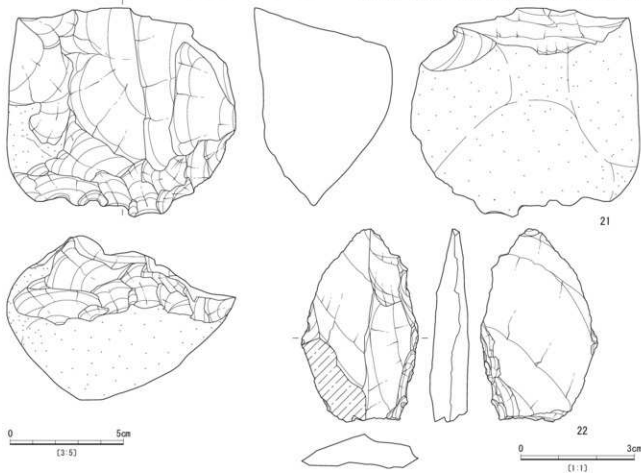
第26図 第3ブロック及びブロック外出土石器(1)



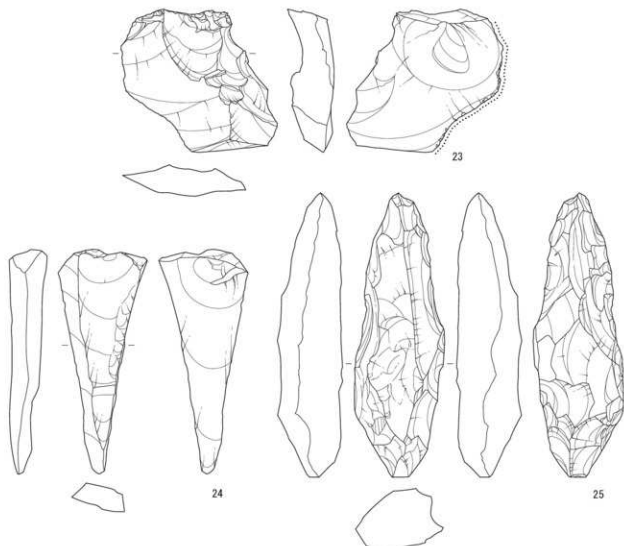
第27図 第3ブロック及びブロック外出土石器(2)



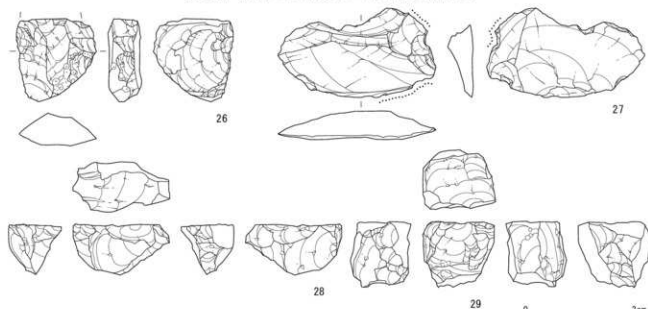
第28図 第3ブロック及びブロック外出土石器(3)



第29図 第4ブロック及びブロック外出土石器(1)



第30図 第4ブロック及びブロック外出土石器(2)



第31図 第5ブロック及びブロック外出土石器

(6) 第6ブロック (第32図30~32)

30は珪質頁岩製のナイフ形石器である。素材は寸詰まりの横長片とみられ、二次加工はその打面側に背腹両面から分厚くブランディングを施し、反対側縁では浅い調整剥離を加えている。欠損する先端側からの剥離面がブランディング面を切っており、使用による衝撃剥離の可能性もある。

31・32は珪質頁岩製の剥片であり、鋭い縁辺をもつ。

31は階段状剥離の背面構成をみせ、両側縁の所々に微小剥離痕が生じている。32は滑らかな表皮をもつ。

(7) 第7ブロック及びブロック外 (第33図33~37)

33は日東系黒曜石製の角錐状石器である。厚みのある剥片を縦位に用いて素材としており、上半部稜線の一部にその背面を留める。二次加工は両側縁からの急斜度な調整剥離と一部稜上調整を施し、器体上半部では腹面側にも調整を加えて形作られている。なお、この腹面側により先端部が若干損なわれている。また、基部は僅かに欠損している。

34・35は頁岩製の剥片であり、35は断片となる。

36は砂岩製の削器・挿器類である。礫表皮をもつ分厚い不定形剥片を素材としており、二次加工はその扇状に開いた末端側を刃部として、腹面側から、弧状に鋸歯縁となる調整剥離を施している。石材の砂岩は、G-53区出土の石核(41)と同一母岩である可能性が高い。

37は削器・挿器類である。不定形剥片の素材縁辺一部を残して、腹面側から丸みを帯びた台形状に加工しており、その窄まった一端にやや急斜度の刃部調整を行っている。石材は単独の珪質頁岩である。

(8) ブロック外F・G-52区 (第34図38~41)

38・39は三船系黒曜石製の角錐状石器である。38は小型品とみられる欠損した先端側上半部であり、不整形に雑な加工がみられる。39は厚みのある素材剥片の打面と末端側を断ち切るように両側縁として、背面側に粗い急斜度剥離の二次加工を施している。先端側と基部を欠損するが、偶発剥離の可能性もある。クラックが目立つ石材石質である。

40は三船系黒曜石製の石核であり、臨機的に極限まで小片を剥離した残核である。

41は砂岩製の石核であり、表皮と節理面を留める分割礫の残核である。打面転移を行っている不定形剥片数枚の剥離面がみられるが、剥片剥離作業はあまり進行しておらず、石核原形ともいえる。

(9) E-47, F-38, G-23区 (第35・36図42~45)

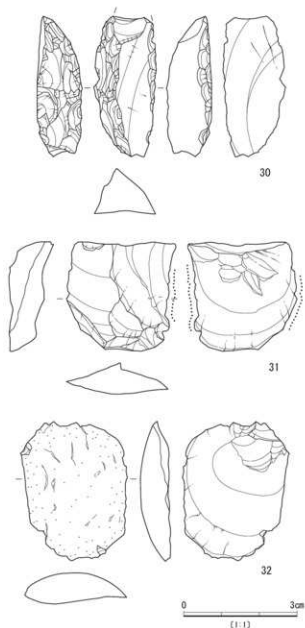
42はホルンフェルス製の剥片である。原礫面から割り取られた大振りな不定形剥片であり、二次加工はなく、

鋭い直線状下縁の背面側におそらくは使用痕とみられる顕著な微小剥離痕が生じている。

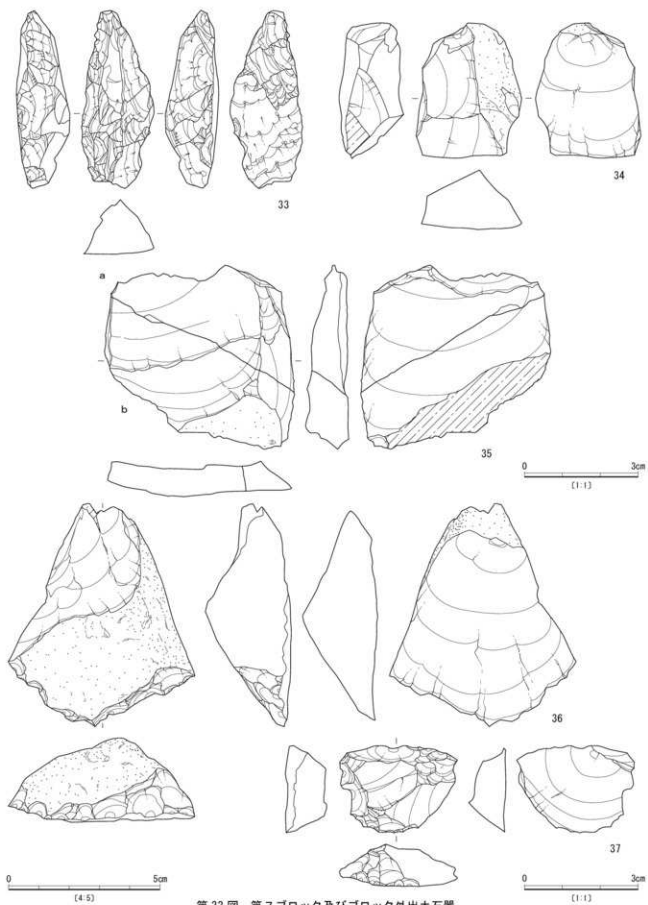
43は変成著しい珪質頁岩製の剥片で、両側縁の一部に微小剥離痕が生じている。

44は砂岩製の敲石である。非常に整った扁平の棒状礫を用いており、末端側作業面の小口左右に顕著な敲打痕が生じている。器体上部を欠損するものである。

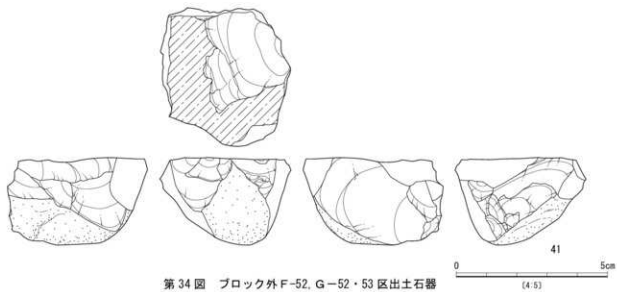
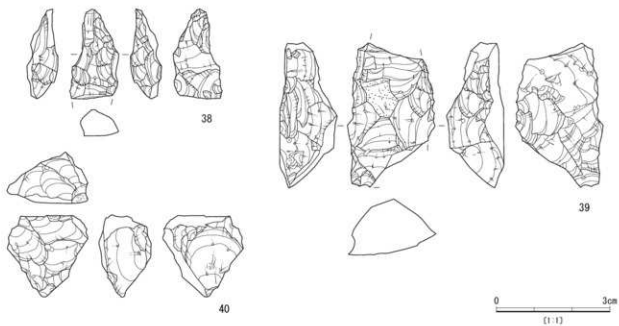
45は珪質頁岩製の削器・挿器類であり、薄く丸みを帯びた筒状の形態を呈する。二次加工は、比較的大きな剥離面によって構成された剥片を素材として、主に腹面側の左側縁に粗い整形剥離を施しており、右側縁には浅い調整剥離を加えている。背面側左縁辺の上部2箇所に、浅く抉れた特異な擦痕が生じている。



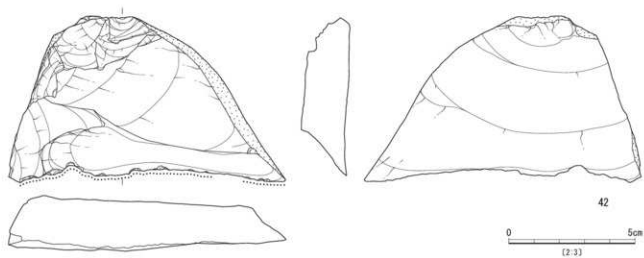
第32図 第6ブロック出土石器



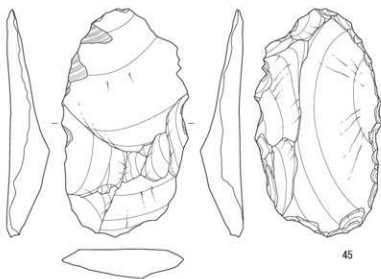
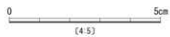
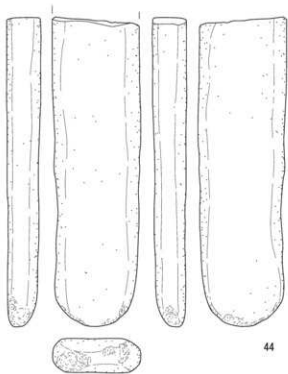
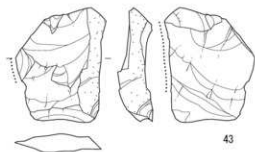
第33図 第7ブロック及びブロック外出土石器



第34図 ブロック外F-52, G-52・53区出土石器



第35図 E-47区出土石器



第36图 E-47, F-38, G-23区出土石器

第3表 旧石器時代出土石器観察表

採回番号	掲載番号	品名	出土区	層	取上番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
24	1	ナイフ形石器	2ブロック	X	15794	(3.65)	1.65	1.2	5.7	珩質頁岩	
24	2	微小剥離核削片	2ブロック	X	15671	2.7	1.6	0.6	2.0	黒曜石	
24	3	削片	2ブロック	X	15815	(2.2)	(2.1)	(0.7)	2.9	黒曜石	
24	4	削片	2ブロック	X	15739	(1.7)	(2.7)	0.7	2.7	黒曜石	
24	5	微小剥離核削片	C52	IXc	8182	3.6	1.9	0.4	2.4	珩質頁岩	
24	6	削片	C52	X	15974	2.4	3.7	0.5	3.0	珩質頁岩	
25	7	台形石器	C50	X	15738	2.9	2.2	1.0	4.2	珩質頁岩	
25	8	微小剥離核削片	C51	X	15734	8.3	2.0	0.9	13.5	砂岩	
26	9b	削器・接器類	3ブロック	X	15986	(4.4)	3.0	0.7	9.3	ホルンフェルス	9bと剥離面接合
26	9c	削器・接器類	3ブロック	X	15985						
26	10	微小剥離核削片	3ブロック	X	15994	4.3	4.2	1.5	21.7	ホルンフェルス	
26	11	微小剥離核削片	3ブロック	X	15987	3.6	3.0	0.8	8.3	珩質頁岩	
26	12	微小剥離核削片	3ブロック	X	15993	1.9	2.1	0.8	2.4	黒曜石	
26	13a	二次加工削片	3ブロック	X	15991	(7.25)	4.55	2.0	65.1	頁岩	13aと折れ面接合
26	13b	二次加工削片	3ブロック	X	15992						
27	14	石核	3ブロック	X	15990	2.5	2.6	2.4	8.6	珩質頁岩	
27	15a	礫石	3ブロック	X	15995	7.3	4.2	2.2	94.4	砂岩	15aと折れ面接合
27	15b	礫石	5ブロック	X	15756						
27	16	台形石器	E52	X	15704	7.1	3.9	1.5	24.8	珩質頁岩	
27	17	角錐状石器	E52	X	15703	(4.7)	(2.7)	(1.6)	17.9	砂岩	
28	18	角錐状石器	E52	X	15996	(2.2)	(0.9)	(0.7)	0.9	水滸	
28	19	角錐状石器	B51	X	15732	(3.65)	2.7	1.4	10.9	黒曜石	
28	20	ナイフ形石器	B51	X	15731	(4.35)	3.5	1.35	21.2	ホルンフェルス	
29	21	礫器	4ブロック	X	15757	9.2	10.1	6.1	838.0	砂岩	
29	22	二次加工削片	4ブロック	X	15758	5.1	3.1	0.9	14.2	頁岩	
30	23	微小剥離核削片	4ブロック	X	15789	3.8	4.1	1.2	12.6	珩質頁岩	
30	24	削片	4ブロック	X	15772	5.9	2.4	1.0	7.1	ホルンフェルス	
30	25	槍先形尖頭器	F50	X	15852	7.5	2.4	1.7	30.2	ホルンフェルス	
31	26	二次加工削片	5ブロック	X	15846	(2.2)	2.1	0.9	4.1	黒曜石	
31	27	微小剥離核削片	5ブロック	X	15838	2.4	4.2	0.8	4.7	頁岩	
31	28	石核	5ブロック	X	15786	1.3	2.5	1.3	3.4	黒曜石	
31	29	石核	E59	X	15853	1.7	1.9	1.6	5.3	黒曜石	
32	30	ナイフ形石器	6ブロック	X	15724	(3.7)	1.65	1.2	6.8	珩質頁岩	
32	31	微小剥離核削片	6ブロック	X	15726	2.9	2.8	1.1	7.7	珩質頁岩	
32	32	削片	6ブロック	X	15725	3.7	2.8	0.8	8.3	珩質頁岩	
33	33	角錐状石器	7ブロック	X	15718	4.7	1.95	1.4	9.8	黒曜石	
33	34	削片	7ブロック	X	15712	3.6	2.8	1.6	15.9	頁岩	
33	35a	削片	7ブロック	X	15819	(4.8)	5.0	1.1	22.8	頁岩	35aと折れ面接合
33	35b	削片	7ブロック	X	15714						
33	36	削器・接器類	7ブロック	X	15713	7.3	6.1	2.7	88.2	砂岩	
33	37	削器・接器類	G50	X	15936	2.3	3.1	1.1	6.6	珩質頁岩	
33	38	角錐状石器	F52	X	15999	(2.35)	1.35	(0.8)	1.9	頁岩	
34	39	角錐状石器	G52	X	15935	(3.8)	2.3	1.5	12.1	黒曜石	
34	40	石核	G52	X	15936	2.1	2.2	1.3	4.1	黒曜石	
34	41	石核	G53	X	-	2.8	4.3	4.6	63.9	砂岩	X層一括
35	42	微小剥離核削片	E47	X	17123	6.6	11.1	1.9	147.3	ホルンフェルス	
36	43	微小剥離核削片	E47	X	17120	3.0	2.4	0.9	4.7	珩質頁岩	
36	44	礫石	F38	X	17155	(10.2)	2.8	1.1	61.1	砂岩	
36	45	削器・接器類	G23	X	31221	6.0	3.4	1.2	16.9	珩質頁岩	

第2節 縄文時代早期の調査

1 調査の概要

縄文時代早期の調査は、遺跡の調査範囲全域で行った。包含層は、IV a層・IV b層のアカホヤ火火山灰（鬼界カルデラ起源）とVII層の薩摩火火山灰（P14：桜島起源）に挟まれたV a層とV b層・VI層である。

縄文時代早期の調査は、IV a層・IV b層を重機掘削により除去した後、包含層であるV a層・V b層・VI層上面を人力により、鋤簾等で徐々に掘り下げた。なお、VI層は、遺物の出土が止まった後に遺構の有無の確認を行ったあと、重機によりVII層上面まで除去した。その後、VII層上面にて再度遺構等の有無の確認を行った。VI層中・VII層上面では、遺構・遺物は確認できなかった。

当該時期の遺構は、土器埋設遺構と集石である。

遺物は、縄文時代早期前葉～後葉の土器とともに、石器は石鏃、石皿、台石、敲石、磨石、石匙等が出土し、狩猟具、調理具が目立つ。各遺物は量的に少なく、主に集石の周辺に散布した状況で検出された。各遺構・出土遺物は各項目で詳しく記載する。

2 遺構

(1) 土器埋設遺構（第37図）

第2地点で検出された縄文時代早期の土坑は1基で、土器が埋設されていたため、土器埋設遺構（SK1）として調査を行った。

土器埋設遺構はH-21区、V b層で土器の口縁部を検出し、その後平面・断面ともに遺構のプランを確認し、土器埋設遺構と判断した。

プランはほぼ円形で、径が22cm、検出面からの深さは16cmである。土坑は土器よりやや広く掘られ、土器底部は土坑床面に接地していない状態であった。土坑を掘った後、土を入れながら土器を埋設したものと考えられる。土器がほぼ完全な形を保っていることから、埋

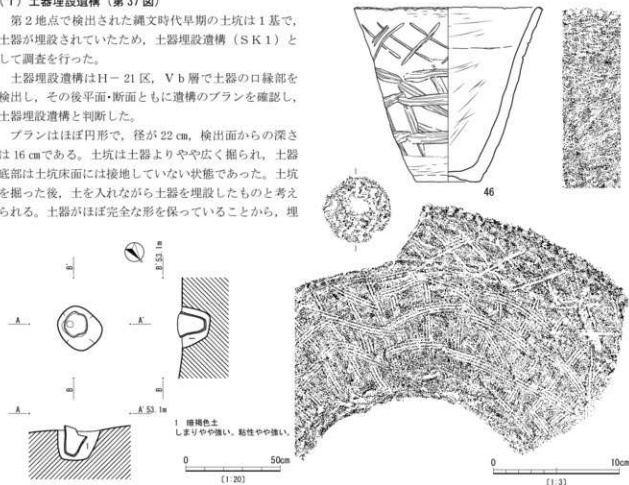
設時に完全に土で覆ったか、またはごく一部が地表面に露出した状態で埋設したものと思われる。

埋土は暗褐色土の単一層で、検出面のV b層に比べてしまりが弱く、粘性はやや強い。土器内埋土も同様であった。土器内埋土についてはフローテーションを行ったが、特に遺物は検出されなかった。

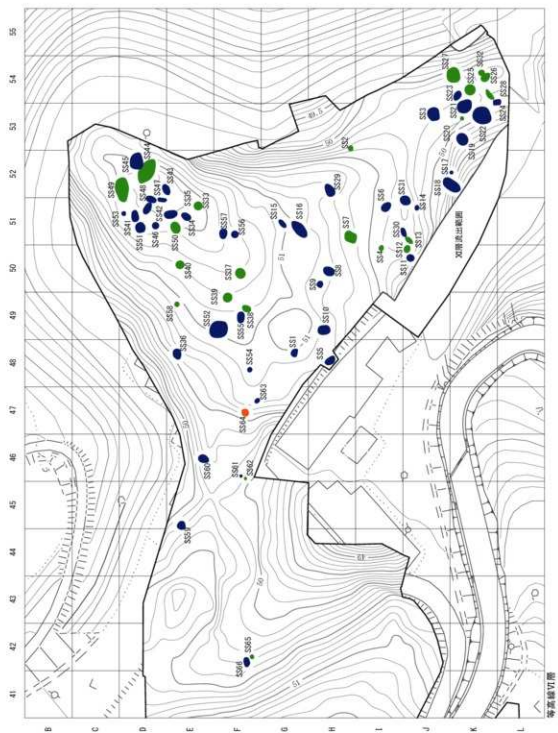
検出地点はすぐ西側が崖になっており、当時もおおよそ同じ地形だったと思われる。

土坑内に埋設されていた土器は、壺ノ神式土器に比定される土器1点である。46は、口縁部から頸部にかけて一部欠損している。高さ13.8cmの小型の深鉢で、口縁部は緩やかに外反する。口唇部には刻目が施される。文様は、口縁に貝殻腹線によると思われる沈線で斜め格子状の文様、胴部には同じく貝殻による格子状の条痕が明瞭に見られる。調整は、内面・底部から胴部にかけては斜位のナデ、口縁は横位のナデである。

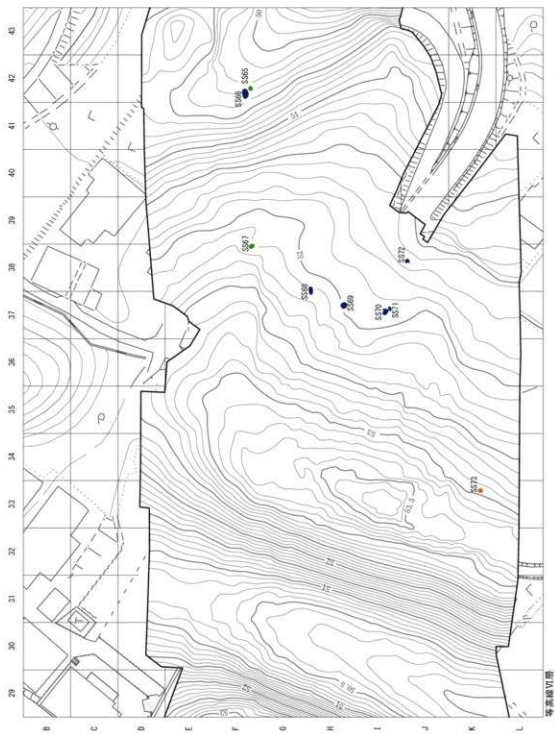
遺構の帰属時期は、埋設された土器から縄文時代早期後葉と思われる。



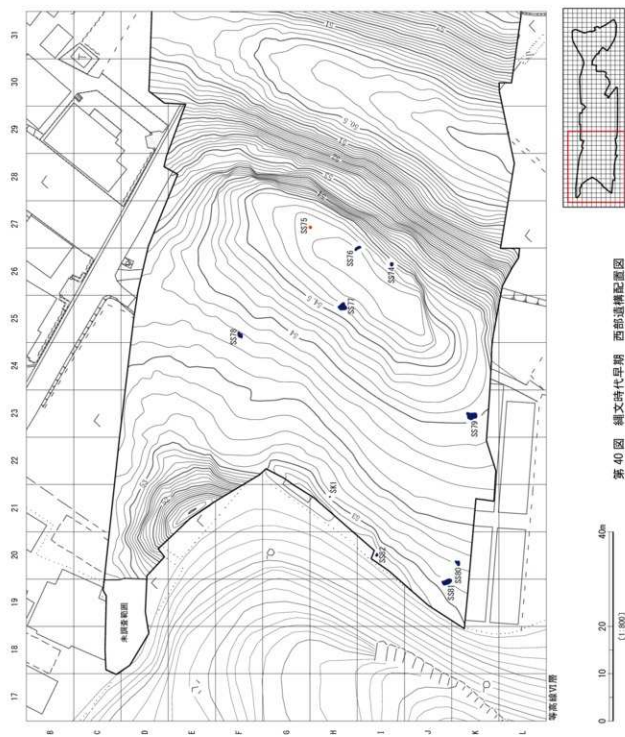
第37図 土器埋設遺構及び出土土器



第36圖 繡文時代早期 東部遺址範圍



第 39 圖 縄文時代早期 中央部遺構配置圖



(2) 集石

概要

第2地点で検出された、縄文時代早期の集石は82基を数える。平成25年度の調査で68基、平成26年度の調査で13基、平成27年度の調査で1基である。

集石の認定は、礫がまとまって検出された所を集石とし、検出面とした。V b層とVI層上面で検出されたものが多い。台地の中央部でも検出されたが、多くはI～L-50～54区の台地縁辺部と、C～E-51・52区の台地縁辺部の中でも高い地点で検出している。

実測については、礫の多い箇所と、2方向からの見通し断面に多くの礫が実測できる箇所を主軸に設定して行った。

形態分類

上野原遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000）では、集石の形態から次に示すように分類している。

- I. 構成礫が集中せずに、掘り込み部も確認できずに検出された集石
- II. 構成礫が集中するが、掘り込み部が確認できずに検出された集石。
- III. 構成礫が集中し掘り込み部が確認できたが、底石や壁石などの施設は確認できずに検出された集石。
- IV. 構成礫が集中し掘り込み部が確認できたが、底石や壁石などの施設を検出した集石。

と、4類型に分類している。また、稲荷泊遺跡（鹿児島

県立埋蔵文化財センター 2012）や船泊・高吉B遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2014）でも同様の分類を行っている。それらの分類方法を参考にして本遺跡の集石の分類を行った。

I類：構成礫の集中度が高く、掘り込み部のあるもの。

II類：構成礫の集中度は高いが、掘り込み部のないもの。

III類：構成礫の集中度が低く、掘り込み部のないもの。

なお、本遺跡では上野原分類におけるIV類に該当する集石は検出されなかったため、3類型に分類した。

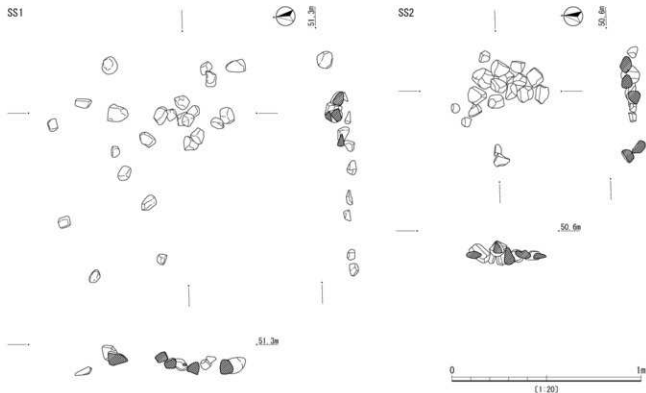
構成礫の集中度は感覚的であるが、礫と礫との間に空間があるか無いか、また礫が上下に重なり合っているかを目安としている。

集石1号（第41図）

G-48区のV b層で検出された。130×112cmの範囲に、礫24個からなる集石である。その中の70×60cmの範囲に13個の礫が集中している。集石中心部がかろうじて分かる程度の集中度である。拳大の安山岩の角礫が大部分を占める。礫総重量は約6.8kg、平均約283gである。形態分類はIII類である。

集石2号（第41図）

H-53区のV b層で検出された。60×50cmの範囲に、拳大の礫が18個集中している。石材は、いずれも安山岩円礫で、被熱痕のあるもの、破砕礫は少ない。集石の中心部のみが残った状態である。礫総重量は約7.0kg、平均約390gである。形態分類はII類である。



第41図 集石1・2号

集石3号 (第42図)

J-53区のVI層上面で検出された。200cm四方ほどの範囲に、39個の礫がみられる。中央の10個ほどの礫群が中心部と思われる。石材はほとんどが安山岩の円礫である。拳大の礫も見られるが、5cm程度の小さなものが多い。礫総重量は約6.2kg、平均約159gである。形態分類はIII類である。

集石4号 (第43図)

I-50区のVb層で検出された。38×37cmの範囲に、16個の拳大の礫が集中している。石材は、安山岩の円・角礫が全体の約7割を占め、それ以外は砂岩円礫である。被熱痕のあるもの、破碎したものはない。礫総重量は約3.4kg、平均約212gである。形態分類はII類である。

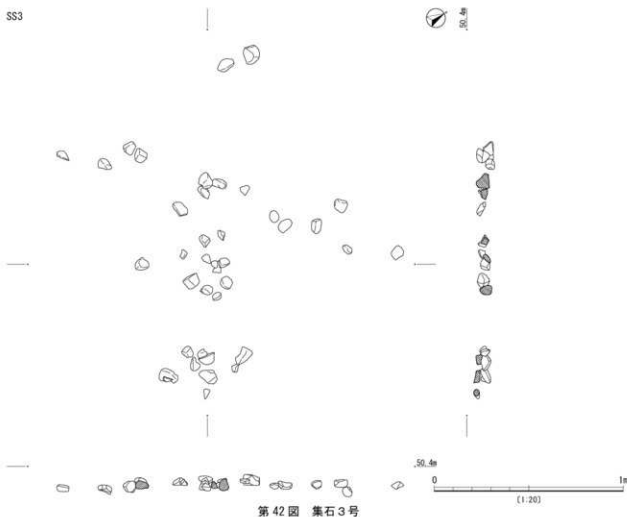
集石5号 (第43図)

H-48区のVI層上面で検出された。190×110cmの範囲に、拳大の礫24個がみられる。南側の80×50cmの範囲に、礫11個の集中箇所がある。その北・西側に散礫状に礫が広がる。石材はほとんど安山岩の円礫であるが、角礫も含まれている。礫総重量は約5.2kg、平均約215gである。形態分類はIII類である。

集石6号 (第43図)

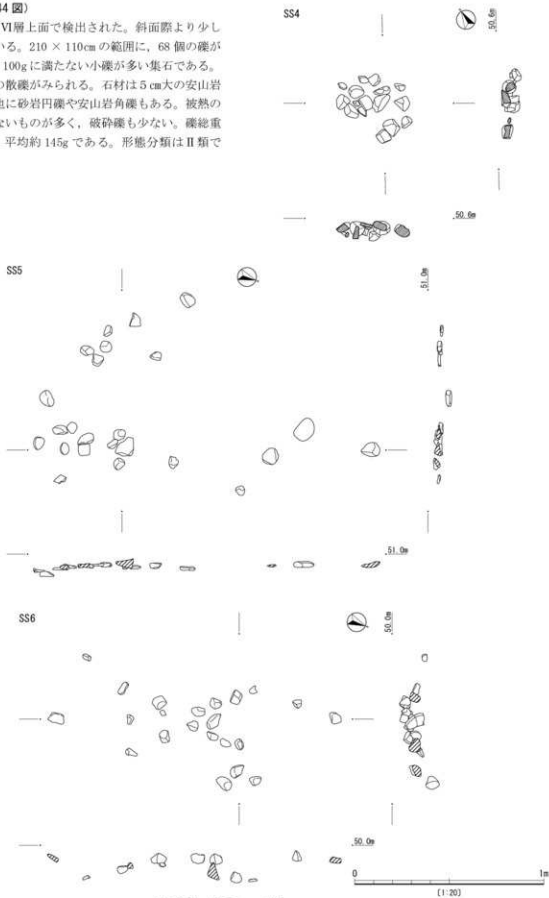
I-51区のVb層で検出された。160×90cmの範囲に、21個の礫がみられる。拳大のものが多く、小礫は少ない。石材は安山岩円礫が多いが、安山岩角礫、砂岩円礫もある。被熱の目立つものはなく、破碎礫も少ない。礫総重量は約3.0kg、平均約142gである。形態分類はIII類である。

SS3



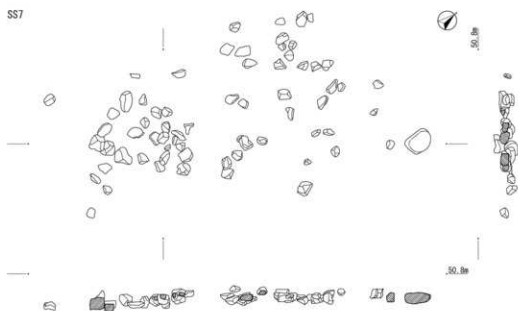
集石7号 (第44図)

H-51区のVI層上面で検出された。斜面際より少し奥に位置している。210×110cmの範囲に、68個の礫が集中している。100gに満たない小礫が多い集石である。周辺には多くの散礫がみられる。石材は5cm大の安山岩円礫が主で、他に砂岩円礫や安山岩角礫もある。被熱の痕跡が目立たないものが多く、破砕礫も少ない。礫総重量は約9.8kg、平均約145gである。形態分類はII類である。

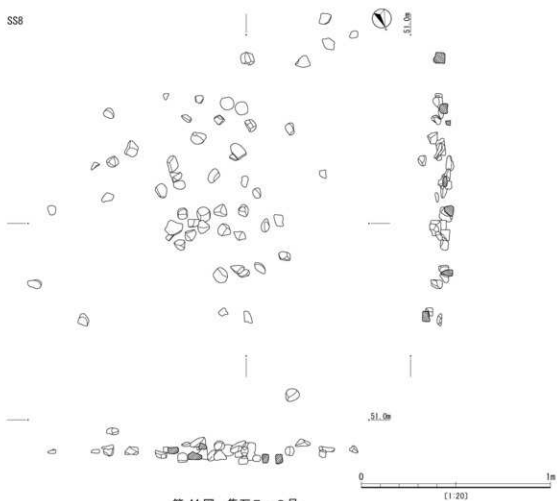


第43図 集石4~6号

SS7



SS8



第44図 集石7・8号

集石 8号 (第44図)

H-50区のVI層上面で検出された。170×160cmの範囲に、54個の礫がみられる。石材は安山岩角礫が中心だが、砂岩も見られる。被熱痕が目立つのは1点のみである。大きさは拳大のものが多く、礫総重量は約8.4kg、平均約156gである。形態分類はⅢ類である。

集石9号と隣接している。

集石 9号 (第45図)

H-50区のVI層上面で検出された。90×80cmの範囲に、拳大の礫23個がみられる。石材はいずれも安山岩角礫で、被熱痕が目立つものはない。礫総重量は約5.8kg、平均約252gである。形態分類はⅢ類である。

集石8号と隣接しており、構成礫も似ている。

集石 10号 (第45図)

H-49区のVI層上面で検出された。200×140cmの範囲に、23個の礫が広がっている。石材は安山岩円礫が中心だが、角礫も少数ある。被熱の痕跡はみられず、破砕礫も少ない。礫総重量は約4.8kg、平均約209gである。形態分類はⅢ類である。

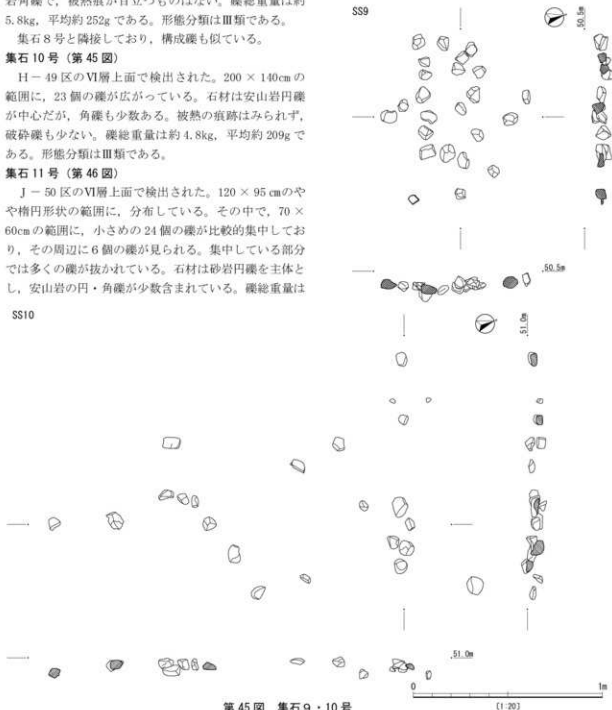
集石 11号 (第46図)

J-50区のVI層上面で検出された。120×95cmのやや楕円形状の範囲に、分布している。その中で、70×60cmの範囲に、小さめの24個の礫が比較的集中しており、その周辺に6個の礫が見られる。集中している部分では多くの礫が抜かれている。石材は砂岩円礫を主体とし、安山岩の円・角礫が少数含まれている。礫総重量は

約3.3kg、平均約109gである。形態分類はⅢ類である。

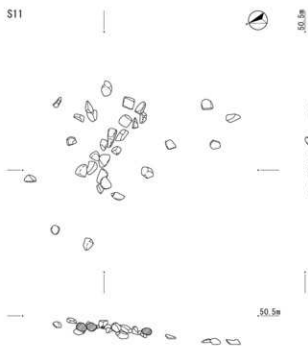
集石 12号 (第46図)

J-50区のVI層上面で検出された。径1mの範囲に、35個の礫がまとまっている。礫の集中度は低い、もともと構成されていた多くの礫が抜かれたものと思われる。石材は安山岩円礫が多いが、安山岩角礫や砂岩円礫も少数含まれる。拳大程度の礫が多いが、100g以下の小礫も見られる。顕著な被熱の痕跡がある礫はほとんど無いが、破砕礫は多い。礫総重量は約5.1kg、平均約144gである。形態分類はⅡ類である。

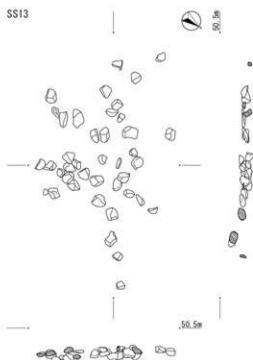


第45図 集石9・10号

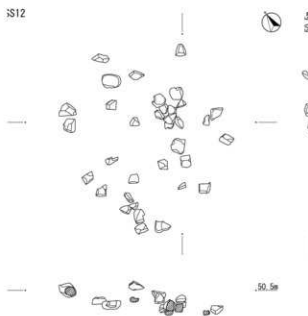
S11



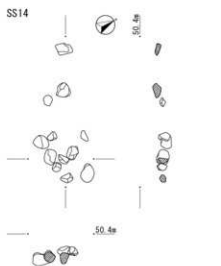
SS13



SS12



SS14



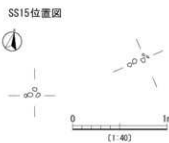
SS15-1



SS15-2

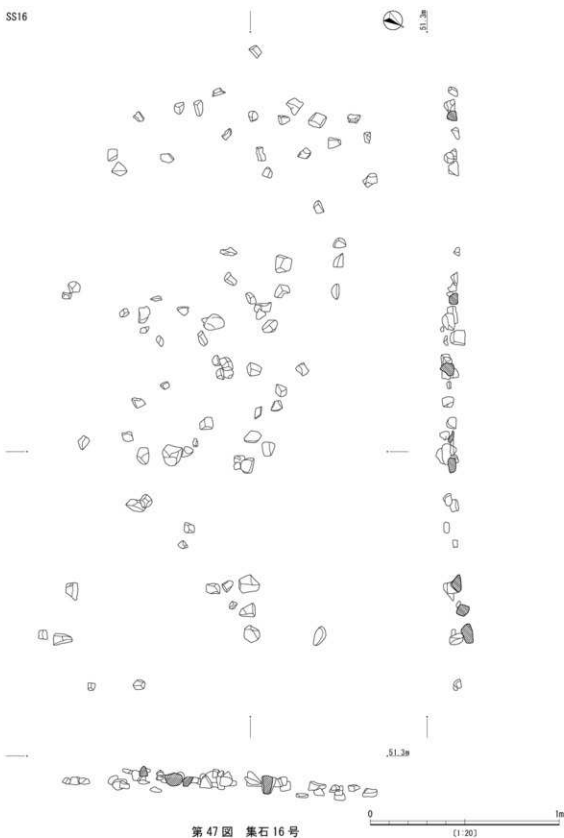


SS15位置図



第46図 集石11～15号

SS16



第47图 集石16号

集石 13 号 (第 46 図)

J-51 区の VI 層上面で検出された。130 × 90cm の範囲に、41 個の礫が集中している。必要な礫だけが抜かれたものと思われる。石材は安山岩円礫が多いが、砂岩円礫、安山岩角礫も少数含まれている。拳大のものが多く、3cm 程度の小礫も相当数含まれている。礫総重量は約 4.2kg、平均約 102g である。形態分類は II 類である。

周辺には集石 11・12・13・30 号と、礫集中度が低い集石が隣接している。その中でも、比較的礫集中度がしっかりしている集石である。

集石 14 号 (第 46 図)

J-51 区の VI 層上面で検出された。60 × 40cm の範囲に、12 個の礫が集中している。拳大の安山岩円礫・角礫で構成されている。被熱の目立つものはないが、破砕礫が少数含まれている。礫総重量は約 2.6kg、平均約 219g である。形態分類は III 類である。

集石 15 号-1 (第 46 図)

G-51 区の VI 層上面で検出された。40 × 30cm の範囲に、6 ~ 12cm 大の 4 個の礫が集中している。いずれも安山岩円礫で、顕著な被熱痕はない。

集石 15 号-2 (第 46 図)

集石 15 号-2 は、G-51 区の VI 層上面で検出された。列状に 5 個の拳大の安山岩が並んでいる。円礫と角礫があり、顕著な被熱痕はない。

集石 15 号 1・2 合わせての礫総重量は約 3.6kg、平均約 394g である。形態分類は III 類である。

周辺には散礫が多くみられ、南側に集石 16 号がある。

集石 16 号 (第 47 図)

G-51 区の VI 層上面で検出された。350 × 190cm の範囲に、81 個の小礫を主体とした礫が散在している。中央の 140 × 170cm の範囲に、約 40 個が集中している箇所が中心部と思われる。石材はほとんどが安山岩円礫であるが、角礫も少量ある。被熱の痕跡のあるものはないが、破砕礫は多い。礫総重量は約 12.9kg、平均約 160g である。形態分類は III 類である。

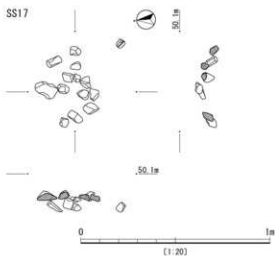
周辺には散礫が多くみられ、北側に集石 15 号がある。

集石 17 号 (第 48 図)

K-52 区の V b 層で検出された。径 50cm の範囲に、拳大の礫 14 個が集中している。石材は安山岩角礫が主体で、他に砂岩の角礫がある。被熱の目立つものは少ない。礫総重量は約 1.8kg、平均約 131g である。形態分類は III 類である。

集石 18 号 (第 49 図)

J・K-52 区の V b 層で検出された。南側へ下降傾斜する場所の、360 × 216cm の範囲に、47 個の小礫が散在している。傾斜面上部の平坦部分に、径 1m ほどの範囲で小礫 20 個が集中しており、ここが中心部かと思われる。石材はほとんどが安山岩角礫か円礫で、他に少数



第 48 図 集石 17 号

の砂岩がある。礫総重量は約 4.4kg、平均約 93g である。形態分類は III 類である。

集石 19 号 (第 50 図)

K-53 区の V b 層で検出された。210 × 160cm の範囲に、小礫 50 個が集中している。石材は砂岩と安山岩の円礫が主体で、安山岩角礫は少数である。被熱により赤色化したものが少量あるが、破砕礫はほとんどない。礫総重量は約 5.8kg、平均約 116g である。形態分類は III 類である。

集石 20 号 (第 50 図)

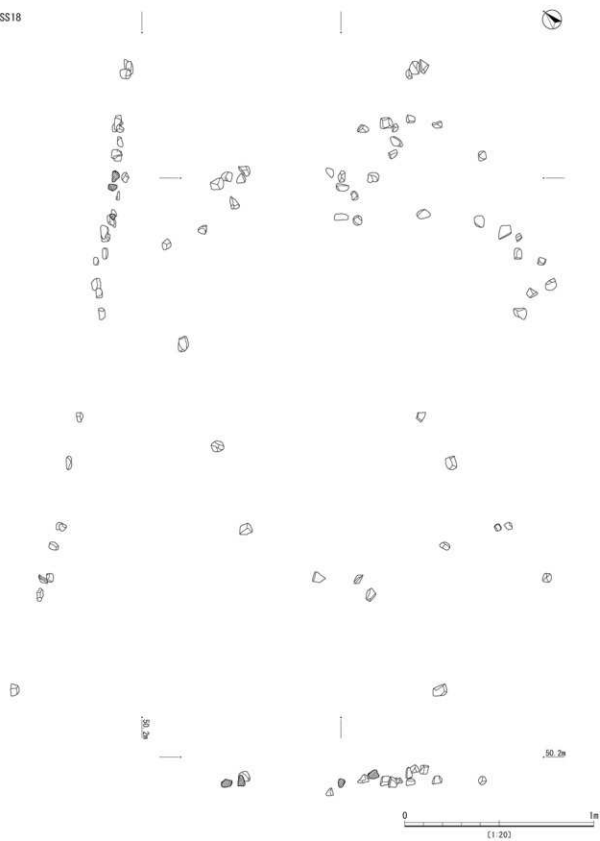
K-53 区の V b 層で検出された。60 × 50cm の範囲に、拳大の礫 13 個が集中している。集石中心部のみが残存したものと思われる。石材は、安山岩円礫が主体である。被熱をうけて赤色化・破砕した礫はない。礫総重量は約 4.7kg、平均約 363g である。形態分類は II 類である。

集石 21 号 (第 51 図)

K-53・54 区の V b 層で検出された。3m ほどの範囲に、106 個の礫が散在しているが、北側に直径 80cm ほどの範囲に、30 個ほどの礫が集中している。ここを中心として散乱したものと思われる。石材は安山岩の円礫が多いが、安山岩の角礫や砂岩の円礫も含まれ、破砕礫も多い。顕著な被熱痕を残すものは少ない。礫総重量は約 12.3kg、平均約 116g である。形態分類は III 類である。

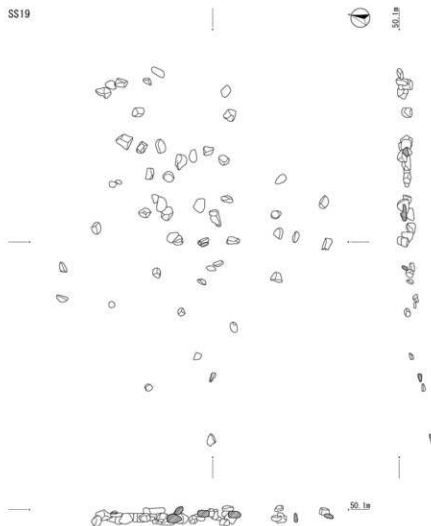
集石 22 号 (第 52 図)

K-53 区の V b 層で検出された。400 × 350cm の広い範囲に、151 個の礫で構成される集石である。北側で 100 × 120cm の範囲に、集中箇所があることから、この部分が中心部と推測される。その後礫が散乱したものと思われる。1kg を超す人頭大のものから 5cm 大の礫まで、大小さまざまなものから構成されるが、200g に満たない小礫が大半である。石材は安山岩円礫が多くを占めるが、安山岩角礫・砂岩円・角礫・球果状流紋岩もあ



第49図 集石18号

SS19



る。礫総重量は約 22.1kg、平均約 147g である。形態分類はⅢ類である。

集石 23 号 (第 53 図)

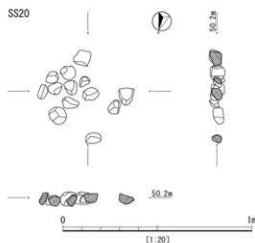
K-54 区の V b 層で検出された。210 × 110 cm ほどの範囲に、54 個の礫がみられる。石材は砂岩円礫が主で、安山岩の円・角礫、砂岩の角礫もある。破砕礫が多いが、被熱痕のないものが多数を占める。礫総重量は約 7.7kg、平均約 143g である。形態分類はⅢ類である。

集石 24 号 (第 53 図)

K・L-53・54 区の V b 層で検出された。155 × 115cm ほどの範囲に、42 個の礫がみられる。石材は 3 ~ 10cm 大の安山岩の円礫・角礫が 30 個程度集中しており、その周辺に数個の散礫がみられる。600g を超える大きなものも 2 点あるが、多くは 200g 足らずの小礫である。礫総重量は約 7.2kg、平均約 171g である。形態分類はⅢ類である。

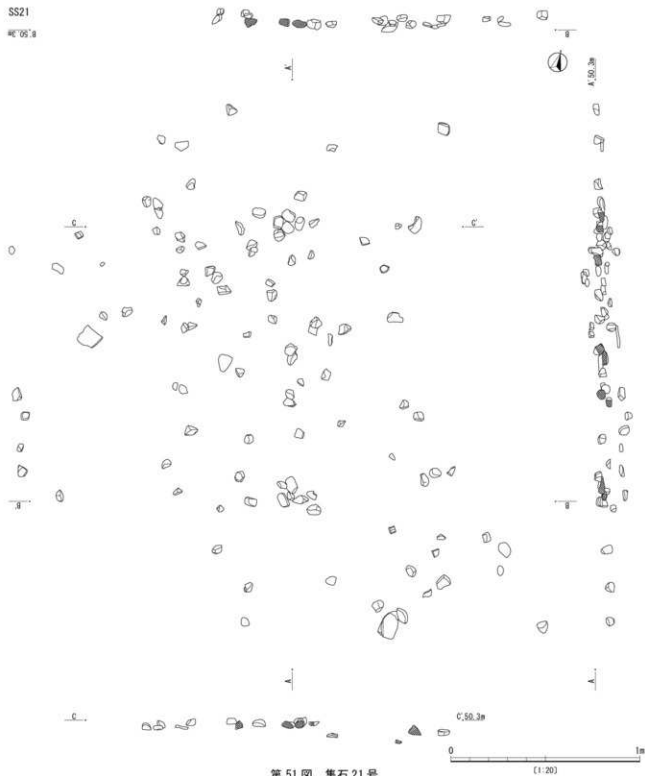
集石 25 号 (第 54 図)

K-54 区の V b 層で検出された。160 × 150cm の範囲に、66 個の礫が集中している。集石の中心部、90cm



第 50 図 集石 19・20 号

の範囲に、60 個近くの安山岩の円礫・角礫が集中している。多くが 200g 足らずの小礫である。礫総重量は約 11.8kg、平均約 179g である。形態分類はⅡ類である。



第51図 集石21号

集石26号 (第54図)

K-54区のVb層で検出された。130×100cmの範囲に、131個の礫が集中した密集型の集石で、中心部は上下に重なっている。大きさは3～10cm大と比較的大きさの異なる礫で構成されており、被熱により破碎したものが38点みられる。ほとんどは安山岩の円礫だが、安山岩の角礫・砂岩の円礫なども含まれる。また、球果

状流紋岩が2点含まれている。球果状流紋岩は本遺跡の集石石材としてはあまりみられない石材である。周辺で多くの集石が検出されているが、その中でも特に密集した集石である。礫総重量は約28.1kg、平均約215gである。形態分類はII類である。北東側に集石32号が隣接している。



第52図 集石22号

集石27号 (第55図)

J・K-54区のV b層で検出された。270×240 cmの範囲に、173個の礫で構成されている。特にその中央部の径120 cmの範囲に、120個ほどが密集している。南東側にゆるやかに下降しているが、ここには多くの礫が散在しており、それらは中心部から除去された礫と思われる。石材は安山岩の円・角礫が多い。また、凝灰岩・花崗岩が各1点ずつある。被熱痕のある礫、破碎した礫が少量見られる。礫総重量は約34.7kg、平均約200gである。形態分類はⅡ類である。

集石28号 (第56図)

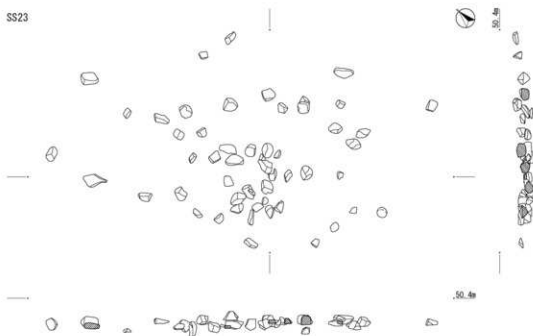
K-54区のV b層で検出された。径40 cmの範囲に、18個の安山岩円礫を主体とした礫が集中しており、周りに4個の礫が散らばっている。石材は安山岩の円・角礫が多く、他には砂岩の円・角礫が多い。被熱による赤化、破碎した礫は少ない。礫総重量は約3.1kg、平均約139gである。形態分類はⅡ類である。

周辺では前平系土器と思われる土器が出土している。

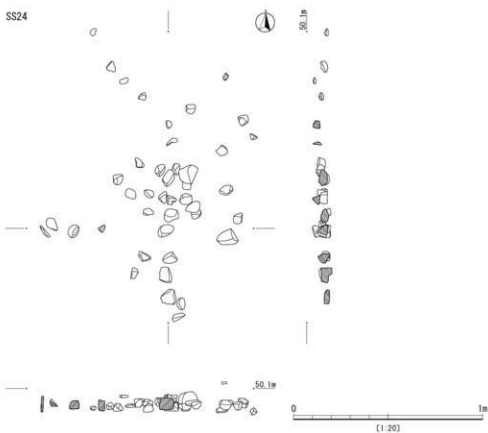
集石29号 (第56図)

H-52区のV b層で検出された。5 cm 大の小礫で構

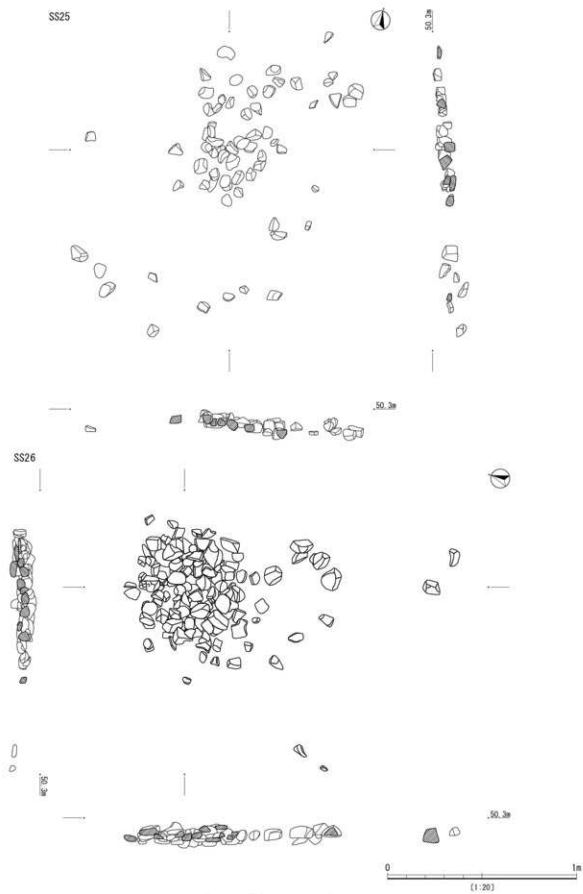
SS23



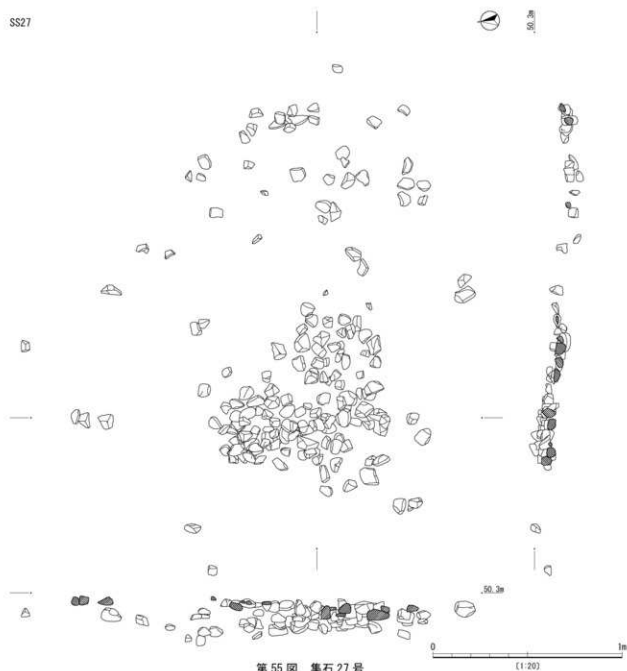
SS24



第53図 集石23・24号



第54圖 集石25・26号



第55図 集石27号

成される集石である。径1mの範囲に、32個が集中している。石材は砂岩円礫を主体とし安山岩は少ない。被熱により赤色化した礫、破砕礫が多く、使用後必要な礫が取り去り、廃棄されたものと考えられる。礫総重量は約3.3kg、平均約102gである。形態分類はⅢ類である。

集石30号 (第56図)

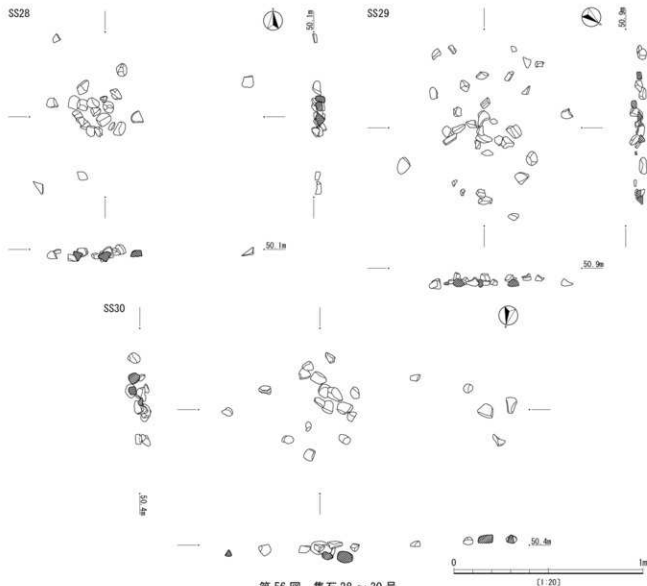
I・J-51区のVb層で検出された。60cmの範囲に、16個の小礫が集中し、その西側に5個、東側に1個の小礫が散在している。石材は5cm大の安山岩角礫が多い。多くの礫に被熱の痕跡があり、破砕したものもある。礫総重量は約2.6kg、平均約116gである。形態分類はⅢ類である。

集石31号 (第57図)

J-51区のVb層で検出された。150×100cmの範囲に、拳大の礫23個が広がる集石である。石材は安山岩角礫が多く、少数の円礫がある。被熱痕のあるものや破砕礫が多い。礫総重量は約7.8kg、平均約340gである。形態分類はⅢ類である。

集石32号 (第57図)

K-54区のVb層下面で検出された。中心部は一部がVI層上面に接している。130×112cmの範囲に、71個の礫が集中している。中心部の径80cmの範囲に、拳大の礫61個が集中しており、そのまわりに10個の散礫がある。石材は、5～10cm大の安山岩の円・角礫が主で、



第56図 集石28～30号

砂岩の円・角礫が20個弱、凝灰岩角礫2個ある。礫総重量は約12.0kg、平均約169gである。形態分類はⅡ類である。

南西側に集石26号が隣接している。

集石33号 (第58図)

E-51区のVb層で検出された。135×100cmの範囲に、49個の礫が集中している。安山岩の円礫・角礫が主で、砂岩が少数含まれる。ほとんどが200gを超える拳大の礫で、1200gある礫が西側に配置されている。礫総重量は約15.2kg、平均約311gである。形態分類はⅡ類である。

集石34号-1 (第58図)

E-51区のVb層で検出された。90×42cmの範囲に、やや散在した状態の集石である。5～10cm大のやや大きな13個の安山岩角礫・砂岩で構成されている。

集石34号-2 (第58図)

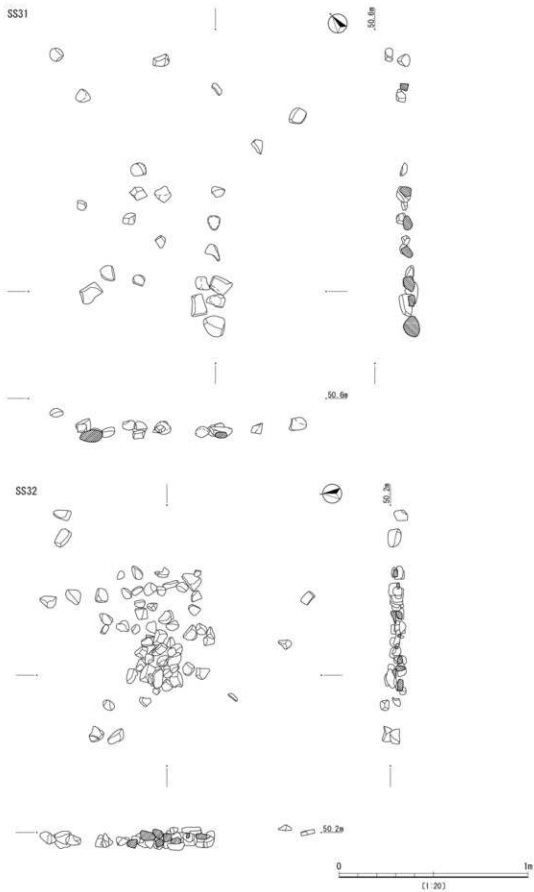
E-51区のVb層で検出された。40×30cmの範囲内に5～10cm大の大きめの安山岩角礫・砂岩13個で構成されている集石である。

集石34号-1・2については、隣接し礫構成もほぼ同一であるため、元々単一の集石を構成していたものと考えられる。双方合わせての礫総重量は約4.0kg、平均約152gである。形態分類はⅢ類である。

集石35号 (第59図)

E-51区のVb層で検出された。230×180cmの範囲に、36個の礫がみられる。石材は安山岩角礫が主で、砂岩が少数含まれる。中央部70×50cmの範囲に、礫がやや集中し、北側と南側に散在している。被熱で赤色化しているものは少ない。礫総重量は約6.6kg、平均約184gである。形態分類はⅢ類である。

構成礫中には、磨石と思われる石器1点(47)が含ま



第57圖 集石31・32号



第58図 集石33・34号

れ、殿石を再度使用したものと考えられる。

集石36号 (第59図)

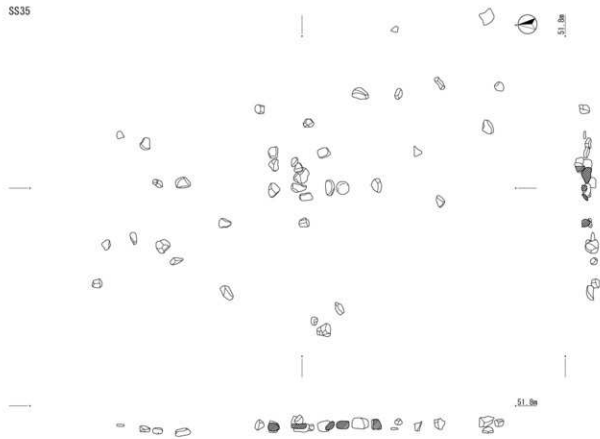
E-48区のV b層で検出された。210×170cmの範囲に、49個の礫がある。中央部と思われる径80cmの範囲に、28個の礫が集中しており、その周辺に21個の礫が散礫状に広がっている。拳大の礫が多い。石材は砂岩の円礫が多いが、安山岩円礫、凝灰岩角礫も少量含まれる。礫総重量は約8.0kg、平均約162gである。形態分類はⅢ類である。

集石37号 (第60図)

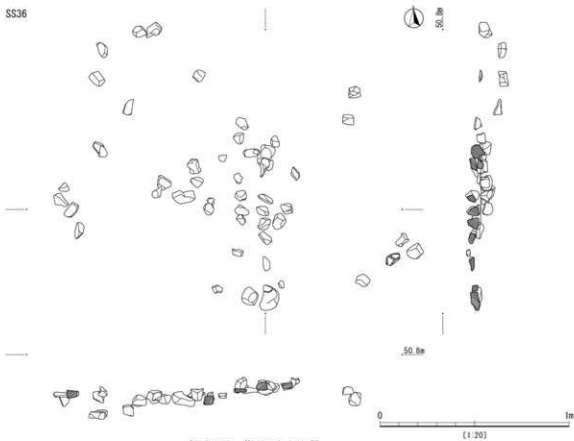
F-50区のV b層で検出された。160×120cmの範囲に、81個の礫が集中している。ほとんどが拳大以上の礫で構成され、1kgを超えるものも6点ある。石材は安山岩の円・角礫が主で、砂岩は4点のみである。被熱により赤色化、破碎した礫はあまり見られない。礫総重量は約36.3kg、平均約448gである。形態分類はⅡ類である。

本遺跡の集石の中では、礫の大きさ、集中度ともに異なる集石である。

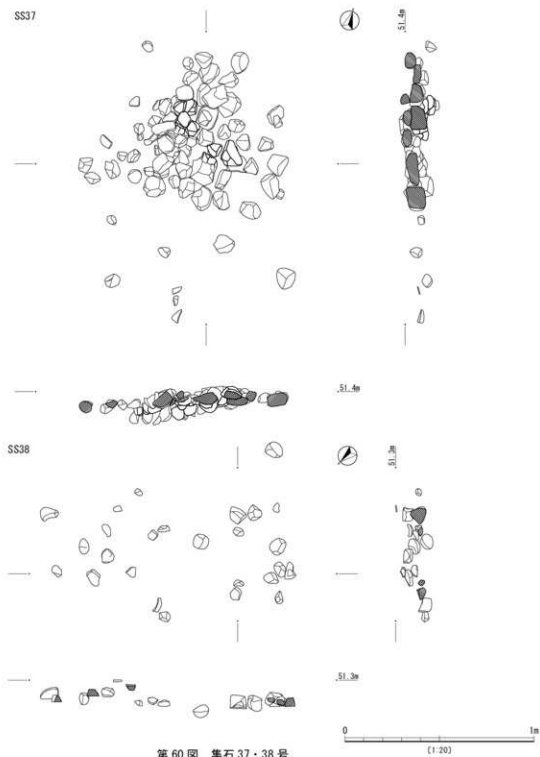
SS35



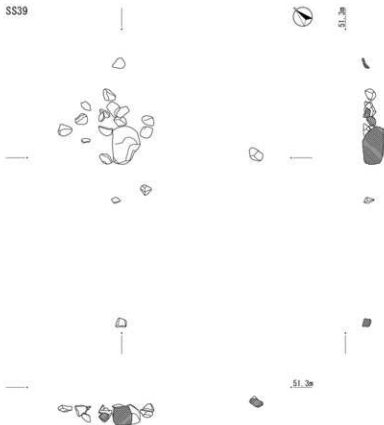
SS36



第59図 集石35・36号



第60図 集石37・38号



集石 38号 (第60図)

F-49区のV b層で検出された。143×75cmの範囲に、24個の礫からなる集石である。南西側60×70cmの範囲に、11個の礫が比較的集中し、その北東側に散礫がみられる。400g以上の比較的大きなものもあるが、300g以下のものが多い。石材は安山岩角礫が主である。礫総重量は約5.7kg、平均約237gである。形態分類はII類である。

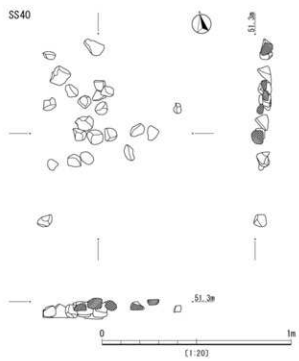
集石 39号 (第61図)

F-49区のV b層で検出された。南端に重さ5.2kgの大きな礫を置き、その周囲60×40cmの範囲に、5～10cm大の安山岩の角礫18個が集中している。礫総重量は約8.3kg、平均約460gである。形態分類はII類である。

集石 40号 (第61図)

E-50区のV b層で検出された。110×90cmの範囲に、22個の礫が集中している。安山岩、砂岩が中心で、拳大サイズの礫で構成されており、他の集石とは構成礫のサイズが一回り大きい。被熱のため赤色化したものや破碎したものが多い、500gを超す大型のものも3個含まれている。礫総重量は約6.4kg、平均約290gである。形態分類はII類である。

構成礫中には、磨石と思われる石器1点(48)が含まれ、磨石を再度使用したものと考える。



第61図 集石 39・40号

集石 41号-1 (第62図)

D-51区のV b層で検出された。135×115cmの範囲に、礫41個からなる集石である。石材は安山岩角礫が主である。

構成礫中には、二次加工剥片が1点(52)含まれる。



第 62 図 集石 41・42 号

集石 41 号-2 (第 62 図)

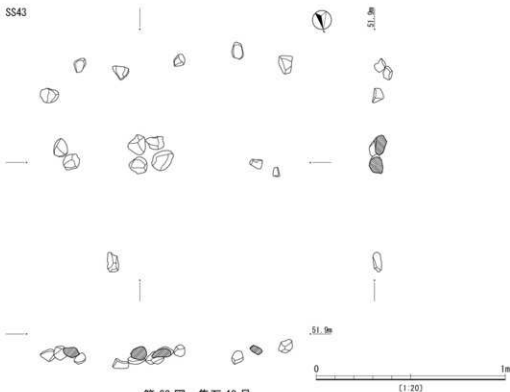
D-51 区の V b 層で検出された。140 × 90 cm の範囲に、礫 21 個からなる集石である。石材は安山岩角礫を主とし、多くが小礫である。

集石 41 号-1・2 については、隣接し礫構成もほぼ同一であるため、本来単一の集石を構成していたものと考えられる。双方合わせた礫総重量は約 10.9kg、平

均約 176g である。形態分類は III 類である。

集石 42 号 (第 62 図)

D-51 区の V b 層で検出された。230 × 90 cm の範囲に、33 個からなる集石である。北西側の径 70 cm の範囲に、20 個程度の礫集中箇所があり、ここから東側に散在している。石材は安山岩が主で、3 ~ 6 cm 大の小さい礫で構成されている。被熱による赤化・破砕したものは少



第 63 図 集石 43 号

ない。礫総重量は約 4.9kg、平均約 149g である。形態分類はⅢ類である。

構成礫中には、磨石と思われる石器 2 点 (49・50) が含まれ、磨石を再度使用したものと考える。

集石 43 号 (第 63 図)

D・E-52 区の V b 層で検出された。140 × 130 cm の範囲に、礫 15 個からなる集石である。拳大の比較的大きな 4 個の礫を中心として構成されていた集石と考えられ、この近辺に 10 個ほどの礫が散在している。石材は安山岩角礫で、多孔質である。礫総重量は約 5.7kg、平均約 383g である。形態分類はⅢ類である。

集石 44 号 (第 64 図)

D-52 区の V b 層で検出された。380 × 290 cm の範囲に、208 個の拳大の礫を主とした集石である。そのうち東側の径 150 cm の範囲に、130 個ほどの礫が集中している。中心部では 2～3 段に礫が重なりあっている。安山岩の円礫が中心であるが、安山岩の角礫や砂岩の円礫が少量、他に球果岩円礫と軽石が各 1 個ずつ含まれる。東側斜面付近の礫がないため、西側の礫が元々の構成礫と考えられ、東側の集石はかき出されたものと推測される。本遺跡の集石の中では、集中度が高く規模の大きい集石である。礫総重量は約 44.6kg、平均約 214g である。形態分類はⅡ類である。

集石 45 号-1 (第 65 図)

D-52 区の V b 層で検出された。210 × 115 cm の範囲に、礫 17 個からなる集石である。40 × 60 cm の範囲に、

まとまった 8 個の礫を中心として、その周辺に 9 個の礫が散在している。石材はほとんどが 300g 以上ある大きな安山岩角礫を用いており、中には 800～900g ある大きな礫が 4 個ある。

集石 45 号-2 (第 65 図)

D-52 区の V b 層で検出された。190 × 140 cm の範囲に、礫 15 個からなる集石である。径 50 cm の範囲に、まとまった 9 個の礫を中心として、そのまわりに数個の礫が散在している。石材は 200g 以下の小さな安山岩角礫だけで構成されている。

集石 45 号-1・2 については、隣接し石材もほぼ同一であるため、元々単一の集石を構成していたものと考えられる。双方合わせての礫総重量は約 12.9kg、平均約 403g である。形態分類はⅢ類である。

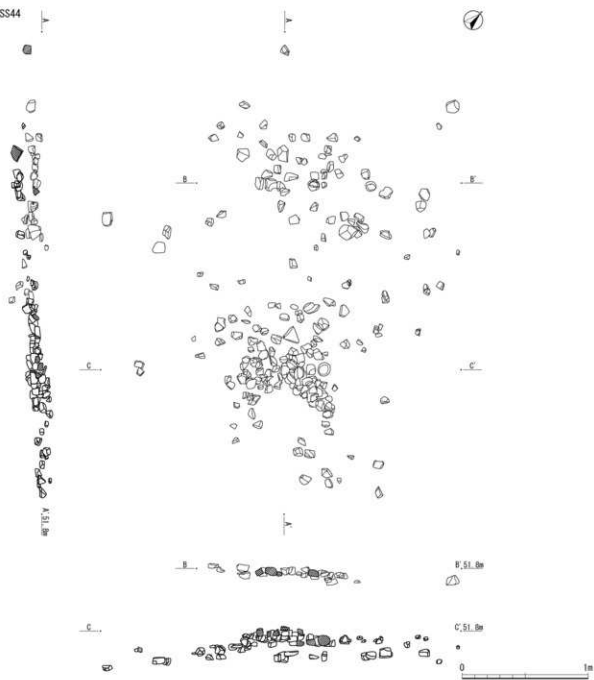
集石 46 号 (第 66 図)

D-51 区の V b 層で検出された。110 × 60 cm の範囲に、拳大の礫や小石 12 個からなる集石である。石材は安山岩と砂岩の円礫が主だが、砂岩礫のほとんどが小礫である。顕著な被熱痕のあるものはないが、破砕礫は多い。礫総重量は約 1.3kg、平均約 108g である。形態分類はⅢ類である。

集石 47 号 (第 66 図)

D-51 区の V b 層で検出された。130 × 75 cm の範囲に、拳大の礫 12 個からなる集石である。石材は安山岩の円・角礫が多く、他に砂岩の小円礫が 2 点ある。被熱の目立つもの、破砕礫はほとんどない。礫総重量は約

SS44



第64図 集石44号

SS45-2



SS45-1



SS45-1

B.51.0m

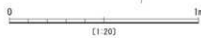


B.51.0m

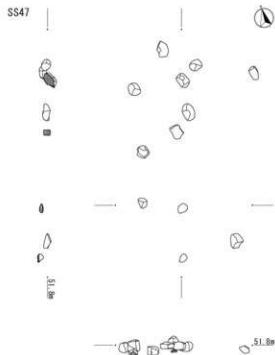


A.51.0m

A.51.0m



第65図 集石45号



2.2kg, 平均約 183g である。形態分類はⅢ類である。

すぐ南側で手向山式土器が出土している。

集石 48 号 (第 66 図)

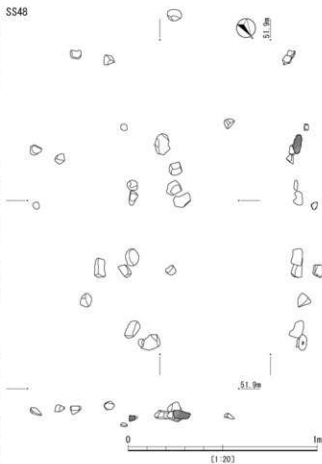
D-51 区の V b 層で検出された。180 × 115cm の範囲に、22 個の拳大あるいは小さな礫からなる集石で、5 cm ~ 8 cm 大の礫から構成されている。石材はほとんどが安山岩の円礫で、他に安山岩の角礫や砂岩の円礫が少数ある。礫総重量は約 4.3kg, 平均約 193g である。形態分類はⅢ類である。

集石 49 号 (第 67 図)

C・D-51・52 区の VI 層上面で検出された。340 × 260 cm の範囲に、礫 93 個からなる集石である。東側の径 110cm の範囲に、40 個近くの礫が集中している。ほとんどが安山岩円礫で、他に砂岩の円礫・安山岩の角礫が少数あり、破碎した花崗岩が 1 個ある。15 cm 大の 850g ある大きな礫が 3 個ある。礫総重量は約 22.1kg, 平均約 238g である。本遺跡の他の集石と比較して、集中度が高く、比較的規模の大きい集石である。形態分類はⅡ類である。

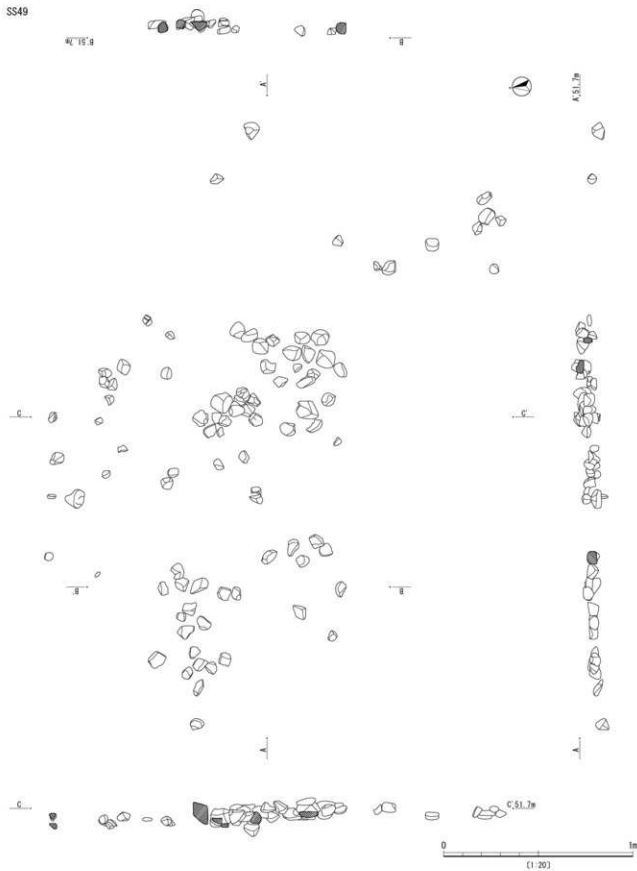
集石 50 号 (第 68 図)

E-51 区の VI 層上面で検出された。220 × 180 cm の範囲に、拳大の礫 51 個が集中しているが、列状に広がる部分もある。ほぼ平坦面にあり、礫が 2 段に重なりあっている。110 × 80cm の範囲に、30 個ほどの集中があり、中心部と考えられる。安山岩角礫が多く、他に少数の安山岩と砂岩の円礫が含まれる。小礫も多いが、中央には 1 kg を越す大きな礫が配置されている。礫総重量は約 10.8kg, 平均約 212g である。形態分類はⅡ類である。



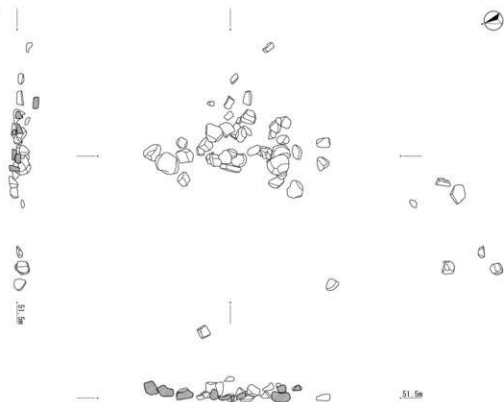
第 66 図 集石 46 ~ 48 号

SS49

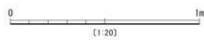
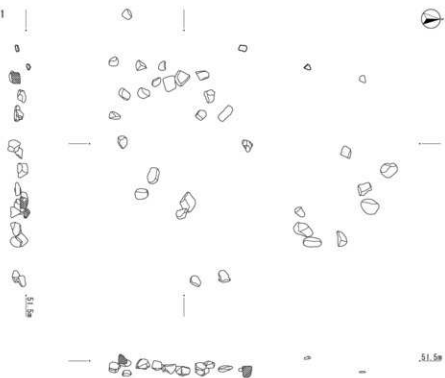


第67图 集石49号

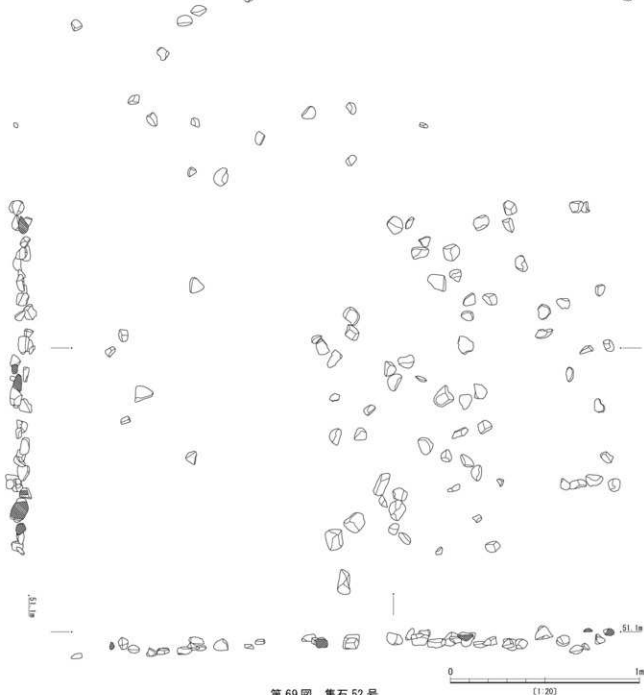
SS50



SS51



第 68 図 集石 50・51 号



第69図 集石 52号

集石 51号 (第68図)

D-51区のV b層で検出された。170×150 cmほどの範囲に、拳大の礫 31個からなる集石である。石材はほとんどが安山岩の円礫で、他に少数の砂岩の円礫・凝灰岩の円礫がある。被熱痕のある礫や破砕した礫は少ない。礫総重量は約 5.7kg、平均約 185gである。形態分類はⅢ類である。

集石 52号 (第69図)

E・F-49区のV b層で検出された。330×290 cm

の範囲に、拳大の礫 86個からなる集石である。南側に大きな礫が集中している。石材は安山岩の円礫が多いが、安山岩角礫もあり、他に砂岩の円礫がある。被熱により赤色化、破砕した礫はあまり見られない。礫総重量は約 20.5kg、平均約 238gである。形態分類はⅢ類である。

集石 53号 (第70図)

D-51区のV b層で検出された。90×60 cmの範囲に、拳大の礫 9個からなる集石である。石材は安山岩円礫が主で、他に安山岩角礫、砂岩円礫がみられる。被熱によ



第70図 集石53～55号

り赤色化、破砕した礫はない。礫総重量は約1.7kg、平均約191gである。形態分類はⅢ類である。

周辺には多くの礫が散在している。

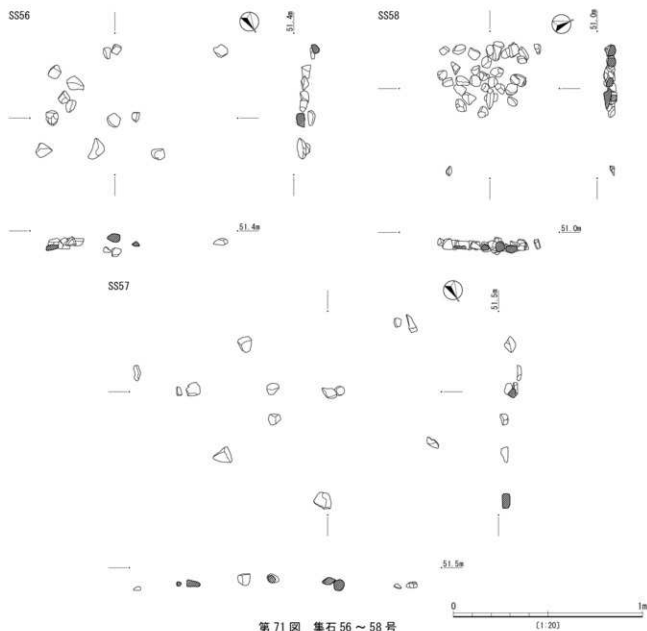
集石54号(第70図)

F-48区のVb層で検出された。70×40cmの範囲に、拳大より少し小さな礫11個からなる集石である。石材は安山岩の円礫と角礫からなり、砂岩円礫も少量ある。被熱した礫、破砕礫はほとんどない。礫総重量は約1.6kg、平均約146gである。形態分類はⅢ類である。

集石55号(第70図)

F-49区のVb層で検出された。160×120cmの範囲に、拳大の礫30個からなる集石である。南西側の一部が、弥生時代の竪穴建物跡による削平をうけており、本来はもう少し礫があったものと思われる。石材は安山岩や砂岩の円礫が多くを占める。礫総重量は約4.0kg、平均約138gである。形態分類はⅢ類である。

周辺からは縄文時代早期後葉の土器である苦浜式土器、塞ノ神式土器が出土している。



第71図 集石56～58号

集石56号(第71図)

F-51区のVI層上面で検出された。110×80cmの範囲に、拳大の礫13個からなる集石である。東側の径70cmほどの範囲に12個が集中している。石材は安山岩と砂岩の円礫で構成されている。被熱により赤色化、破砕した礫が少数ある。礫総重量は約2.3kg、平均約179gである。形態分類はⅢ類である。

すぐ北側には集石57号があり、同様の規模・形態の集石である。

集石57号(第71図)

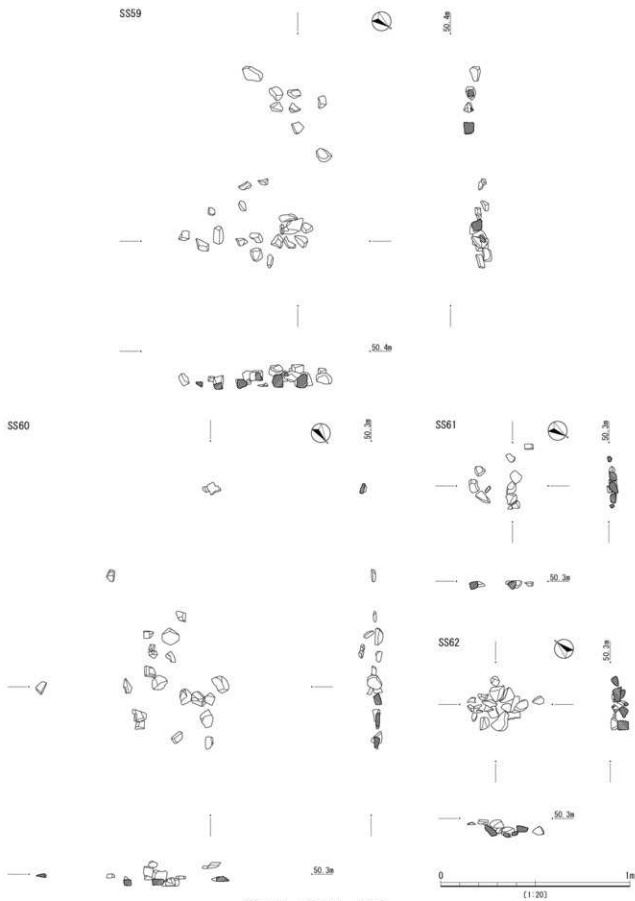
F-51区のVI層上面で検出された。165×110cmの範囲に、拳大の礫13個からなる集石である。石材は安

山岩の円・角礫が主で、他に砂岩の小円礫などが含まれている。被熱により赤色化、破砕した礫は少ない。礫総重量は約2.3kg、平均約174gである。形態分類はⅢ類である。

すぐ南側には集石56号があり、同様の規模・形態の集石である。

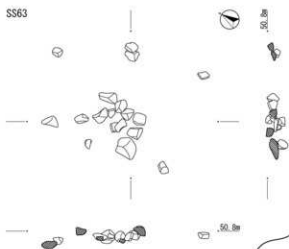
集石58号(第71図)

E-49区のVb層で検出された。80×73cmの範囲に、34個の小礫が集中している。石材は安山岩と砂岩の円礫から構成され、被熱により赤色化したものが少数ある。礫総重量は約4.3kg、平均約128gである。形態分類はⅡ類である。

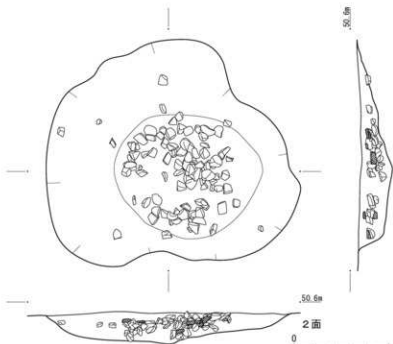
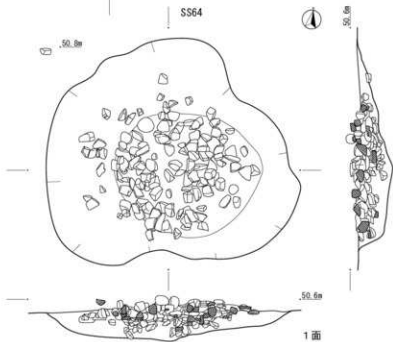


第72図 集石59～62号

SS63

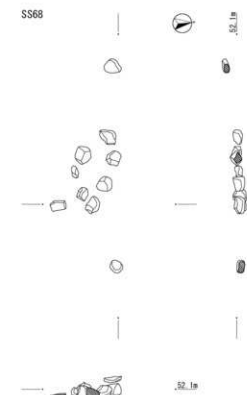
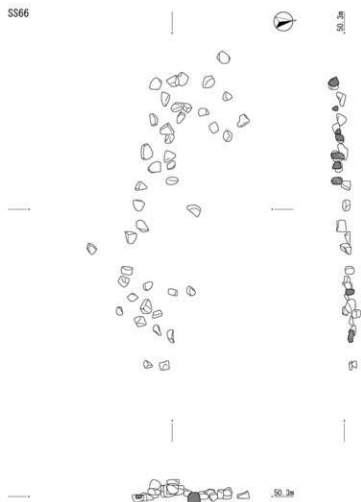
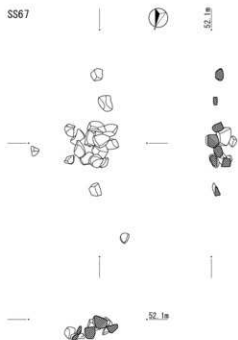
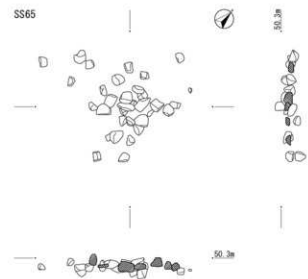


SS64

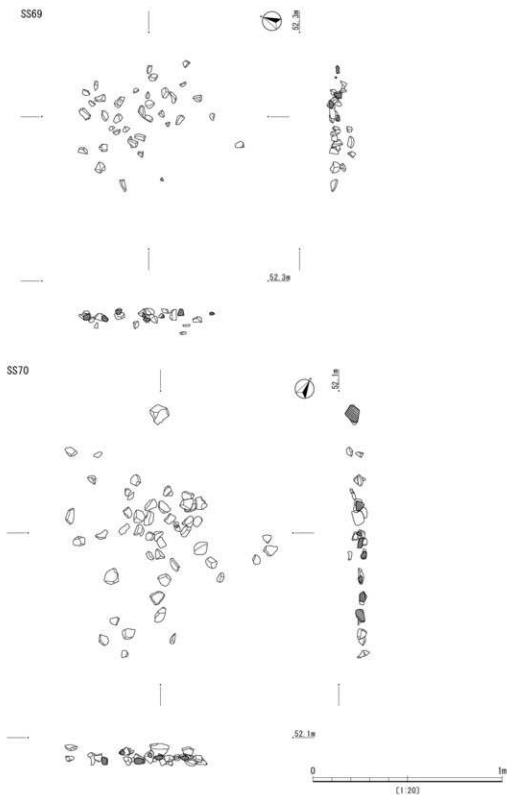


第73図 集石63・64号

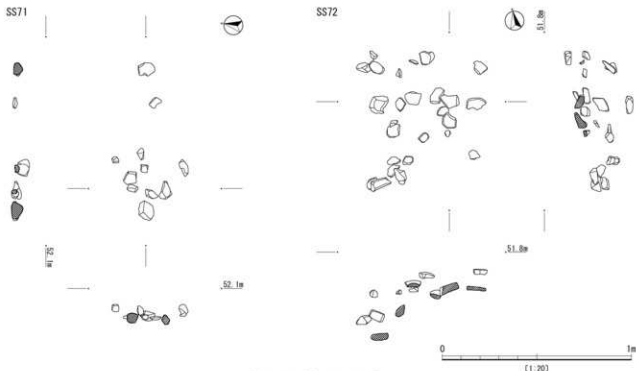
0 1m (1:20)



第74図 集石65～68号



第 75 図 集石 69・70 号



第76図 集石71・72号

集石59号(第72図)

E-45区のVI層上面で検出された。115×100cmの範囲に、礫26個からなる集石である。50cmの範囲に、礫10個が集中しており、この部分に中心部があったと思われる。3～5cm大の安山岩の角礫が主である。若干、被熱し赤化した礫がみられる。礫総重量は約3.7kg、平均約141gである。形態分類はⅢ類である。

集石60号(第72図)

E-46区のVI層上面で検出された。150×110cmの範囲に、礫21個からなる集石である。石材は安山岩の被熱破砕礫が多い。礫総重量は約2.5kg、平均約120gである。形態分類はⅢ類である。

集石61号(第72図)

F-46区のVb層で検出された。径40cmの範囲に、10個の小礫からなる集石である。石材はすべて安山岩で、円礫と角礫が半々である。被熱痕のないものが多い。礫総重量は約1.0kg、平均約101gである。形態分類はⅢ類である。

集石62号(第72図)

F-46区のVb層で検出された。40×30cmの狭い範囲に、礫20個が集中している。拳大のものもあるが、細石も含まれている。石材は、安山岩と砂岩の円礫と角礫からなるが、ほとんどの砂岩は被熱痕が顕著で破砕している。安山岩の中にも被熱痕のあるものが多い。礫総重量は約2.8kg、平均約138gである。形態分類はⅡ類である。

集石63号(第73図)

F-47区のVb層で検出された。90×70cmの範囲に、拳大の礫18個からなる集石である。中央部の径45cmの範囲に、12個の礫が集中しており、ここに中心部があったと思われる。石材は砂岩円礫が1個のみで、他は安山岩で、円礫と角礫が半々である。被熱の目立つものが多い。礫総重量は約3.3kg、平均約183gである。形態分類はⅢ類である。

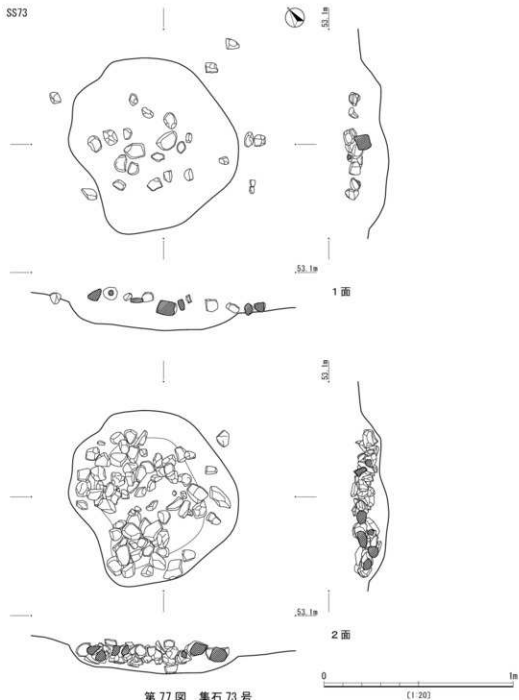
集石64号(第73図)

F-47区のVb層で検出された。平面形は130×112cm、深さ16cmの楕円形の掘り込みがあり、礫231個が集中している。上層は完形の礫が多いが、下層は破砕し、被熱痕が見られるものもある。下層になるほど、礫が小さくなる傾向がある。安山岩の円・角礫が主であるが、砂岩円礫も多い。頁岩の角礫が2個含まれる。

本遺跡の集石としては礫数が最大である。礫総重量は23.3kg、平均約101gである。形態分類はⅠ類である。

集石65号(第74図)

F-42区のVa層で検出された。80×65cmの範囲に、拳大の礫32個からなる集石である。安山岩の円・角礫が中心で、他に砂岩円礫が2個ある。被熱痕は見られない。IVb層(アカホヤ火山灰)直下で検出し、集石内にアカホヤバミスがみられた。縄文時代早期末葉の可能性がある。礫総重量は約4.3kg、平均約135gである。形態分類はⅡ類である。



第77図 集石73号

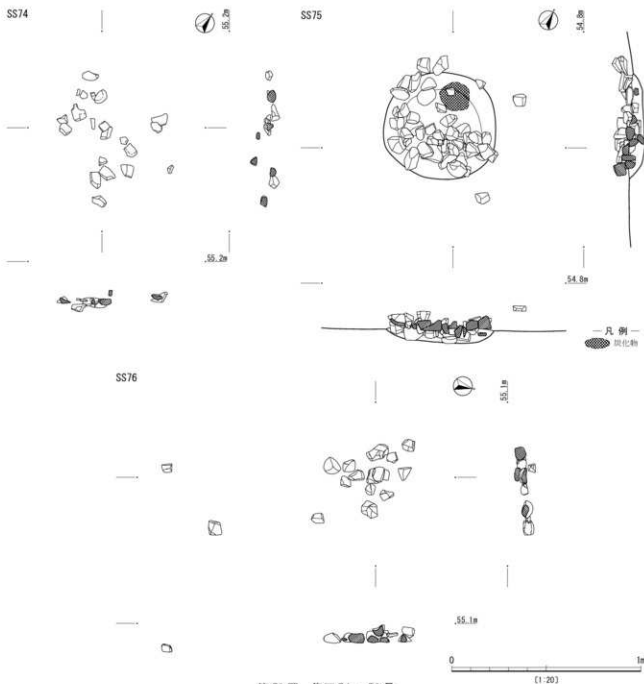
集石66号(第74図)

F-42区のVa層で検出された。180×100cmの範囲に、拳大の礫41個からなる集石である。西側90×70cmの範囲に、25個の礫が集中していることから、ここが中心部と思われる。石材は安山岩円礫が中心で、他に安山岩角礫、砂岩円礫がある。被熱痕のあるもの、破砕したものは少ない。礫総重量は約4.9kg、平均約120gである。形態分類はⅢ類である。

集石67号(第74図)

F-38区のVb層で検出された。100×55cmの範囲に、礫19点が集中している。安山岩の角礫が中心で、大きさも一定している。被熱痕が見られない礫が多い。礫総重量は約4.5kg、平均約239gである。形態分類はⅡ類である。

周辺から礫等の出土はあまりなく、本集石と集石68号が他の集石とは孤立して検出されている。周辺からは石版式土器と思われる土器片が出土している。



第78図 集石74～76号

集石68号(第74図)

H-37・38区のVI層上面で検出された。120×50cmの範囲に、礫10個からなる集石である。石材は10cm大の安山岩角礫が中心である。礫総重量は約2.6kg、平均約260gである。形態分類はⅢ類である。

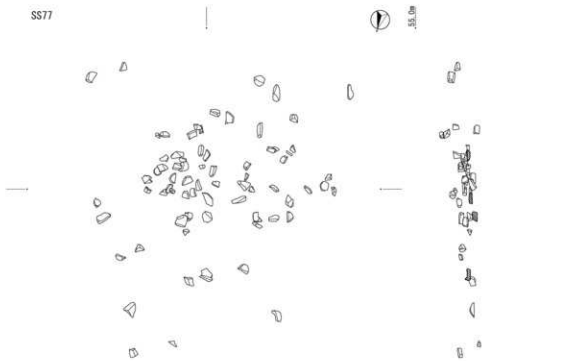
周辺からは礫等の出土もあまりみられず、本集石と集石60号が他の集石とは孤立して検出されている。周辺からは石板式土器と思われる土器片が出土している。

構成礫中には、ホルンフェルスの剥片が1点(53)含まれている。

集石69号(第75図)

H-37区のVI層上面で検出された。85×70cmの範囲に、3～7cm大の礫38個からなる集石である。石材は安山岩角礫がほとんどで、頁岩が少数含まれている。被熱の痕跡が認められる礫が多い。礫総重量は約2.8kg、平均70gである。形態分類はⅢ類である。

SS77



SS78



第 79 图 集石 77・78 号

集石 70号 (第75図)

I-37区のVI層上面で検出された。135×113cmの範囲に、5～10cm程度の礫48個からなる集石である。礫の集中度は低い。使用后、必要な礫だけを取り出し廃棄された礫群と考える。5cm大の角礫が多く、石材は砂岩が主体で他には安山岩が見られる。全体の半数程度が破砕礫で、被熱により赤化しているものが半数程度見られる。礫総重量は約7.2kg、平均約150gである。形態分類はⅢ類である。

集石71号が南東2mの位置にあり、石材もほぼ同一であるため、元々単一の集石を構成していたものと考えられる。

集石 71号 (第76図)

I-37区のVI層上面で検出された。83×40cmの範囲に、3～5cm程度の礫11個からなる集石である。石材は砂岩が主体で他には安山岩もある。破砕礫は半数ほどで被熱痕はあまり目立たない。礫総重量は約1.9kg、平均約174gである。形態分類はⅢ類である。

集石70号が南東2mの位置にあり、石材もほぼ同一であるため、元々単一の集石を構成していたものと考えられる。

集石 72号 (第76図)

J-38区のVI層上面から検出された。89×80cmのSS79

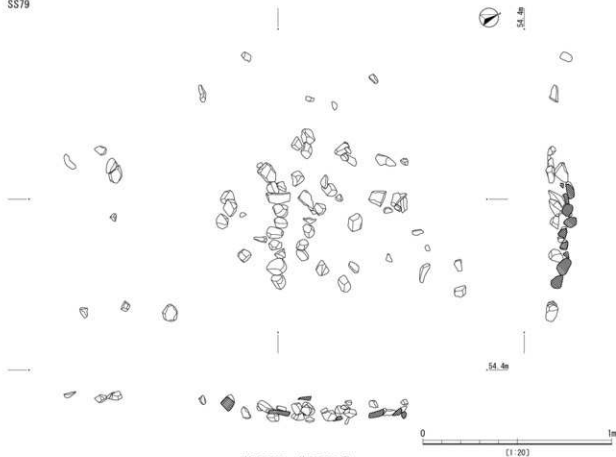
範囲に、5～12cm程度の礫26個からなる集石である。石材は砂岩が多く、ほかに安山岩の角礫がみられる。礫の半数程度に被熱の痕跡が見られる。高低差のある状態で検出されたが、斜面の落ち際のため、礫が散乱した可能性がある。石材は砂岩・安山岩から構成される。礫総重量は約5.0kg、平均約192gである。形態分類はⅢ類である。

集石 73号 (第77図)

K-33区のVI層で検出された。平面形は93×83cm、深さ24cmの偏楕円形の掘り込みがあり、礫は112個が集中している。石材はほとんどが安山岩角礫で、他には花崗岩、泥岩の角礫が少数含まれている。被熱の痕跡があるもの、破損しているものが多い。300gを超す大型礫があり、中には1kg超のものも2点ある。礫総重量は約34.2kg、平均は約305gである。形態分類はⅠ類である。

集石 74号 (第78図)

I-26区のV層で検出された。80×80cmの範囲に、5～10cm程度の礫21個からなる集石である。使用后に必要な礫だけを取り出し、廃棄された礫群と考える。凝灰岩角礫の被熱破砕礫が多い。礫総重量は約1.8kg、平均約85gである。形態分類はⅢ類である。



第80図 集石 79号

集石 75号 (第 78 図)

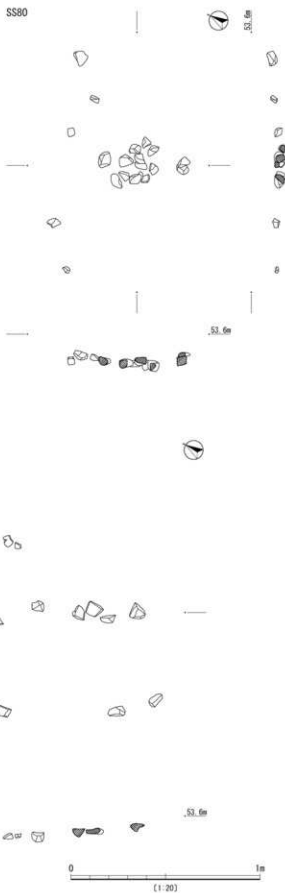
G・H-27区のV層で検出された。70×60cmのほぼ円形の範囲に、5～15cm程度の礫49個が検出された。検出面からの深さ8cmの浅い掘り込みがある。礫集中部の北西側に炭化物の集中が認められた。この炭化物を年代測定した結果、8120±25年BPの年代値が得られた。石材はすべて安山岩で、角礫が多くほとんどの礫に被熱の痕跡がある。礫総重量は約14.0kg、平均約287gである。形態分類はI類である。

集石 76号 (第 78 図)

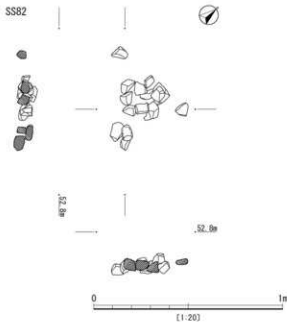
H・I-26・27区のVI層で検出された。微高地最頂部の南東側斜面に位置し、131×42cmの範囲に、5～10cmの礫17個からなる集石である。径50cmの範囲に、15個の礫が集中し、ほぼ平坦に配置されている。石材はすべて安山岩で川原石が多く、破砕しているものが多い。やや赤色化した礫も見られるが、多くは被熱痕が目立たない。礫総重量は約3.7kg、平均約218gである。形態分類はIII類である。

集石 77号 (第 79 図)

H-25区のVI層で検出された。185×162cmの範囲に、5cm大の礫72個からなる集石である。100×80cmの範囲に、60個ほどの礫が集中しその周りに数個の礫が散



第 81 図 集石 80・81号



第82図 集石82号

在している。使用後必要な礫だけを取り出し、廃棄された礫群と考える。石材は凝灰岩、安山岩の角礫が多く、中心部に被熱の痕跡がある礫が集中している。小礫が多い。礫総重量は約2.6kg、平均約36gである。形態分類はⅢ類である。

集石78号(第79図)

F-25区のⅥ層上面で検出された。142×88cmの範囲に、5～10cm程度の礫78個からなる集石である。石材は安山岩角礫がほとんどで、他には砂岩や凝灰岩、ホルンフェルスの角礫がある。被熱破砕礫が非常に多い。使用後必要な礫だけを取り出し、廃棄された礫群と考える。礫総重量は約4.2kg、平均約54gである。形態分類はⅢ類である。

周辺からは下剝率式土器と思われる貝殻刺突土器が検出されている。

集石79号(第80図)

K-23区のⅥ層上面から検出された。224×158cmの範囲に、5～10cm程度の礫67個からなる集石である。中心部の東西方向に、列状の礫配置が見られ、ある程度密集している125×100cmの範囲が集石の中心部と考えられる。石材は安山岩角礫が主で、凝灰岩も見られる。ほとんどの礫に被熱痕がある。礫総重量は約11.3kg、平均約169gである。形態分類はⅡ類である。

構成礫中には、磨石と思われる石器1点(51)が含まれ、磨石を再度使用したものと考える。

集石80号(第81図)

K-20区のⅥ層上面で検出された。118×73cmの範囲に、20個の礫からなる集石である。そのうち50×30cmの範囲に、5～10cm大の礫15個がある程度集中している。石材はほとんどが安山岩角礫で、破損したも

のは少なく、被熱の痕跡は目立たない。礫総重量は約2.5kg、平均約123gである。形態分類はⅢ類である。

ほぼ同規格の集石81号が北西約2mの位置にある。周辺に塞ノ神B式土器に比定される土器片が見られることから、縄文時代早期後葉の集石と思われる。

集石81号(第81図)

J-19区のⅤa層で検出された。検出180×130cmの範囲に、34個からなる集石である。50×70cmの範囲に、18個の礫が集中し、その北側に4個、南側に12個の礫が散在している。ほとんどが安山岩角礫で、破損したものは少ない。いずれも被熱しているが、顕著に赤化しているものは少ない。礫総重量は約4.8kg、平均約140gである。形態分類はⅢ類である。

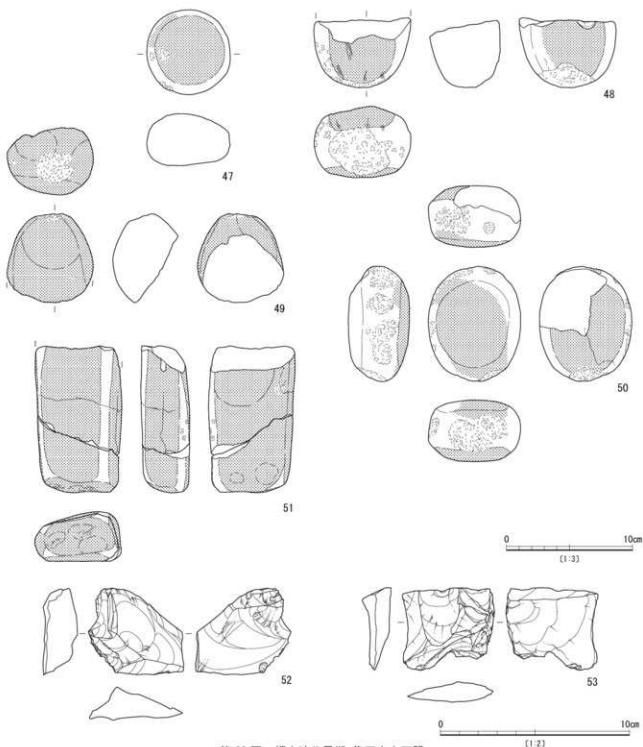
ほぼ同規格の集石80号が南東約2mの位置にある。周辺からは塞ノ神B式土器に比定される土器片が出土している。

集石82号(第82図)

I-20区のⅥ層上面で検出された。51×39cmの範囲に、10cm程度の礫15個からなる集石である。石材はすべて安山岩角礫で被熱の痕跡は目立たない。礫総重量は約3.9kg、平均約257gである。形態分類はⅢ類である。この周辺にはほかに集石はなく、散礫もほとんどなかった。

3 集石出土石器(第83図47～53)

一部の集石内にて若干の石器類がみられている。包含層中における分布、あるいは集石の構成礫として利用されたものであるが、ある程度の帰属を考慮して7点を抽出した。内訳は、集石35号に磨石類1点(47)、集石40号に磨石類1点(48)、集石41号に二次加工剥片1点(52)、集石42号に磨石類2点(49・50)、集石68号に剥片1点(53)、集石79号に磨石類1点(51)である。47～51の5点は磨石類である。47は小型の円盤に磨り面をもつ。48～50は欠損品であり、磨り面の他、敲打痕を端部ないし側面部に併せ持つ。これらの石材は47・49・50が安山岩、48が砂岩であり、いずれも幾らかの被熱痕がみられる。51は円形の形態とは異なり、角の落ちた角柱状の礫を用いた磨石である。敲打石としての敲打痕はみられなが、破損して三分し、そのうち2点が集石79号内で接合している。被熱赤化は非常に弱く、破片それぞれでの被熱度合にも差異がある。石材は砂岩である。52は削器ともいえる珪質頁岩製の二次加工剥片である。厚みのある不定形剥片を用いて、その打面を除く整形剥離を腹面側に施しており、刃部となる鋭い左側縁から下縁にかけて微小剥離痕が生じている。特に被熱痕はみられない。53はホルンフェルス製の不定形剥片である。薄く鋭い側縁をもち、同一打面からの剥離痕による背面構成にある。特に被熱痕はみられない。



第 83 図 縄文時代早期 集石出土石器

第 4 表 縄文時代早期埋設土器観察表

採出番号	掲載番号	遺構名	層	器番号	部位	分類番号	調査		文様	色調		粘土							備考			
							外面	内面		外面	内面	白	赤	黒	黄	灰	青	紫		緑	黄	
37	46	SK1	①	-	注江 完形	IX	横ナツ 子テ	横・縦 ナツ子テ	貝殻条痕に上心斜格子文、 沈線文、口唇：刻目	明黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○								口径 15.0cm、底径 5.0cm、器高 13.9cm

第 5 表 縄文時代早期集石出土石器観察表

採出番号	掲載番号	器種	遺構名	層	取上番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
83	47	磨石類	SS35	V.b	13138	6.7	6.6	4.1	277.6	安山岩	
83	48	磨石類	SS40	V.b	13284	(5.5)	(7.7)	(5.4)	281.9	砂岩	
83	49	磨石類	SS42	V.b	13142	(7.0)	6.9	(5.2)	289.6	安山岩	
83	50	磨石類	SS42	V.b	13280	9.1	7.3	4.8	426.7	安山岩	
83	51	磨石類	SS79	VI.a	(79-21-53)	(11.5)	(6.8)	3.9	513.7	砂岩	
83	52	二次加工削片	SS41	V.b	13150	4.6	5.0	1.8	37.7	ホルンフェルス	
83	53	削片	SS68	V.a	(68-2)	4.3	4.9	1.5	27.5	ホルンフェルス	

3 遺構外出土器

(1) 概要

遺構外からは縄文時代早期前葉から後葉までの土器が出土した。総点数は1,909点を数え、その内、277点を図化し掲載する。図化した土器は形態と文様構成から、様相不明なものを含めて26類に分類した。小片などで分類が行えなかったものは、XIII類不明土器としてカウントを行い、分布図に反映させた。

掲載については前節に引き続き、調査区東部55～41ライン、中央部40～30ライン、西部29～19ラインという順で行う。調査区東部では集石遺構の検出数と比例するように土器の出土も本遺跡当該期で最も多く、型式幅も広い傾向がみられた。

(2) 調査区東部 (第85図)

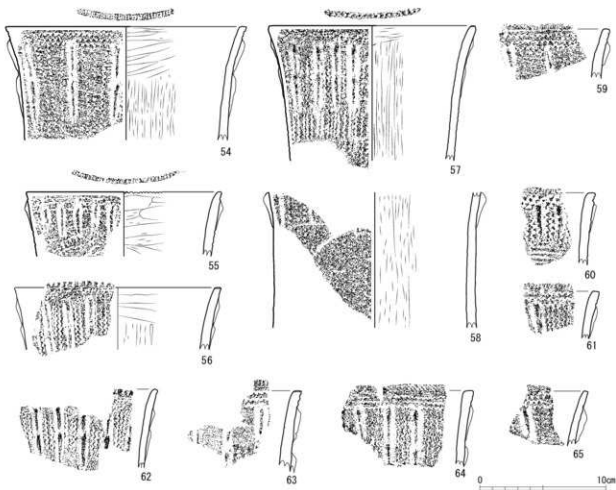
I類 (第84・86・87図 54～100)

鹿児島市前平遺跡を指標とする前平式土器に比定される。貝殻腹縁による刺突や、条痕により施文した後、一から三段の楔形突帯を貼付けるのが特徴である。資料によって楔形突帯貼付け後の調整が異なることから、型式的な差異を推測させるが、資料も限られていることから、

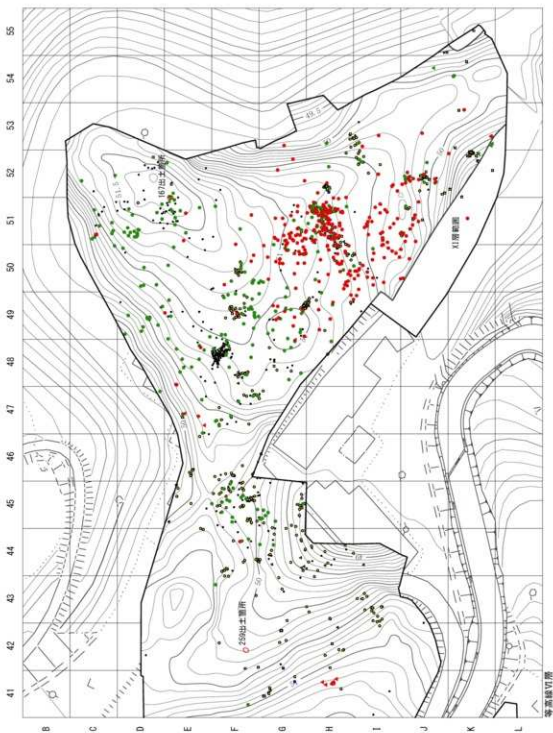
ここでは同一類型として扱ひ各項目で特徴、型式名を報告する。

54・55は口縁から胴部にかけての資料である。口縁端は平坦で、胴部から口縁にむかって緩やかに外反する。貝殻腹縁による連続刺突を横位に2条から3条施した後、楔形突帯を縦位に一から二段貼付ける。口径は15.4cm～19cmである。突帯は貼り付け後、両端をヘラ状工具によって、丁寧に整形される。

56・57は口径がいずれも16.4cmで、口縁は外反する。口唇部は刻目が施され、口唇下外面には斜位の貝殻腹縁の刺突による施文がみられる。口縁、胴部は縦位の刺突を施した後、二段の楔形突帯を貼り付け、両端をヘラナデで沈線状に仕上げる。58は口縁部が欠損している胴部資料である。縦位に貝殻腹縁の刺突による施文を1条と3条単位で施し、楔形突帯を貼付ける。内面はケズリ調整である。59～65は口縁部資料である。内面は、横ナデ調整で仕上げられ、文様は口唇下に三段の貝殻腹縁の刺突を横位に施すことを基本とし、その下に縦方向に貝殻腹縁刺突文を施す。そのあと楔形突帯を一から二段貼付ける。60は横方向の貝殻腹縁刺突三段の下位に縦方向刺突を施し、さらにその下位に横方向の条痕文がみら



第84図 縄文時代早期 東部出土土器(1)



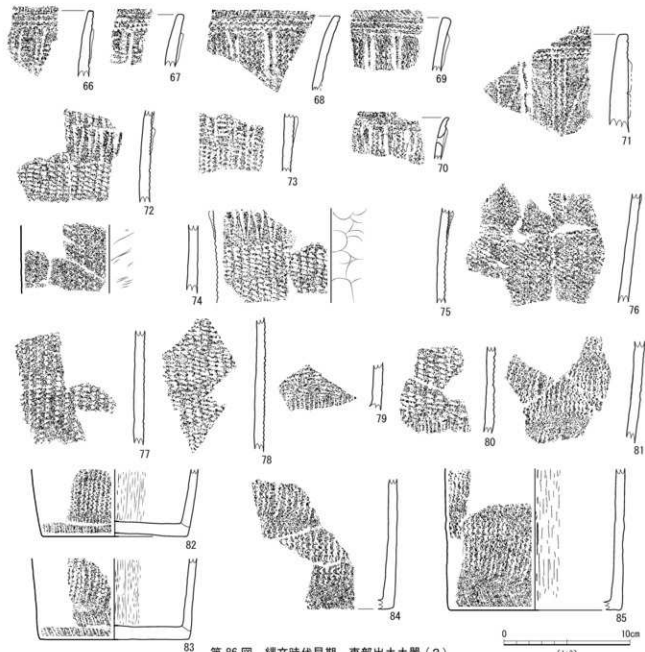
第 65 圖 縄文時代早期 東部出土土器分布図

れる。63は楔形突帯の間に施した刺突文をナゲ消す特徴を有する。66・67は楔形突帯を貼付けた後、脇を貝殻縁刺突を施す。68・69は同様の施文である。68はやや反りが強い。楔形突帯が欠損するが貼付け部が残存し、ヘラ状工具による調整が伺える。69はナゲ調整が丁寧である。70はその他の口縁資料と異なり、若干薄い器厚になる。器面には二段の楔形突帯を施し、上に貝殻縁刺突文、脇に沈線状の調整を行う。突帯そばに外面から、すり切りの補修孔が認められる。71は口縁上部に四段の貝殻縁刺突、下位には、鋸歯状の刺突で幾何学文様を施す。楔形突帯は欠損している。加栗山タイプと称される資料である。72～81は胴部資料である。72は、貝殻縁連続刺突を胴部に施す。口縁近くは二段の楔

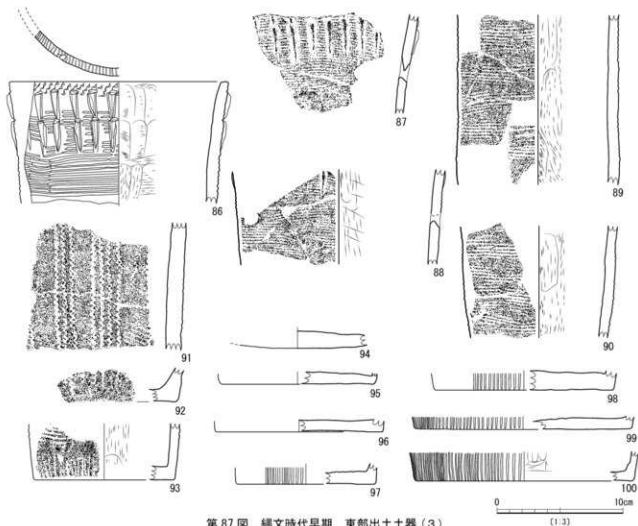
形突帯を貼付け、突帯両脇に貝殻縁刺突を施す。

73は楔形突帯付近に短い貝殻縁刺突が施され、その下位は縦方向の刺突による施文がみられる。

74は貝殻縁の刺突と条痕による施文をする。75は横方向に縦方向連続貝殻縁刺突で連点状となる文様を施す。そのあとナゲによって器面を整える。楔形突帯は上部が欠損しているため、一段しか確認できない。突帯脇は貝殻縁刺突による仕上げを行う。76は二枚貝殻縁の刺突を1条と3条単位で縦方向に施し、1条部分上部に楔形突帯を貼り付ける。突帯両脇は押圧調整によって沈線状に仕上げられる。77は内面を、ケズリ様の縦ナゲによって調整し、文様は二枚貝殻縁による縦の連続刺突を施す。施文後、部分的にナゲによる調整が一部にみられる。



第86図 縄文時代早期 東部出土土器(2)



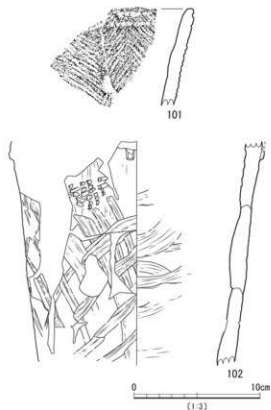
第 87 図 縄文時代早期 東部出土土器 (3)

78 は貝殻腹縁の縦方向の押しきによる施文。79・80 は胴部下半の資料で、縦方向貝殻連続刺突のあとナデ調整を行い、そのあと底部近くは縦沈線を施す。81～85 は縦方向の貝殻腹縁刺突で施文し、底部近くは上部同様貝殻腹縁による斜方向のナデがみられる。82・83 は貝殻腹縁の縦方向刺突を繰り返して施文し、その下位、底近くでは縦・斜条線が施される。85 は復元底径が 13.6cm である。86～90 は横方向の貝殻腹縁の押しき文様が施される資料である。86～90 は宮崎県札ノ元遺跡で多く出土している、札ノ元Ⅶ類土器比定される。86 は口径が 17.4cm で横方向の深い貝殻条痕が施され、その後楔形突帯文を二段貼り付ける。87 は二段の楔形突帯が確認できる。沈線部に丹が塗布される。楔形突帯の下位には外面からすり切りによる楕円形を呈した補修孔が確認できる。88 はすり切りの補修孔がみられる。89・90 は横方向の貝殻腹縁による条痕が顕著で、90 はやや口縁へ向かって外反する。91 は他の同類土器と比べて器壁が厚い、貝殻条痕とナデ調整のあと、貝殻腹縁による縦方向刺突を施した 3 条あるいは 4 条の施文単位が確認できる。92 は残存部位からやや外傾する器形と推定される。

文様は、貝殻腹縁の縦方向刺突文がかろうじて確認できる。93 は貝殻腹縁による横位条痕を施したあととナデによる調整を行い、その下位は縦沈線による施文がみられる。94～100 は底部資料である。復元底径は 11.2cm～17.2cm である。94 は断面がややレンズ状になり、その他の同類系と異なる特徴を示すが、色調や、胎土からⅠ類に位置づけた。97～100 はいずれも縦方向の条痕がみられる。

Ⅱ類 (第 88 図 101・102)

南九州市石坂上遺跡を標式とする、石坂式土器に比定される。円筒形で、Ⅰ類同様貝殻腹縁による押しき、押圧での施文がみられる。本遺跡第 2 地点での出土は掲載する 2 個体のみである。101 は口縁に向かってやや外反し、にぶい橙色を呈す。内外面ともにナデによる調整で、口縁近くに二段の貝殻腹縁の押圧、その下に条痕による綾杉文が施される。102 は胴部約半分が残存した状態で、口縁と底部が欠損している。口縁付近には幅 6mm の長方形の突帯を縦位に貼り付け、貝殻腹縁刺突と押しきによる連点文を突帯下位に施す。胴部には貝殻腹縁による条痕を施し、格子文を描く。外面は丁寧なナデ調整によ



第88図 縄文時代早期 東部出土土器(4)

り、やや光沢を帯びるが、内面は輪積痕が明瞭に残り凹凸が目立つ。

Ⅲ-1類 (第89図103～113)

Ⅲ類は西之表市下刺峯遺跡を標識とする、下刺峯式土器に比定される。口縁形状が直立するもの、内湾するものがある。貝殻による鋸歯文や織形などを全体に施し、瘤状突起を有するものなどが見られる。文様構成などから6類に細分した。

Ⅲ-1類は口縁上部に横位に押圧文又は刺突文を巡らし、その下位に同じ手法による鋸歯文を施すものである。焼成は良好で、胎土に雲母が混入されるものが多い。

103は口縁上部に貝殻腹縁による三段の押圧を巡らし第一文様帯とする。下位には同じく貝殻腹縁の押圧による鋸歯文が施される。口径19.8cmである。104は口径23.5cmである。口縁は内湾するが、逆ハの字状に開いた器形である。105は口径17.2cmである。にがい赤褐色を呈し、内面は丁寧なナデ調整である。106は上部が横、下部が縦方向の鋸歯文がみられる。107～112は胴部である。縦方向と横方向の鋸歯文がみられる。107は上部に、横位の貝殻腹縁押圧文の一端が確認できる。112は胴部資料の中で残存率が高い。内面が縦方向の丁寧なナデ調整である。113はほぼ直立する器形で、口縁は緩やかな波状を呈す。波状口縁頂部に5cmの長さで縦位に1cm幅の粘土帯を貼り付ける。口縁形状に沿って横位に3条の貝殻押圧文が巡り、下位には鋸歯文が施さ

れる。特殊だが、文様構成から同類型として扱った。

Ⅲ-2類 (第90図114～132)

口縁は内湾し、口唇を丁寧に整形する。調整は内外面ともに横もしくは斜めのナデが基本となり胎土には雲母が目立つ。土器外面全体を貝殻による押圧施文を縦、横位に連続して施す。その際、格子状の区画を設定し、中に文様を充填するものがみられる。

なお、同類系資料の施文表現に関しては押しきと表現される報告書もあるが、線状にならず、連点になることから、他の資料との差異を明確にするために押圧と記載する。114は復元口径19.2cmである。文様は、口縁から胴部にかけて同様で、貝殻腹縁を横向きにして縦位に押圧を繰り返す、一定の単位で横方向に施文を行う。115は口縁上部から内湾屈曲部まで横向きの横位連続押圧文が施され、下位には縦向きの横位押圧による施文がみられる。復元口径は29.0cmである。116～120は口縁の破片資料である。いずれも、口唇は丁寧に整形される。117は横位、斜位の押圧文が施され、補修孔と思われる穿孔がみられる。119は口縁上部1cmほどに無文部がみられ、下位には他の資料同様、押圧文が横位に展開する。120は口縁上部から屈曲部までは、横向きの横位押圧文が施され、下位には、格子状の区画を設定した後、押圧文が充填される。

121～126は胴部である。121は内外面共に、丁寧なナデ調整で、文様は貝殻腹縁を横向きにして横位に押圧施文する。122も横向きの貝殻腹縁押圧であるが、文様間に4mmほどの隙間があり、他資料に比べ文様密度が薄い。123・124は横位にした貝殻腹縁を縦方向へ押圧し横位に文様を展開させる。126は押圧の間に隙間があり、122と類似する。

127は波状口縁である。波状部は付け足形で造形されている。文様は、二枚貝腹縁の横方向押圧で口縁上部は形状に合わせた施文である。口径は20.7cmである。128は胴部から底部にかけての資料である。底部から胴部に向かって外反する。文様は貝殻腹縁の刺突文が底付近まで施されている。

129～132は底部資料であるがほぼ底部分しか残存していない状況である。129は底部中央に向かってやや厚さが増す。外面に貝殻押圧文の痕跡が若干みられたため同分類とした。130は復元底径が8.0cmで底面に木葉圧痕がみられる。131も若干ながら押圧施文がみられる。内底部は剥落している。そのため、粘土を貼り付けている状況が観察できる。復元底径14.4cmである。

Ⅲ-3類 (第90図133～138)

口縁には横位に貝殻腹縁の押圧が巡り、その下位には縦位の刺突が施される土器群である。133は口縁で、内湾する形と平坦に整形された口唇はⅢ-2類と共通する。文様は、口縁に2条の押圧文が巡り、その下に縦向

き刺突文さらに3条の押圧文、縦向き刺突文という形で施文される。134～138は胴部である。134は横位の押圧がみられるがその他の資料は縦位の刺突文のみである。137は刺突文が3～4条1単位で施文されている。

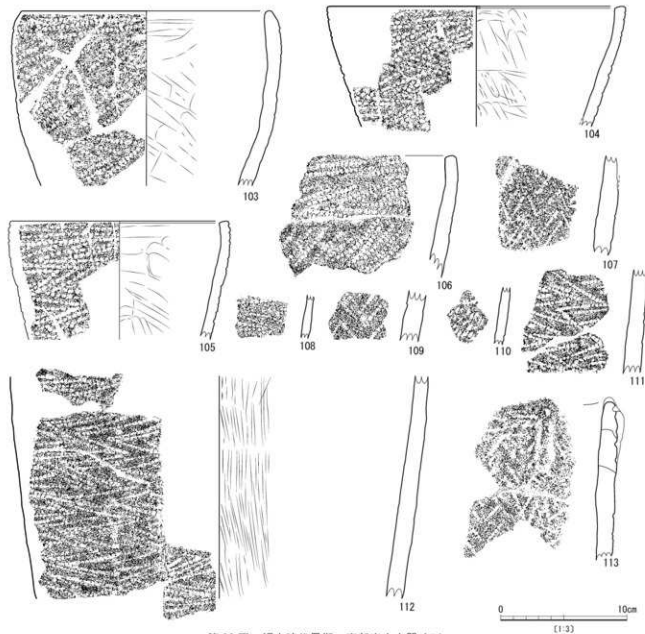
Ⅲ-4類 (第91図 139～145)

3～4条の横位条痕文と鋸歯状押圧文のセットで施文される。調整は内外面ともナデ調整である。139は口縁がやや内湾し、横位の貝殻条痕文が4条巡る。下位には3条1単位の鋸歯文が上下に施され菱形となる。140は口縁に横位に3条の押圧文と、下位と同じく押圧の鋸歯文と思われる施文の一端が窺える。口唇は平坦で、内湾しない。141は口縁下に断面三角形の粘土を横位に貼り付けて肥厚させ、やや内湾する器形となる。上部には貝殻条痕文が3条施され、その下には横位の押圧

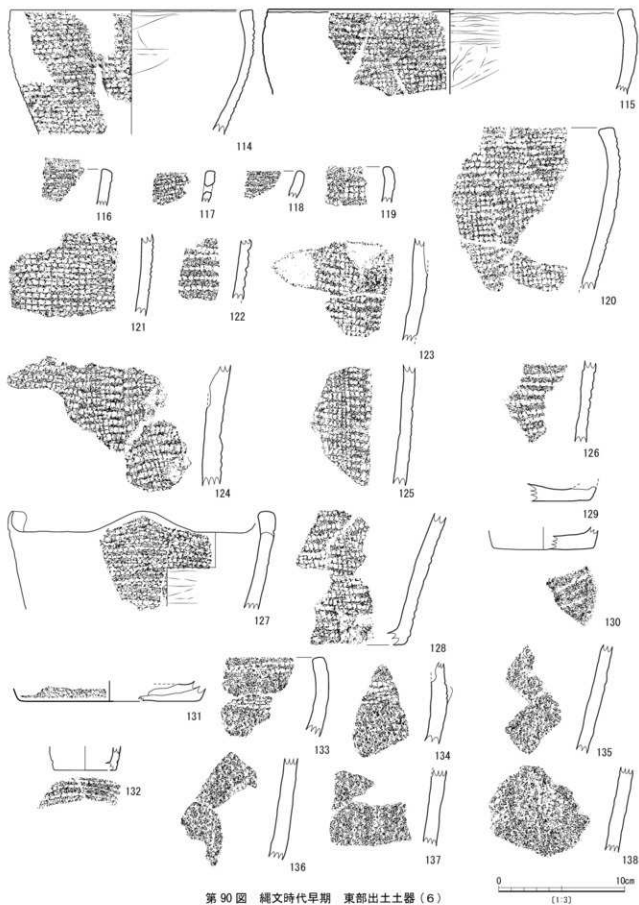
及び、鋸歯文がみられる。142も141同様の施文である。143は口縁端部が若干内傾する器形で、口縁には横位の沈線が施される。144は胴部である。中央部に4本の条痕文があり、その上位下位に3条の貝殻腹縁による鋸歯文が施される。145は胴部から底部付近の資料である。内面はヘラによる縦方向へのナデで調整される。文様は貝殻腹縁押圧により、鋸歯文が施されるが底部付近には施文が達していない。

Ⅲ-5類 (第91図 146～154)

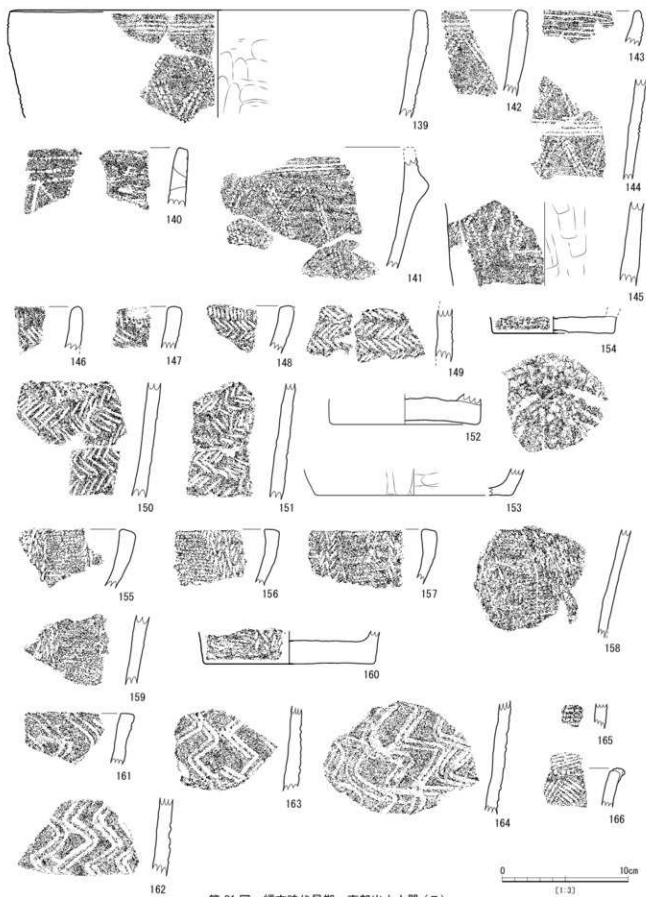
Ⅲ-5類は貝殻腹縁による短い条痕で綾杉文が施される。口縁は小さく内湾し、口唇は平坦なものと、丸みを帯びるものがみられる。146は口唇が丸く、ほぼ直立する。上部には縦方向の条痕による1cm弱の短い沈線が施され、下位には綾杉文が施される。147・148も文様構



第91図 縄文時代早期 東部出土土器(5)



第 90 図 縄文時代早期 東部出土土器 (6)



第91圖 縄文時代早期 東部出土土器(7)

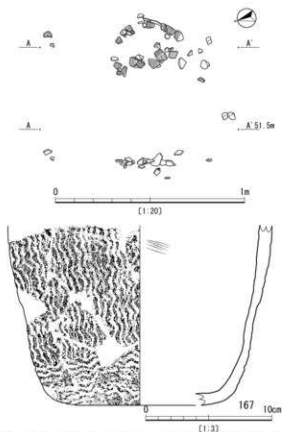
成は146とほぼ同様であるが、口縁端部がやや内傾し、口唇が平坦に整形される。149～151は胴部資料である。いずれも貝殻腹縁による短い条痕により、綾杉文が施される。151は施文がやや乱雑である。

152は上げ底となる底部である。底径は11.6cmである。153は底径15.4cmでやや外傾する。内外面ともにナデ調整である。154は底径9.6cmで底には木葉痕と思われる圧痕がみられる。外面は無文。

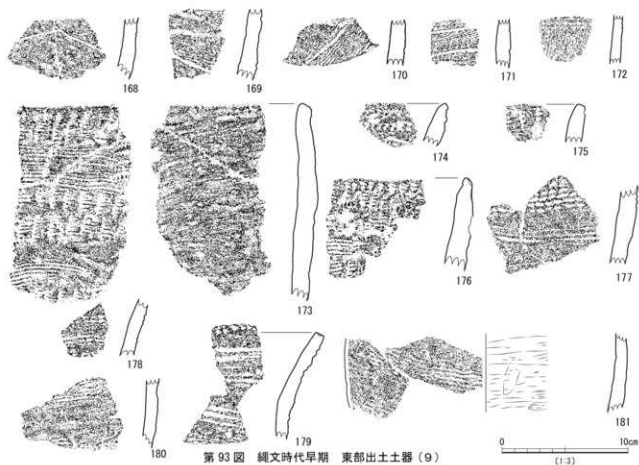
Ⅲ-6類 (第91図155～160)

同類型は辻タイプと呼称される土器群と考えられるが、ここでは、下剥峯式土器の一バリエーションの可能性も考慮し、細分類とした。

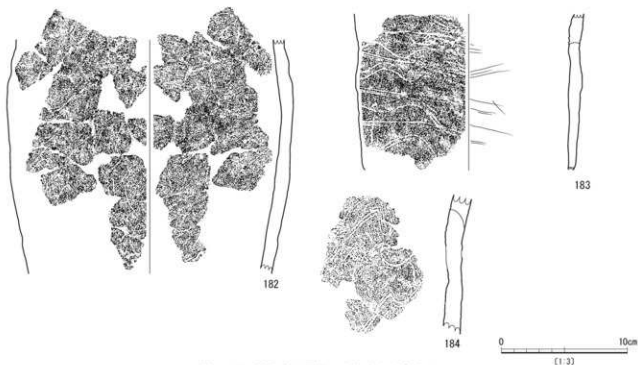
器形は内湾し、口唇部を平坦に整形する。色調は赤褐色を呈し、雲母などの混和材も各個体で近似するため同一個体の可能性が高い。155～157の口縁資料は縦位に羽状文を約3cm間隔で施し、間には横位に貝殻腹縁の押圧文を加える。157は一部押圧文をナデ消す部分もみられる。158・159は胴部であるが、口縁とほぼ同じ文様構成である。160は底部で、底径13.5cmである。文様は縦位の羽状文と横位の押圧文で構成される。



第92図 縄文時代早期 東部出土土器及び出土状況(8)



第93図 縄文時代早期 東部出土土器(9)



第94図 縄文時代早期 東部出土土器(10)

IV類 (第91図161～164)

161～164は霧島市溝辺町桑ノ丸遺跡を標識とする、桑ノ丸式土器に比定される土器である。口縁は直立し、口唇は平坦に整形される。色調はにがい赤褐色を呈し、文様は縦位に流水文を施す。東部出土の同類系は少数であった。掲載の4点も同一個体と考えられる。

V類 (第91図165・166)

霧島市国分平埴貝塚を標識とする、平埴式土器に比定される。永吉天神段遺跡第2地点で出土した点数は東部では2点である。いずれも小破片である。

166は口縁に粘土帯を貼り付けて肥厚部を作り出し、口唇部には刻目を施す。胴部には縄文を斜位交互に転がし施文する。

V類 (第92図167)

山形押型文の胴部から底部にかけての資料である。E-52区で底部を上向きにした状態で検出されたが遺構は確認できなかったため、包含層出土遺物として扱った。器形は、底部から胴部に緩やかな外傾がみられ、底部端がやや丸みを帯びるのが特徴である。文様は、底から3.4cmほどまでは、横方向に山形押型原体を転がし、上位は縦方向に同様の原体を転がしている。復元底径は14.0cmで、内面は横方向の丁寧なナデ調整である。胎土には白色の鉱物が目立つ。

IX-1類 (第93図168～172)

IX類は伊佐市菱刈町塞ノ神遺跡を標識とする、塞ノ神式土器に比定される。本類型は、施文具や施文方法、器面調整の差異により、計9類に細分した。168～171は

無節縄文を斜位に転がし、縄文施文の範囲を沈線で区画する。172は上部に横位の沈線が2条確認でき、下位には網目燃糸文を縦位に施している。器面が摩滅し、燃糸文の幅などは判然としない。

IX-2類 (第93図173～179)

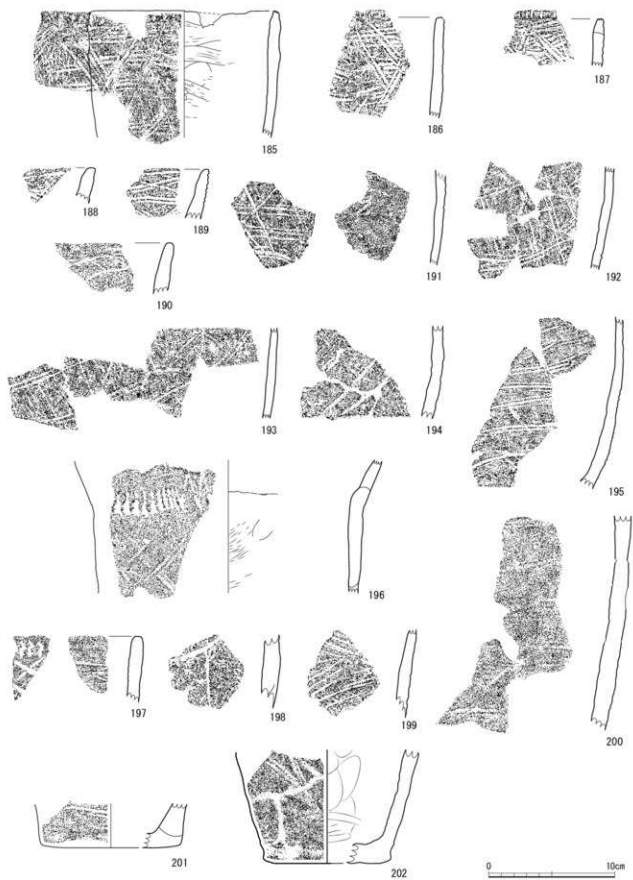
口縁部は直立するものと、頸部から外反するものがある。器面調整が粗く、全体に凸凹しているが、焼成は良好である。文様は貝殻腹縁の縦方向の横位押圧文と押し引き文、又は条痕文がみられる。173は口縁から下位に向かって貝殻腹縁の押圧を二段と、条痕二段が施文される。内面は横ナデ調整で、条痕様となる。混和材の鉱物粒子が大きい。174は口縁部断面形が三角形となる。二段の貝殻押圧文を施し、その下位に条痕がみられる。175は口唇部が平坦に整形される。貝殻腹縁の押圧を横位に連続して施す。押圧文の下位には条痕がみられる。176は口唇部に貝殻腹縁刺突による刻目が施され、口縁にはやや押し引き様となる押圧文が横位に施される。177は貝殻腹縁による四段の連続押圧と下位の横方向の貝殻条痕で構成される。178は177と施文が近似する。179は頸部から屈曲し口縁は外反する。口唇は平坦で貝殻押圧による刻目がみられる。口縁部は貝殻による横位の条痕文が施される。

IX-3類 (第93図180・181)

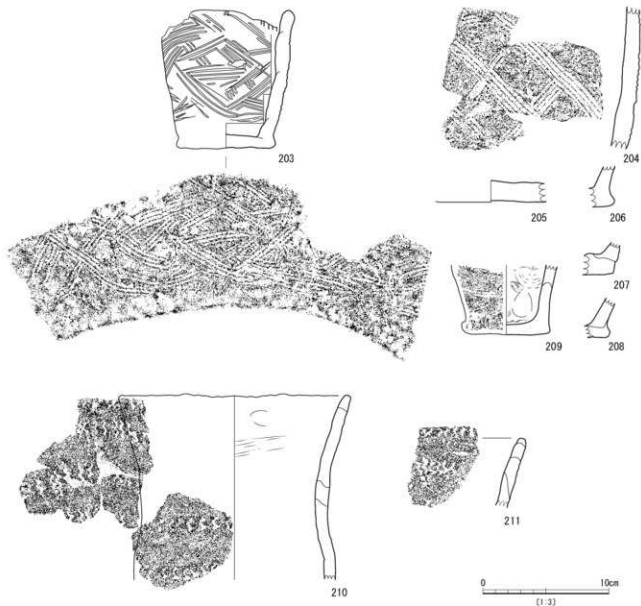
180・181は貝殻条痕文を施す。施文は2～3cm間隔をあけて上下に連続して横位に巡る。

IX-4類 (第94図182～184)

沈線1～4条により鋸歯文及び流水文を描く。182は



第95図 縄文時代早期 東部出土土器(11)



第96図 縄文時代早期 東部出土土器(12)

横位に流水文を施す。曲線に角度がつくため、鋸歯様となる部分もみられる。183は横位の条痕を約2cm間隔で施し、区画帯としてその中に流水文を施す。184は頸部から胴部にかけての資料である。口縁に向かって屈曲してやや外傾する。

IX-5類 (第95・96図 185～209)

185～187は直立する口縁資料である。口唇部はやや丸みを帯び、刻目が施される。外面には貝殻条痕によって斜格子文を描く。185は復元口径が14.9cmで斜格子文と半月状の刺突文が並存する。刺突文は幅3cmで縦位に施される。188は上位横沈線、下位条痕によって施文される。189は口縁端部に向かって窄まる。施文は横位貝殻条痕文の間に斜位条痕を施す。190は口唇部が平坦に整形され、斜位の沈線で施文される。191～193は胴部である。貝殻条痕によって斜格子文が施される。内

面は斜位のナデ調整である。194は条痕による施文が粗く、条線にばらつきがある。焼成は良である。195は斜位の条痕で施文される。196は頸部から口縁に向かって外傾する。屈曲部付近から横位で縦方向の貝殻腹縁刺突が施され、連続して同じく刺突による鋸歯文がみられる。下位には、斜格子文もみられる。197の内面には、貝殻による条痕が明瞭である。文様は、口縁上部に貝殻腹縁による刺突を横位に連続して施す。その下部は格子状沈線文を施す。198は斜位に沈線が施される。199は胴部に沈線にて、綾杉もしくは羽状文が施される。沈線が非常にシャープである。200・201は同一個体と考えられる、胴部と底部である。200は明赤褐色を呈し、貝殻腹縁による条痕が横位に施されるが、風化が著しく、不明瞭である。201は復元底径11.2cmで横位の条痕が一部確認できる。202は復元底径10.0cmの底部である。

底付近に若干の窪みを有す。内外面ともにナデ調整で、文様は貝殻腹縁による斜位の条痕文である。203は口縁部から胴部にかけての資料である。底径は7.8cmで、最大張出部から若干窄まる。上部には頭部と思われる緩やかな屈曲部を有す。口縁は風化による影響が著しい。文様は貝殻条痕による、斜格子文が基調となるが底部付近には施文されない。輪積み痕跡が顕著である。204は貝殻条痕による斜格子文が丁寧に施される。205～209は底部資料である。全て、底から一旦窄まりをみせてから、胴部に向かって外反する特徴を有す。207・208は底部を円形に作出し、粘土を積み上げた工程が明瞭である。209は底径7.0cmで横位の条線が若干確認できる。

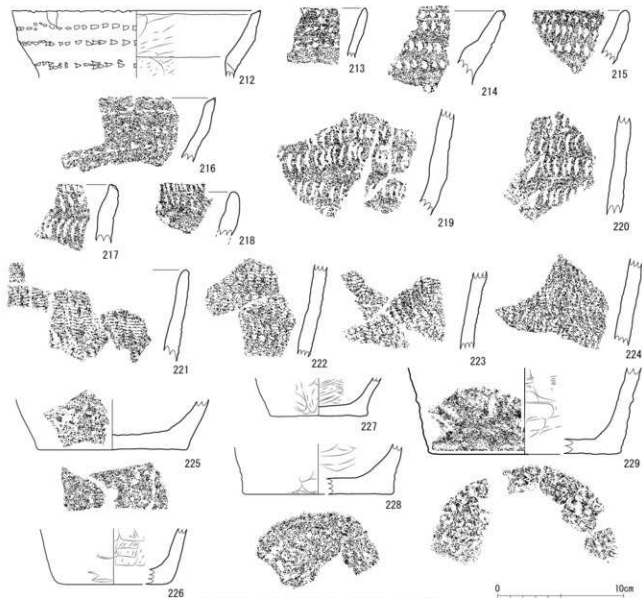
IX-6類 (第96図 210・211)

210・211は貝殻腹縁を縦向きにし、横位に刺突施文する資料である。210は口縁から胴部にかけて残存し、

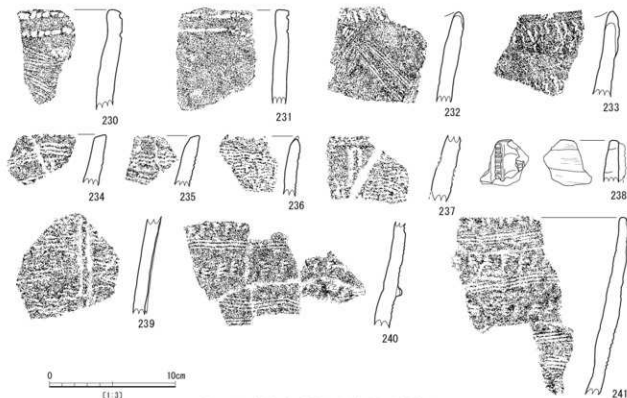
復元口径が18.4cmである。頭部から口縁に向かって外反する。口唇部から胴部には貝殻腹縁による連続刺突が縦幅3cmほどの間隔を空けて施される。

IX-7類 (第97図 212～220)

本類型は貝殻を用いた押圧施文を施す。焼成は良好なものが多い。212は外反する頭部から口縁である。口唇には貝殻押圧によって刻目が施され、口縁には同一施文具により、横位の押圧文が三段みられる。213は212と同様の文様構成であるが器壁が薄く、口縁上部までストレートに立ち上がり口唇はやや丸みを帯びる。214は内面側に器壁が厚くなる。横位の貝殻押圧文が五段みられる。215は口唇が丸みを帯びる。外面は四段の貝殻押圧によって施文される。216は外反する口縁である。口縁部中央付近で一旦張り出し、口縁上端に至る。貝殻による三段の押圧文が観察できる。文様、胎土の観察点で



第97図 縄文時代早期 東部出土土器 (13)



第98図 縄文時代早期 東部出土土器(14)

212と近似する。217・218は貝殻腹縁の縦向き押圧により、爪形文様を施す。219・220は胴部である。貝殻腹縁を縦向きにして横位に連続押圧を施す。

IX-8類 (第97図 221～229)

221はやや外傾する口縁資料である。口縁上端は貝殻押圧文、胴部は貝殻腹縁の横位押し引き文が施される。内外面とも貝殻を使用したナデが施される。222・223は胴部である。221と同じ施文であるが222は押し引きとしない。224は連続した貝殻腹縁押圧によって器面全体が施文される。225～229は底部資料である。225は復元底径が12.0cmで外面は貝殻押圧により施文される。底面に植物圧痕有り。226は復元底径9.2cmで底が丸みを帯びる。内面は縦方向のナデ調整が確認できるが、外面は摩滅が激しく判然としない。227は底径7.8cmで、若干くびれを有す。228は底に何らかの圧痕が残存するが、素材は判断できなかった。229は貝殻腹縁による押圧文とみられる部分が確認できるが摩滅が著しい。

IX-9類 (第98図 230～233)

IX類型に属すが、他の細分資料に含まれないもので、貝殻条痕と押圧による施文を施すものである。

230・231は口縁上部に貝殻腹縁を横向きにして横位に二段、押圧施文する。その下位には斜位の条痕を施す。内面はナデ調整で、指頭圧痕が残る。232は波状口縁を呈す。上部には貝殻腹縁の押圧による刻目、その下位には斜格子状に条痕を施す。233も波状口縁資料であ

る。波状部は体部に粘土帯を貼り付けて作出している。縦向きにした貝殻腹縁を横位に押圧施文する。

X類 (第98図 234～241)

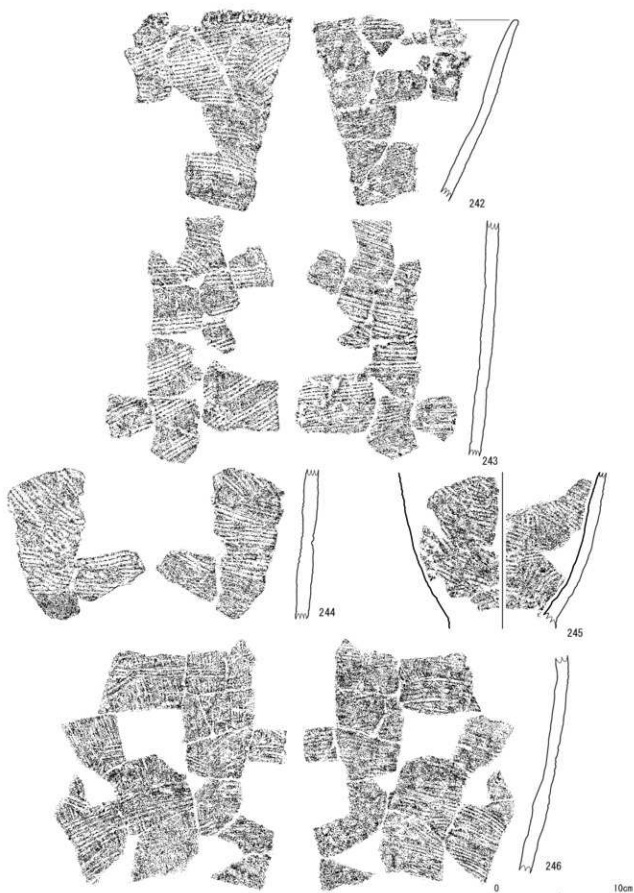
中種子町苦浜貝塚を標識とする、若浜式土器に比定される。

外反した器形で、口縁は平坦に整形するものと、丸みを帯びるものがある。文様は貝殻腹縁による押圧文と条痕文を基本として、突帯を縦位、横位に貼り付ける。

234・235は口唇が平坦に整形され、貝殻条痕によって波状文を描く。236は口唇部がやや突出する。237は上部に2条の小突帯が廻り、その下位に縦突帯が垂下する。その左右は波状文が施文される。238は口縁上端から突帯を垂下させ、突帯上に刻目が施される。左右に文様はみられない。239は横位に条痕文を施した後に、縦方向に突帯を貼り付けるが、突帯部は摩滅して、貼り付け部の痕跡が確認できる程度である。240・241は同一個体と想定する資料である。いずれも文様は貝殻押圧文と条痕文を上下に繰り返して施す。240は下部にやや湾曲する形で突帯を貼り付ける。241は口縁に押圧による刻目が施される。体部外面には横位の条痕文が4段と条痕間に貝殻押圧がみられる。胎土に雲母が多く含有され、良好な焼成である。

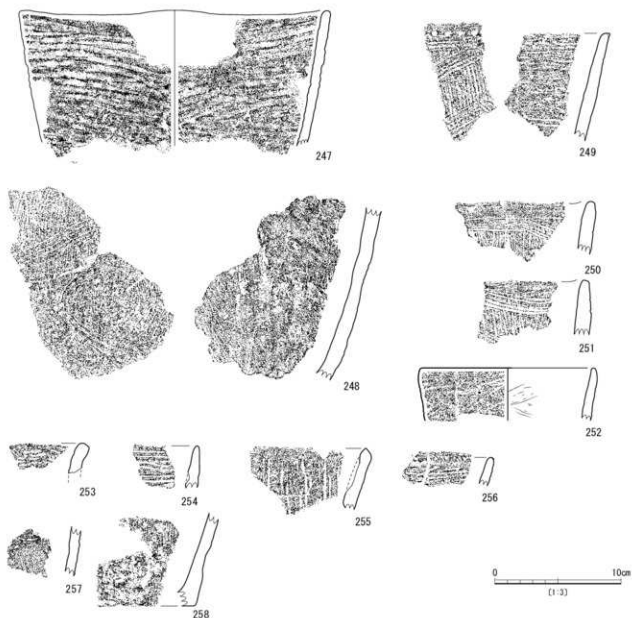
XI類 (第99～101図 242～259)

縄文時代早期後葉の条痕文土器と呼称される土器群である。内面、外面ともに貝殻による条痕が明瞭に残る。



第 99 図 縄文時代早期 東部出土土器 (15)

(1/3)



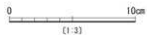
第100図 縄文時代早期 東部出土土器(16)

242は口縁から胴部にかけて残る。わずかに「く」の字状に屈曲する。内面外面ともに貝殻条痕による調整痕が明瞭に残る。口唇部には巻貝による押圧により刻目が作出される。胎土には雲母が多い。243・244も内外面に貝殻条痕調整痕が明瞭にみられるが部分的にナゲ消される。245は下部に向かい窄まる形状から底部に近い部位と思われる。条痕は土器内外面に施される状況がみられる。同類型は高吉B遺跡の小山タイプ土器と紹介される資料に近似する。246は条痕を横位と斜位に施し、型崩れした格子文を描く。247は口縁がゆるやかな波状を呈す。器形や条痕などから轟B式と捉えられそうであるが、IV層（アカホヤ該当層）からの出土であるため、条痕文系として扱った。復元口径は24.6cmで内面、外面は横位の貝殻条痕による調整である。248は縦位の貝殻条痕

を施した後、曲線文を描く。内面は縦、横位の条痕が若干残る。249～256は口縁の破片資料である。249は外面に縦位、斜位の貝殻条痕が施され、口縁端部に刻目がみられる。内面も横方向の条痕調整である。250・251は同一個体である。波状口縁で、縦、斜めの条痕を施し、口縁上部に横方向の条痕を追加施文する。252は復元口径13.8cmで外面には貝殻条痕が斜位に施されるが、摩滅し凹線が不明瞭である。253は指頭による調整痕が明瞭で、外面は凹凸がある。貝殻腹縁による押しき施文がみられるが、条痕が短い。254は口縁上部から横位の条痕が施される。255は2条1組の縦沈線が施される。256は口縁端に刻目、外面には横位と斜位の条線が施される。258は底部である。外面には縦位の条痕がみられる。胎土に雲母が多く含有されている。259はF-42

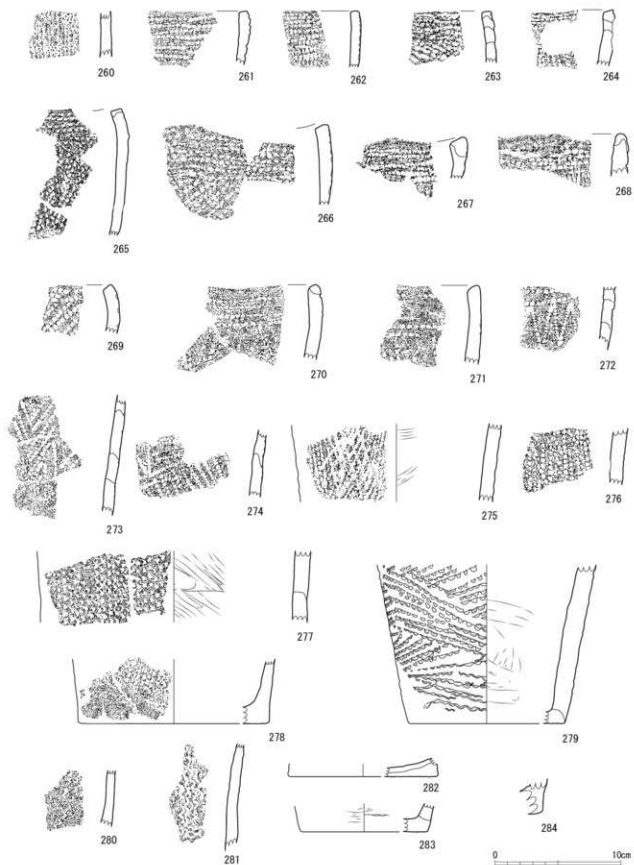


259



区IV b層直下で検出された。検出範囲北側に底部があり、地形に沿って南側へ破片がみられた。口径は36.6cm、底径7.2cm、器高34.6cmである。体部の厚さにばらつきがある。底部は2.7cmの厚みがあり比較的厚手である。内面は、貝殻腹縁による横主体の条痕が明瞭で、口唇部内面は小さな段を有し、巻貝押圧による刻目が施される。胴部には貝殻腹縁による斜格子及び縦方向の条痕文がみられるが底部付近には届いていない。胎土は砂質土で、混和材として石英や白色鉱物、雲母が多く混入されている。口縁上部の外面にはススが付着し黒色を呈すが、全体的に赤褐色である。非常に脆く、器面の剥落が目立つ。

第101図 縄文時代早期 東部出土土器及び出土状況図(17)



第 103 図 縄文時代早期 中央部出土土器 (1)

(3) 調査区中央部 (第102図)

I類 (第103図260)

中央部ではこの一点のみの出土である。260は、貝殻腹縁による刺突を縦位に連続して施す。

III-1類 (第103図261~284)

261~271は口縁である。261は横位に貝殻腹縁の押圧文を施す。262はわずかに内湾し、横位に貝殻押圧文を施す。263・264は断面に輪積痕が明瞭に残る。265~267は波状口縁資料である。いずれも、横位に貝殻腹縁の押圧を数段施し、下に縦・斜位の押圧文がみられる。265は押圧による凹部形状が半載状竹管に似る。268は上部に、粘土帯を巻きつけるように貼り付ける。269は内湾し、口唇が内側に傾く。ナデ調整がミガキ様で光沢を帯びる。270は口唇を丸くおさめ、横位と斜位に貝殻腹縁押圧を施すが、文様間に空白部が多くなる。271は外面に摩擦がみられる。272は胴部である。横位と斜位の貝殻押圧により鋸歯文を描く。273は底部付近までの残存資料で、施文が底まで至っていない状況が確認できる。文様は鋸歯文を数段重ねて施す。274は斜位貝殻押圧、下位は縦位の押圧文が施される。275・276は斜位の貝殻押圧文による施文を重複して施す。277は縦位の貝殻刺突を施した後、斜位に施す。焼成が良く硬質。278はほぼ直立する器形の底部資料である。貝殻腹縁による押圧を斜位に施す。下部はミガキ様のナデにより、光沢を帯びる。279は貝殻押圧を斜位に施し、被杉文を描く。280・281貝殻腹縁を縦位に連続して刺突して施文する。280は施文の間隔が広い。

282・283は底部で、282は内底部に粘土を重ねた痕跡が明瞭である。283は内面が黒色で、外面は丁寧な横ナデである。284は外面に斜位の貝殻押圧が若干確認でき、胎土中に雲母が多いことから本類と判断した。

III-5類 (第104図285~287)

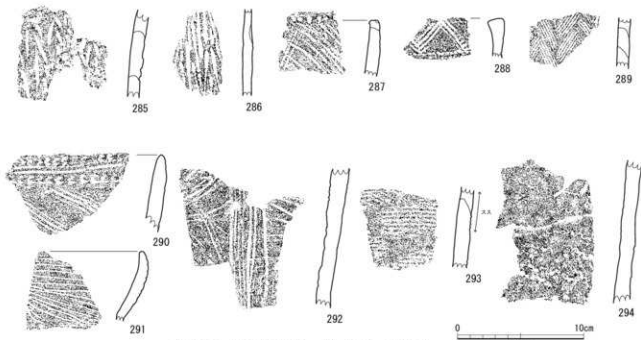
285は短い沈線で縦向きの羽状文を施す。286は貝殻腹縁を縦向きに刺突し、羽状文となる。焼成は良好である。287は口縁端に刻目を施す。文様は貝殻腹縁によって右、左上がりの条痕を施す。内面は丁寧なナデ調整で、やや内湾口縁を意匠した輪積みが見られる。

IV類 (第104図288・289)

288は口縁内側に肥厚し、内湾口縁となる。口唇部は平坦に整形される。2cm幅で横位の貝殻刺突文を施し、その間に4条単位の貝殻条痕で鋸歯文を施す。289は5条を単位とし羽状文を描く。

IX-5類 (第104図290~294)

290は貝殻押し引き文を口縁下に2段横位に施す。押し引き文の間には貝殻条痕がみられる。胴部にかけては斜位の貝殻条痕を施す。291は頸部から大きく外反し徐々に内傾する。文様は頸部に横沈線を施し、上位に横と斜めの沈線をさらに施す。292は焼成良く、硬質である。文様は貝殻条痕の縦位直線と曲線文によって構成される。293は横位の貝殻条痕が施されるがナデ調整で一部消失している。上部にはススが付着する。294は貝殻腹縁による斜位の押圧文が施されるが、下部は器面が剥離して観察できない。



第104図 縄文時代早期 中央部出土土器(2)

(4) 調査区西部 (第105図)

Ⅲ-1類 (第106図 295)

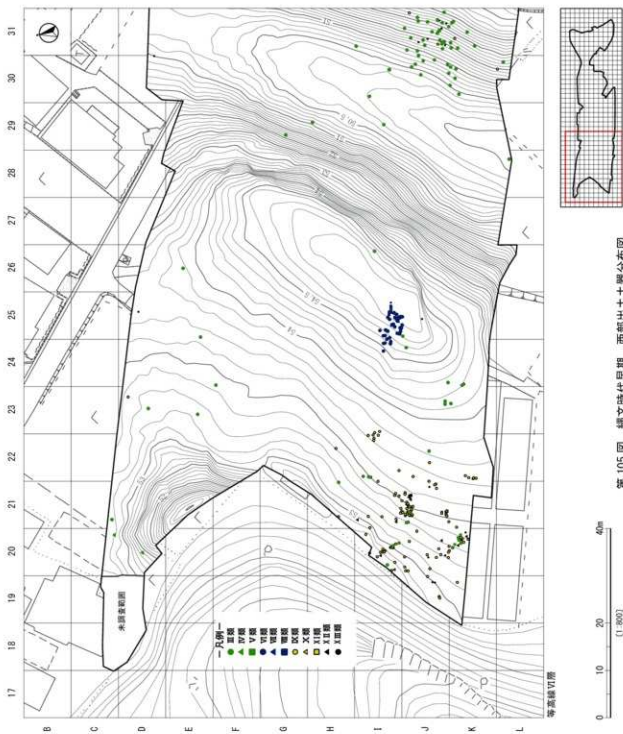
295は口縁から胴部にかけての資料で復元口径は25.2cmである。口唇部は丸く、若干内湾する。文様はまず貝殻腹縁刺突を口縁に2条横位に施し、その下位には同手法で羽状文を施す。また口縁上部から下に4cmの箇所に横長の突帯を貼り付ける。

Ⅲ-2類 (第106図 296~298)

296は口縁から五段の押圧文が横位に施される。口唇は平坦に整形される。297も押圧文による施文である。内面の調整がケズリ様である。298は斜位に押圧施文される。

Ⅳ類 (第106図 299~301)

299は口縁が波状を呈す。口縁端から貝殻腹縁の押圧及び条痕による施文がみられる。横位に押圧した後、条



第105図 縄文時代早期 西部出土土器分布図

痕による鋸歯文を施す。300は5条単位の貝殻条痕により羽状文を施す。301は資料上部に横位の肥厚帯を作り貝殻押し文を施す。その上位にも1.5cm程の長さの押し文を施す。肥厚部下位には、5条単位の条痕により鋸歯文を描く。

V類 (第106図306・307)

306は楕円の押し文を施す。原体を斜位に転がし施文している。307は山形押し文を縦位に転がし施文する。破片のみで接合資料は確認できなかった。

VI類 (第106図302・303)

伊佐市手向山遺跡を標識とする手向山式土器に比定される。

302と303は同一個体である。302は復元口径が25.8cmである。器形は底部から外傾し胴中部から「く」の字状に屈曲し口縁に向かって外反する。口縁上部には粘土帯を貼り付けて肥厚させ、肥厚部に刻目を施す。胴

部上半には罫目がみられるが、凹部が浅く、単位などが観察できない。内面は横位のナデ調整で、下部は条痕がみられる。303は復元底径6.8cmで上げ底となる。

VII類 (第106図304・305)

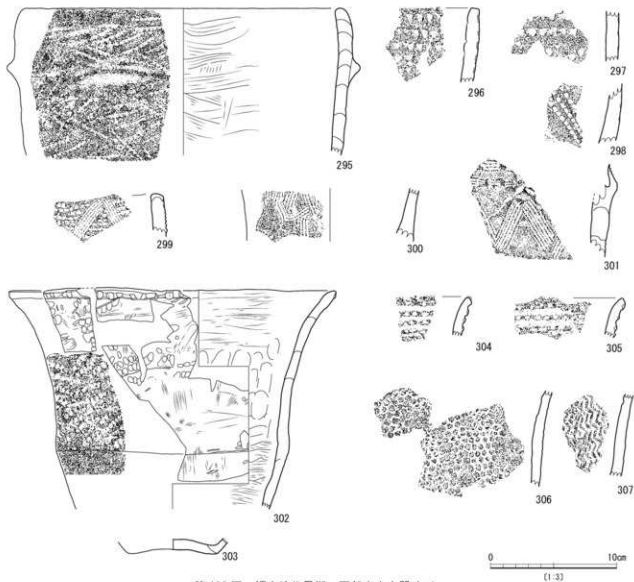
宮崎県えびの市妙見遺跡を標識とする。妙見式土器に比定される。

304は突帯を口縁に4条巡らし、突帯上に棒状工具で連続刺突を施す。内面は比較的丁寧な横ナデ調整である。

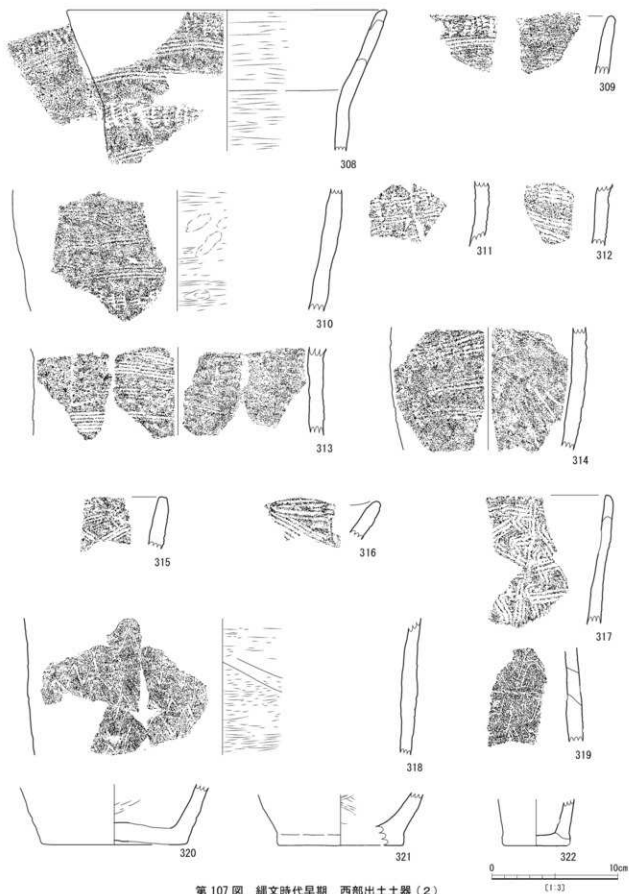
305は突帯が3条残る。突帯上に304同様に刺突が施される。口縁上部は突帯が一部突出し、波状口縁を呈していた可能性がある。

IX-2類 (第107図308~314)

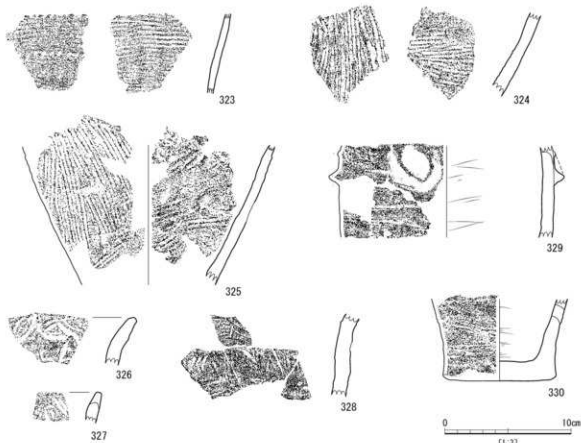
308は頸部から口縁に向かって外反し、口縁に縦向きの貝殻腹縁を横位に連続押圧する。頸部は押し文で区画を作り出し、その中に貝殻条痕を横位に二段施す。外面は風化がみられる。復元口径は25.4cm。309は内面調整



第106図 縄文時代早期 西部出土土器(1)



第 107 図 縄文時代早期 西部出土土器 (2)



第108図 縄文時代早期 西部出土土器(3)

が丁寧で、焼成もよい。310も4条単位の横位条痕が施され、下部には押し引き文がみられる。一部風化によって、条線が不明瞭である。311～314は胴部資料で、貝殻腹縁条痕が施される。311は内面に調整時の粘土溜がみられる。312は上部文様がやや押し引き気味である。313は3～6条単位の横位条痕が施される。中央付近は器面が風化し条痕がみえない。314は内面調整が左上がりの斜位調整である。

IX-4類 (第107図317～322)

317はほぼ直立する器形で口縁端に刻目が施される。外面には縦、横に条痕を施し区画として、その中に同じく貝殻条痕の流水文を縦に施す。318・319は貝殻条痕による横位の流水文を施す。混和材の鉱物が大きい。320は復元底径が11.4cmで上げ底である。鉱物粒が大きく、器面も凹凸がみられる。321は底部から胴部にかけてややくびれを有す。内面は貝殻腹縁によるナデで、条痕が若干残る。復元底径10.0cm。322は底部調整が粗く、輪積みの痕跡が顕著に残る。復元底径5.2cm。

IX-5類 (第107図315・316)

315は口唇部を平坦に作り出し、外面には条痕による斜格子文を描く。316は波状口縁の破片である。上部に横位の条痕、下部には斜位の条痕を施す。

XI類 (第108図323～325)

323は厚さ5mmと薄く、胎土はきめ細かい。内外ともに横位の条痕が明瞭に残る。外面には貝殻腹縁端部による刺突が横方向に二段施される。324・325は外面に縦位、内面に横位の条痕調整がみられる。同一個体であるが、接合点はなかった。

XII類 (第108図326～330)

型式不明な土器群である。326・327は外反する口縁で、口唇はヘラ状工具で平坦に仕上げる。外面は貝殻条痕で半弧状の曲線が絡み合うような文様が描かれる。328は屈曲部を持つ胴部である。外面は貝殻条痕で縦、横位に施す。内面は横ナデで丁寧に調整される。329・330は同一個体と思われるが、接合点がなかった。329は胴部にリング状の突帯を貼り付け、浮文作出する。その後、横位の条痕を施す。330は若干のくびれを持つ。復元底径は9.0cmで、外面に横方向の条痕が施される。浮文を有する土器は類例が少なく様相が判然としませんが、当該土器が出土しているI・J-20・21区付近ではIX類土器が多くみられたことや、器形などからIX類土器の範疇に収まる可能性も考えられる。

第6表 縄文時代早期出土土器観察表

調査機関 番号	出土区	層	取上 番号	部位 (共存体)	分類 番号	調形		文様	色調		胎土						備考			
						外面	内面		外面	内面	白 石	黄 石	黄 土	灰 石	灰 土	赤 土		赤 土		
																			外面	内面
84	54	650	V b	13341	口縁～胴 上半	1	-	横ナゲ 縦ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 19.0 cm
84	55	H51, I53	V b	10467他	口縁	1	-	横ナゲ	貝殻埋め突文、貝殻押引 突文、模形突部、口唇、肩目	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 15.4 cm
84	56	650	V b	10581	口縁	1	縦ケズリ	縦ケズリ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	57	H50-51, I53	V b	10448他	口縁～胴 上半	1	縦ナゲ	縦ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	58	ER-1, G53, H59	V b, VI	10630他	胴	1	-	縦ケズリ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16cm
84	59	150	V b	13040	口縁	1	-	横ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	60	650	V b	11309	口縁～胴	1	ナゲ	ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	61	150	V b	10622	口縁～胴	1	ナゲ	ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	62	G-851	V b	8602他	口縁	1	丁字ナゲ	丁字ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	63	G50, H51	V b	8550他	口縁	1	-	ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	64	H51	V b	10481他	口縁	1	ナゲ	ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	65	650	V b	10572	口縁	1	ナゲ	ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	66	650	V b	11320	口縁	1	-	横ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	67	650	V b	10567	口縁	1	丁字ナゲ	丁字ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	68	431	V b	11944	口縁	1	横ナゲ	横ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	69	152	V b	14555	口縁	1	丁字ナゲ	丁字ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	70	H51	V b	10480	口縁	1	-	丁字ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	71	649	V b	11330	口縁	1	-	横ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	72	150, 151	V b	10621他	胴上半	1	-	丁字ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	73	G51	V b	11310	胴上半	1	-	横ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	74	G50-51	V a-b	8625他	胴	1	-	横ナゲ	条文文、貝殻埋め突文	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	75	ER, 649	V b	10634他	胴上半	1	-	丁字ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	76	650	V b	10574	胴	1	-	縦ケズリ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	77	H51	V b	10475他	口縁	1	ケズリ 横ナゲ	ケズリ 横ナゲ	貝殻埋め突文	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	78	G, 849	V b	10635他	胴	1	-	丁字ナゲ	貝殻埋め突文（押引キ様）	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	79	151	V b	10450	胴下半 （底近く）	1	-	ナゲ	貝殻埋め突文、条文文	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	80	J51	V b	11384他	胴下半 （底近く）	1	-	丁字ナゲ	貝殻埋め突文、条文文	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	81	H51-52	V b	8577他	胴	1	ナゲ	ケズリ	貝殻埋め突文	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	82	G50, H51, I50, J52	V b	10524他	底	1	ナゲ	ナゲ	貝殻埋め突文、底近く に条文文	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	83	H-151, J53	V b	2695他	底	1	-	ヘラケズリ	貝殻埋め突文、条文文	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	84	H51	V b	10460他	胴～底	1	ナゲ	ケズリ	貝殻埋め突文、条文文	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	85	G49, H51	V b	10498他	胴～底	1	ナゲ	ケズリ	貝殻埋め突文、条文文	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	86	F-G-H51	V, VI	8574他	口縁～胴 上半	1	貝殻条 横ナゲ	横ナゲ	貝殻埋め突文、模形突部 （口唇、肩目）	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	87	G50, 849	V b	8630他	胴上半	1	貝殻条	横ナゲ	条文文、模形突部（口唇、肩目） （口唇、肩目）	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	88	G-150, H51	V b	10504他	胴上半	1	横ナゲ	横ナゲ	条文文、模形突部（口唇、肩目）	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	89	G-150, J51	V b	10445他	胴	1	-	縦ナゲ	条文文	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	90	G-150	V b	10568他	胴	1	-	縦ナゲ	条文文	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	91	K53	V b	12995	胴	1	貝殻条 横ナゲ	横ナゲ	貝殻埋め突文、条文文	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	92	F35	V	13795	底	1	ナゲ	ナゲ	貝殻埋め突文	にぶい・赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	93	G50	V b	11317	底	1	縦ナゲ	縦ナゲ	条文文	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	94	G51	V b	14724他	底	1	ナゲ	ナゲ	-	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	95	G51	V b	12415	底	1	丁字ナゲ	ナゲ	縦条文文	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	96	G51	V b	10536他	底	1	丁字ナゲ	ナゲ	縦条文文	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm
84	97	151	V b	8538	底	1	ナゲ	ナゲ	縦条文文	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	口径 16.4 cm